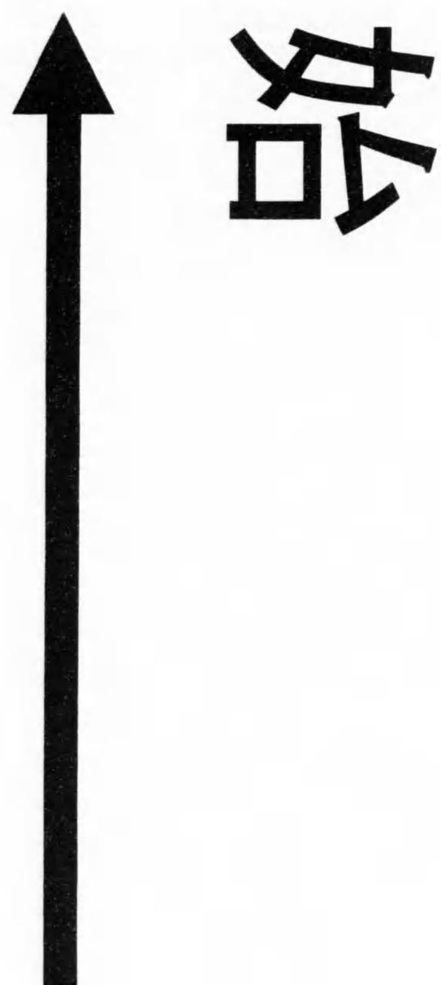
911.32
.12
4 (2)
911.32-E12-4ㄅ
1200500756070



911.32
E12
4

日本古典讀本

X

芭蕉

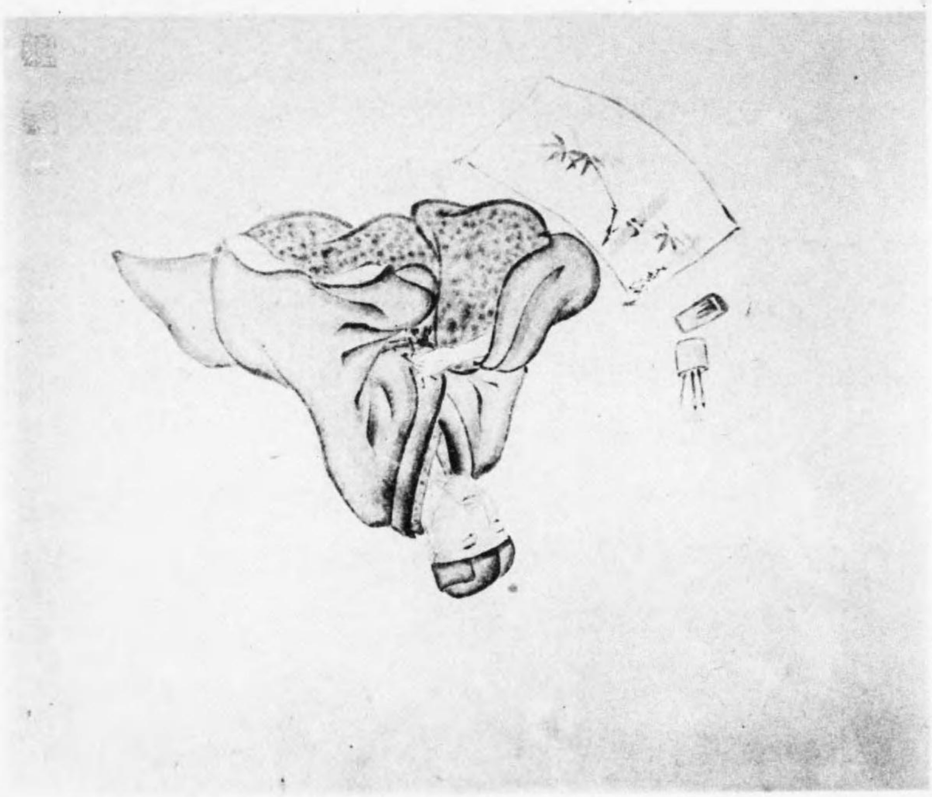
穎原退藏

日本評論社

芭蕉が竹を描いて居る像（海老原天郎氏蔵）

移風筆　芭蕉翁像

に属した作品で、竹の葉中の屋竹は、芭蕉自身の筆は芭蕉生と鑑定された葉中の屋竹は、芭蕉自身の筆は芭蕉生と推定されて居る。竹は、芭蕉が竹を描いて居る像であろうが、前述の風が親しく師の傍に侍して描いたものらしく思はれる。竹の葉は芭蕉が好んだもの。竹の子や雑多時の葉のようなこびしく」と題した自画賛もある。



（薩摩本草）　蕪菁

中書，がるかの蕪を居ゑた揃かが蕪菁
に蕪の身自蕪菁，は竹墨の中軸たへ麗に
壬蕪菁は書のこさ助。る居ゑた実靈を
もたん紙に接に接の瞰くし紙が風紙前
。ゑ寄の綿の時タ雑タ手の竹ゝくしらの
「ひ」と解が蕪菁は書の竹。さだは思ろの

747
185

はしがき

本書は勿論專門的な研究の發表ではない。一般國民の教養に資する事を目的としたので、言はば全く啓蒙的なものである。しかしその爲に讀者を中學生扱ひにする意は少しもない。たゞ本文篇にせよ研究篇にせよ、なるべく簡略かつ平易にこれを說述しようと試みただけである。隨つてこれは今日に於いて著者が達し得た芭蕉に對する理解をそのまゝ示すものであり、その點で專門的な立場からの批判をも當然受けねばならない。けれども著者の望む所は、さうした研究の成果を問はれるよりは、この書を通じて一人でも多く芭蕉の精神を語るものを持ちたい、そこに意のある事は言ふまでもないのである。

本文篇については發句・連句・文章の各篇毎に凡例を添へたから、別に述ぶべき事はない。ただ連句篇には今少し多くの作を收める豫定であつたが、紙數の制限上止むを得ず割愛せねばならなくなつた。

研究篇は芭蕉の人間としての成長を明かにする事を主題とした。勿論芭蕉の作品を外にして俳

人芭蕉の存在はない。けれども芭蕉の人間を外にしてまた芭蕉の藝術もあり得ない。芭蕉の俳諧を正しく理解する爲に、彼の人間的成長の跡を辿る事は必然に要求さるべき用意である。而してそれは言ふまでもなく獨立した傳記の研究ではなく、常に作品との相關した歩みの中にながめられねばならぬ。本書がその仕事をどれだけに成し遂げ得たかは問ふ所ではない。たゞ少くともさうした一の努力として認められるれば幸である。

本文篇の稿が成つた日、私は伊賀の上野に芭蕉誕生の地を訪ねた。數年前訪ねた頃までは、まだ古びた家に人が住んで居たが、いつの間にか全く廢屋になつて居た。中にはひる事も出來なかつた。そこから赤坂の上へ引返して、私は長い間服部川の流れる田野を眺めて居た。その間の細い路を辿りながら、家郷を出て行く芭蕉の後姿などが想はれた。遠くの山にはまだ櫻が眞白く咲き殘つて居た。その翌日から私は研究篇の稿を起したのである。今度この書が愈々出來上つたら、それを携へて義仲寺の墓に詣でたいと思つて居る。

本書を成すについて、先輩諸家の研究・著書に負ふ所は極めて多い。記してその學恩を深く感謝する。

昭和十四年初夏

潁原退藏識

目次

はしがき……一
本文篇……一
發句篇……三
連句篇……七
一　木枯の卷……八
二　初時雨の卷……九
三　梅が香の卷……一〇
文章篇……一三
一　野ざらし紀行……一三
二　笈の小文……一三

三　奥の細道……一四四
四　嵯峨日記……一七三
五　幻住庵記……一七六
六　芭蕉を移す詞……一八一
七　閉關の記……一八三
八　柴門の辭……一八四
九　悼二嵐蘭一詞……一八五
一〇　澁笠の銘並序……一八六

研究篇……一八九

一　家……一九一
二　亡命……二〇一
三　上京と『貝おほひ』……二一一
四　東下……二二二
五　芭蕉庵……二三四
六　旅……二五一
七　閉關……二七一
八　終の旅……二八四
附錄　參考書目……二九一
一　傳記……二九一
二　作品……二九八
三　註釋……三〇六
四　評論その他……三二二

本文篇

發句篇

凡例

一、本篇には芭蕉一代の作にかゝる發句の中から、特に代表的なもの、若しくは注意すべきものを選び、これに簡單な評釋を附した。

一、句の排列は研究篇と相對照して、蕉風の成長を理解するのに便する爲、句作の年代に從つた。たゞし確實に年代を推定し難いものは、最後に一括して揭げ、この分は四季類題別に排列した。

一、研究篇で便宜句の解釋評註に及んだものは評釋を略し、若しくはこれを特に簡單にして、研究篇參照と附記した。たゞし右の如く附記しないものでも、研究篇を參照する事によつて理解を助けられるものはなほ多いから、適宜參照の勞をとられたい。

一、文章篇の紀行・日記等に出て居る句は、詞書とすべき本文を略したものが多い。それらの句は文章篇を參照されたい。

一、句の下に括弧してその出典を記したが、出典が二三以上あるものはその最も年代の古いものだけをあげた。たゞし詞書・句形の適當なものに從ふ爲、特に年代の新しいものをあげた場合も少くない。

一、頭註欄には句形・詞書の異同、有無等について記し、間々語句の註を施した。

○以下寛文年代作

姥櫻咲くや老後の思ひ出（佐夜中山集）

月ぞしるべこなたへ入らせ旅の宿（同　上）

右二句は文獻の上に見える芭蕉の句として最も古いものである。研究篇參照。

あち東風や面(1)めんくさばき柳髪（續山井）

まづ彼方此方を東風に言掛け、又面々捌きといふ語を柳の髪を捌く意にきかせたのが句の面白味である。即ち緣語掛詞の巧みな配置が興味の中心となつてゐる。句意は東風が吹いてあちこちと靡く柳の髪は、言はゞ面々さばきだといふのである。

初瀨にて人こ花見けるに

(2)うかれける人や初瀨の山櫻（同　上）

古歌の文句をかりて、それを花見に浮かれる意にもぢつたのが滑稽である。

五月雨に御(お)物(もの)遠(どほ)や月の顔（同　上）

一句の意は五月雨が降りつゞく爲に、長い間月を見ないといふのであるが、それを久しく人に無沙汰した時の「御物遠」といふ語を用ひ、又「月の顔」といつた所にをかしみがある。

(1)面々捌は各自めいめいに事を處置すること、あちこちだから面々であり、捌を髪をさばく（梳く）にきかせたのである。

(2)千載集「うかりける人をはつせの山おろしはげしかれとは祈らぬものを　源俊頼」による。

(3)當時の書翰などに御無沙汰の意で多く用ひた語。

寢たる萩や容顔無禮花の顔（同　上）

寢て居て行儀が悪いから、容顔美麗といふべきを、無禮ともぢつたのである。

霰まじる帷子(1)かたびら雪は小紋かな（同　上）

帷子雪に霰が交つて降るのを、帷子の緣で小紋の模樣に見立てた洒落である。

雲(2)と隔つ友にや雁の生別れ（芭蕉翁全傳）

研究篇參照。

きても見よ甚兵衞が羽織花衣（貝おほひ）

女夫(めを)鹿(とじか)や毛に毛が揃うて毛むつかし（同　上）

右二句研究篇參照。

年(3)は人にとらせていつも若夷(わかえびす)（千宜理記）

若夷は惠比壽神の像を摺つた紙の札で、元旦にそれを賣歩いた。その札を門戸に貼つて福を祈つたのである。句は若夷の福神の像は、毎年同じやうな若々しい福相をしてゐるが、年は人にだけとらせて自分はいつまでも若いのだらうと興じた作。

命(4)こそ芋種よ又けふの月（同　上）

命あつての物種で、今年もまた無事で名月を見るよとの意。それを芋名月の緣で芋種ともぢつたのが滑稽である。

○以下延寶年代作

(3)一葉集には「年や人にとられていつも若夷」とある。

(4)「命は物種」といふ諺による。

(1)たかうなは笋。
(2)源氏物語、横笛の巻「御簡のおひいづるに食ひあてんとて笋をつと握りもちて、雫もよゝとくひぬらし給へば、云云」による。
(3)この句炭俵・別座敷等に出づ。
(4)杉形は下が擴がり上が尖つて三角狀をした形。米俵など積み上げた狀にいふ。杉の樹の梢の恰好に似てゐるからである。
(5)伊勢物語「人知れぬわが通ひ路の關守はよひよひごとにうちも寢ななん」

天秤や京江戸かけて千代の春（當世男）

天秤の兩方が平均して居る如く、京も江戸も同樣におしなべて目出度い千代の春だといふのである。「天秤」と「かけて」との緣語仕立が一句のやま。

たかうなや雫もよゝの篠の露（續連珠）

代々の篠の露の滴りをうけて、こゝにすくすくと生ひ出た笋であるよとの意。それを源氏の文句を取つて仕立て、かつ「よゝ」を代々と節々とに掛けたのが作意である。同じ源氏の趣をとつた嵐雪の句「竹の子や兒の齒ぐきの美しき」に比すれば、風調の相違がよく分る。

雲を根に富士は杉形の茂り哉（同　上）

普通の山であると、雲を頂としてその下方に杉形の茂りがあるわけだが、富士は却つて雲を底部として、その上方に杉形をなして茂つて居るとの意。富士の高さを理知的に言つたのである。

猫の妻竈の崩れより通ひけり（六百番發句合）

句合の判詞に「へつひの崩れより通ふは、在原ののらにや、宵々ごとにうちもねうくとこそ啼くらめ」とある通り、伊勢物語によつた滑稽の作。昔業平は築地の崩れから忍んだといふが、これは猫の戀だから竈の崩れから通ふとふざけたのである。

近江蚊屋汗やさゞ波夜の床（同　上）

近江にさゞ波の緣語を取合せた作。夜の床に近江蚊帳が釣つてある。肌に流れる汗はさしづめさゞ波ともいふべきだとの洒落である。

(1)鏡師の名。人倫訓蒙圖彙（元祿三年刊）、鏡師の條に「室町二條上ル町、人見佐渡」の名が見える。出雲守はその先代か。
(2)「あら何ともなや」は謠曲に屢々出て來る文句である。
(3)芭蕉句選に「御宇かとよ」とあるが、古い出典とすべきものは、江戸廣小路の外高名集にも「御宇とかや」とあり、この方を正しいとせねばならぬ。
(4)謠曲、杜若「仁明天皇の御宇かとよ、いともかしこき勅をうけて、云云」

秋來にけり耳をたづねて枕の風（同　上）

「耳をたづねて」が一句の山で、暗に「秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる」の古歌をはたらかせた趣向である。枕の下にしのびよる秋の風、それを目には見えぬから、耳を尋ねて來たと言つたのである。

今宵の月磨ぎ出せ人見出雲守（同　上）

人見といひ出雲といひ、雲を出た月を人が見るといふ意に緣があるので、そこを捉へて趣向としたのである。月を鏡に見立てて、これを磨ぎ出せと言つただけではない。

あら何ともなやきのふは過ぎて河豚汁（江戸三吟）

河豚汁を食つて心配になつて居たが、別狀なく今日も生きて居るといふのである。謠曲の文句を巧みに用ひた輕妙さを見るべき作。

庭訓の往來誰が文庫より今朝の春（江戸廣小路）

庭訓往來といへば昔寺子屋での教科書である。その巻頭が新年の賀狀に始まつて居るので、誰の文庫から春が立つだらうと想ひやつたのである。

内裏雛人形天皇の御宇とかや（同　上）

内裏雛の優しく尊いさまを言つたのであるが、これも謠曲の口調に倣つた所が談林風である。

水學も乘物貸さん天の川（同　上）

水學は舟に特殊の細工を仕掛けたり、又は水がらくりに妙を得た人の名で、談林の俳諧や元祿・寶永頃の浮世草子等に屢々散見して居り、當時その術で名を知られて居たのである。句は年に一度の逢ふ瀬であるから、萬一天の川の水が漲つて越しかねるやうな事でもあつたら、水學も例の機關をしかけた舟を貸して渡すであらうとの意。普通の人なら星に小袖を貸すだけであるが、こゝに水學を案じつけて「乘物貸さん」と言つたのが得意の所である。

(1)七夕に貸小袖といつて衣類を曝すことがある。

阿蘭陀も花に來にけり馬に鞍（江戸蛇の鮓）

江戸時代に長崎に來舶した阿蘭陀人が、江戸に出府して將軍に謁する事があつた。それは多く春に行はれる。句は阿蘭陀人も馬に鞍おいて、江戸の花を見にやつて來たといふので、國威を謳歌する意も籠つてゐる。たゞしこの句も例の謠曲の文句取が、俳諧たるべき要素となつてゐる事を注意せねばならぬ。

(2)謠曲、鞍馬天狗「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍」。もと頼政の歌「花咲かば告げんといひし山里の使は來たり馬に鞍おけ」によつた文句。

於春春大なる哉春と云云（向之岡）

句はたゞ新春の豐かなさまを、漢語調で勿體らしく述べただけであるが、延寶末年からの漢語調傾向を見る上に注意すべき作。

夏の月御油より出でて赤坂や（同　上）

夏の夜の短くて、月も出たかと思へばすぐ明けてしまふのを、御油から出て赤坂に入る間しかないと喩へたのである。東海道の五十三驛中で、驛間の距離の最も短い御油・赤坂を比喩の種にしたのが一句の作意である。これを御油・赤坂の間で夏の月を眺める實景として解するのは當らない。談林時代に喜ばれた一種の見立の句である。

(3)夏の月集に「御油を出て赤坂までや夏の月」とあるは別案か。なほ下五を「赤坂か」と傳へたものもある。

(4)共に三河國にある東海道の宿驛。その間がわづか十六町しかない。

愚にくらく棘をつかむ螢かな（東日記）

「愚にくらく」は愚かで思慮に明るくない意。それに夜の暗さをもかけて居る。螢を捕へようとだけの一心で、よくも見定めずに手を伸ばすと、つかんだのは螢でなくて棘だつたといふのである。勿論老莊的な寓意を寫して居るので、句の善惡よりも當時の傾向を見るべき作として注意される。

五月雨に鶴の足みじかくなれり（同　上）

五月雨に水深が增した爲に、鶴の脛が短く見えるのを、そのまゝ鶴の脛が短いと言つたのが興である。而してそこに例の莊子の寓言をふまへたのが、更に句の眼目となつて居る。

枯枝に烏のとまりたるや秋の暮（同　上）

後に中七字を「烏のとまりけり」と再案した形で汎く知られて居る。最初「烏のとまりたるや」と字餘りにしたのは、まだ談林の餘臭を存してゐる點である。しかし內容は全く談林調を脫して、寒鴉枯木の閑寂枯淡な境地をそのまゝ詩化しようとして居る。研究篇參照。

(1)莊子、駢拇篇「長者不レ爲レ有レ餘、短者不レ爲レ不レ足、是故鳧脛雖レ短續レ之則憂、鶴脛雖レ長斷レ之則悲」

(2)元祿二年の曠野に中七を「烏のとまりけり」として再錄された。

いづく時雨傘を手にさげて歸る僧（同　上）

傘を手にさげて僧が歸つて行く。こゝは雨は降らなかつたが、何處で時雨に逢つたのだらうといふのである。傘に時雨を想ひやり、それに僧の姿を配したのは、既に元祿の蕉風と趣を同じくして居る。

○以下天和元年作

(1)すだくは集まるの意。

(2)在原行平の歌「わくらばにとふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶと答へよ」をふまへて居る。

(3)消船集に「佗びてすめ月佗網笠の窓を家として」とあるのは、武藏曲のこの句の前に「うかれ行月網笠の窓を家として　角止」といふ句があるのと混同した誤である。

(4)三冊子によれば後に上五「芭蕉野分して」を「芭蕉野分」に改めたといふ。

藻にすだく(1)白魚やとらば消えぬべき（同　上）

藻のあたりに白魚が群れて居る。そのかぼそく透き通つた身體は、手にすくひ上げたら忽ち溶けて消えてしまひさうだとの意。「藻にすだく」といひ、「とらば消えぬべき」といひ、雅語を用ひて和歌の幽玄にならはうとして居る點が、特に注意されねばならぬ。

月をわび身をわび拙きをわびて、わぶ(2)と答へむとすれど問ふ人もなし、なほわび〳〵て

佗(3)びてすめ月佗齋が奈良茶歌（武藏曲）

詞書は自分が無能無才で、わびしい生活をして居るさまを述べたのである。しかもそのわびしい生活を、訪ねてくれる人もないので、なほ一人わびしさに堪へずしてよんだといふのである。月佗齋は月に佗びて住んでゐる世捨人といふ程の意で、それを茶人などの名前めかしくした芭蕉の造語。勿論芭蕉自身をさしたのである。奈良茶歌は酒を呑んで賑かに歌ふ唄に對して、奈良茶飯を食ひながらわびしく口ずさむ歌の意で、これも芭蕉の造語であらう。一句の意は所詮わびしいこの境涯である。月を見ながら奈良茶歌でも口ずさみながら、わびしく獨りで住めよと、自問自答した體である。句體にはなほ談林時代の異風が殘つて居るが、枯淡なわびの生活に徹しようとする芭蕉の心境が窺はれる。

茅舍の感

芭(4)蕉野分して盥に雨を聞く夜哉（同　上）

戸外には芭蕉の葉が風に吹かれてばさ〳〵と騷いで居る。屋內には盥に雨洩りの音がぽとぽとと聞える。野分の夜のわびしい感じである。前書の茅舍とは卽ち深川の草庵で、そこに芭蕉が植ゑてあつたのである。

○以下天和二年作

(1)續深川には「櫓の聲に腸氷る夜や涙」、芭蕉翁發句集には「櫓聲波を打つて腸氷る夜は涙」。なほ夢三年には「寒夜辭」と題した短文が前についてゐる。

深川冬夜の感

櫓(1)の聲波を打つて腸氷る夜や涙（同　上）

當時はまだ家もまばらな深川の事である。海上の櫓聲もすぐ枕近く聞えたであらう。寒夜に軋む櫓の音が、浪を打つて腸も氷るやうな寂しい感じがする。薄き衾をかこちながら、思はず涙するといふのである。佶倔な調は當時の句風であるが、却つて斷腸の迫つた思ひにふさはしい。

梅柳さぞ若衆かな女かな（同　上）

梅の凛々しく美しいのは誠に若衆に比すべく、柳のなよやかに婀娜めいて居るのは全く女の姿だといふのである。

(2)其角の句「草の戸に我は蓼くふ蛍哉」に和したのである。

和ニ角蓼蛍句ニ

朝顏に我は飯食ふ男かな（虛　栗）

其角の句は我は甘きよりも却つて蓼の辛きを好み、晝は出でず夜を世界とすると、その境涯を螢に比して自ら奇を衒つたのである。芭蕉はこれに對して、自分はそんな變つたまねなど出來ない。人並に夜は寢て朝は早く起き、朝顏の花でもながめながら飯を食ふ平凡な男だと

(1)芙容文集によれば、其角に宛てた芭蕉の手紙があつて、尊朝親王の御作と傳へる飲酒一枚起請の全文を寫し、その末に「貴丈つね〳〵大酒をせられいき故、此御文句を寫して大酒御無用存ぜ。仍而一句」とあつて、この句を與へて居る。

(2)「香稻啄餘鸚鵡粒、碧梧棲老鳳凰枝」の句。これは實は「鸚鵡啄餘香稻粒、鳳凰棲老碧梧枝」といふべきを、その平凡を忌んで故らに語句を倒置し、景情を複雜ならしめたのである。

(3)貧山は貧寺の意。

(4)偃鼠はどぶ鼠。莊子、消遙遊篇に「鷃鄃巢二於深林一不レ過二一枝一、偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一」

答へたのである。飯食ふといふのに、其角(1)が夜を酒に過すのを諷する意がある。獨立した一句としては、寧ろ平凡さを衒つたとさへ見られるが、其角の奇矯を抑へた所に妙味は存するのである。

憶二老杜一

髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子ぞ（同　上）

杜甫の詩句「杖レ藜嘆レ世者誰子、泣血迸レ空回二白頭一」、「老去悲秋强自賀、與來今日盡君觀、羞將二短髮一還吹レ帽」等によつて案を得たのであらう。初句「風髭を吹いて」といふべきを、故らに「髭風を吹いて」と言つたのも、杜甫(2)の秋興八首中の句で知られた倒裝法に倣つたのであるが、「髭風を」といふ表現によつて、粗犷の風に靡くさまがはつきり浮んで來る。句意は蕭殺たる風に髭を吹かれながら、暮秋を嘆するのは誰だらうといふのである。杜詩に擬して杜甫を憶つたので、當時の漢詩調の代表的な作。

貧山の釜霜に啼く聲寒し（同　上）

霜夜に鳴る鐘の音は、古くから詩歌によまれて居るが、これは貧寺の廚に鳴る釜の聲である。「鳴る」といはずに「啼く」と言つたのも、咽ぶやうなさまが想はれて面白い。

茅舍買レ水

氷苦く偃鼠が咽をうるほせり（同　上）

前書の茅舍は深川の芭蕉庵である。あの邊は低濕の地で海に近く、水質が惡い爲飲用水はわざ〳〵買求めたのであらう。寒中には買つた水もすぐ氷る。その氷の一片をほろ苦く口に含んで、纔かに渴を醫したといふので、やはり貧しい生活のさまである。莊子をふまへた所が當時の調である。

(1)西清詩話に「天聖間、閩僧可士有二送レ僧詩一云、一鉢卽生涯、隨緣度二歲華一、是山皆有レ寺何處不レ爲レ家、笠重吳天雪、鞋香楚地花、他年訪二禪室一、寧憚二路岐賒一、亦非二肉食者能到一也」

○以下天和三年作

(2)世捨酒は世捨人が閑に居て飲む酒の意。

(3)水の友には書讃として詞書があるが、句意にあまり關はらないから今省いた。なほ三册子・一葉集等によれば、この句最初は「夏馬ぼく〳〵我を繪に見る心かな」、次に「夏馬ぼく〳〵我を繪に見る心かな」、次に本文の如く再案三案したものらしい。泊船集に下五を「枯野かな」としたのは全く誤である。

夜着は重し吳天に雪を見るあらん（同　上）

西清詩話・詩人玉屑等に見える詩句によつた作。寒夜に衾を重ねたのを笠の重きに比し、これでは雪でも降る事であらうと言つたので、詩句を裁ち入れた所に天和の口質が見られる。

うぐひすを魂に眠るか嬌柳（同　上）

柳の糸がなよやかに垂れ下つて眠つて居るやうである。折から鶯が啼く。そこであの柳は鶯を自分の魂として眠つて居るのではあるまいかと疑つたのである。柳から拔け出た魂を鶯に見立てたのは、例の莊子が夢に蝶となつた故事を俳諧に轉じた行方である。

桑の實や花なき蝶の世捨酒（同　上）

蜜をたづぬべき花も散つてしまつた。その頃に桑の實を吸ふ蝶を見ての感慨である。もはや花の盛りも過してしまつた蝶が、せめてはこの桑の實を世捨酒にと思つて、わびしさを慰めて居るのだらうといふ程の意。

馬ぼく〳〵我を繪に見る夏野哉（水の友）

ぼく〳〵はゆる〳〵と歩くさまにいふ語。炎天の下を馬で行く、しかも馬はのろり〳〵と歩いてはかどらない。乘つて居る身にして見れば暑くてもどかしくて堪らないのだが、さてそ

の我を繪に見る心になつて見ればまた面白い趣である。初案に下五を「心かな」と置いたのは、自己を客觀する態度を特に强調したのであるが、再案に「夏野かな」とした方が、却つて自分を離れて自分を眺める心のゆとりが深く味はれる。「心かな」と言つてしまつては露骨になる。

○以下貞享元年作

野ざらしを心に風の入む身かな（野ざらし紀行）

『野ざらし紀行』最初の句である。かうして旅にさまよひ出れば、路傍に一片の白骨と化してしまふかも知れない。それを心に覺悟して出立すると、秋の風が寒々と身に沁みる事よといふのである。悲寥の氣に充ちた句である。以下紀行中の句については、特に文章篇を參照されたい。

猿(1)を聞く人捨子に秋の風いかに（同上）

哀猿の叫びに腸を斷つた詩人・歌人は多いが、それらの人にこの秋風に泣く捨子の聲を聞かせたら如何であらう。猿の聲と捨子といづれに悲しみの情は深いだらうといふのである。芭蕉自身の堪へ難い悲痛の感をかうして洩らしたのである。

馬上吟

道(2)のべの木槿は馬に食はれけり（同上）

芭蕉の乘つて居た馬が、路傍の木槿を何かの拍子にぱくりと一口食つてしまつたのである。眼前の卽景をそのまゝの句。「出る杭は打たれる」といふ敎訓的の寓意を以て解するのは誤つて居る。許六は『歷代滑稽傳』に、談林を見破つて始めて正風體を見囿け、躬恒・貫之の本情を探つた句だと稱して居る。從來の技巧本位から素直な自然觀照にうつつた點を重視した評である。

(1)三册子によれば、初め「馬上眠からんとして殘夢殘月茶の烟」としたのを、次に上五を「馬に寢て」とし、更に「月遠し茶の烟」と改めたのだといふ。

(2)伊達衣に「道の邊の木槿は馬の食ひけり」、歷代滑稽傳に「道の邊の木槿は馬に食はれたり」、一葉集に「道ばたの木槿は馬に食はれけり」などとあるが、野ざらし紀行の句形を正しいとせねばならぬ。

馬(1)に寢て殘夢(ざんむ)月遠し茶の烟(けぶり)（同上）

紀行の本文にある通り、杜牧の早行詩によつた作である。馬上になほ殘夢を結びつゝ小夜の中山にかゝつた。月影は西の空に遠く薄れ、あたりの人家には炊烟が立ち登る。曉起早行のさまが見るやうである。

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜（同上）

母のかたみの白髮を拜んで、悲しみの涙ははふり落つる。その白髮を手に取つたら、熱い涙の雫に秋の霜と消えるであらうといふのである。悲痛の情が溢れて居る。

ある坊に一夜をかりて

碪打ちて我(2)に聞かせよや坊が妻（同上）

吉野の宿坊に一夜を明かした。「み吉野(3)の山の秋風さよふけて古里寒く衣うつなり」の古歌も思はれる。今宵こゝで碪を聞きたいものだと、坊の妻に所望したのである。勿論それを口に出して言ふのではない。心中での感興である。

不破

秋風や藪もはたけも不破の關（同上）

(2)嚮野には「我に聞かせよ」とあるが、續虛栗にも「我に聞かせよや」とあり、や字のある方に從ふべきである。

(3)新古今集の歌。

(1)「人住まぬ不破の關屋の板びさし荒れにし後はたゞ秋の風」

(2)孤松集に「曙や白魚の白きこと一寸」。なほ笈日記・熱田三歌仙等には「雪薄し白魚白きこと一寸」とあつて、それが初案の形であつた。

(3)泊船集・三册子等によれば、後に「狂句」の二字を削つて上五を「木枯の」だけに改めたといふ。

(4)竹齋は鳥丸光廣卿の作といはれる『竹齋物語』の主人公、山城國に住む藪醫者で狂歌を善くし、江戸に下る途中尾張に止まつて狂詠を殘した。

新(1)古今集の歌をふまへて居る。昔の關の址は藪となり畠となつて、今はたゞ秋風が物悲しく吹いて居るだけである。そこに立ち盡した芭蕉は、この藪も畠も古への不破の關のあたりだなと、深い感慨に耽つたのである。

曙

や(2)白魚白きこと一寸（同　上）

桑名の海岸での吟である。四邊はまだほの暗い曉方、濱に打上げられてある白魚が、くつきりと白く浮上つて見える。それを「白き事一寸」と、白魚の大きさを言つたのが誠に絶妙の措辭で、曙の大景の中に白魚の纖細な白さ淸らかさが、眼にしむやうに感ぜられる。因みにいふ、白魚は俳諧では春の季題になつて居るが、句は冬季の吟である。それで初案には「雪薄し」と當季の景物を言添へたのであらう。しかし句の生命はさうした形式的な約束よりも、曉のひきしまつた爽かさの中に、白魚の白さ淸らかさを感ずる所にある。再案に「曙や」と改めて、季の問題に拘泥しなかつたのは流石に芭蕉である。

狂(3)句木枯の身は竹(4)齋に似たる哉（同　上）

この句は『多の日』にも右の形で出て居り、「狂句」の二字を句中の語とする說と、詞書の續きと見る說とがある。しかし『野ざらし紀行』の方では、これを本文の一部と見る事は無理で、やはり「狂句」を含めて一句とせねばならぬ。たゞしこの二字は句全體に對して、一種の前書の役目を勤めるものとして句頭に据ゑたので、卽ち昔竹齋はこの國で狂歌を咏じたが、自分は狂句をよまう、さてその狂句はこれ〳〵だといふ程の意である。さういふ異風の句體に、なほ談林の餘臭を存するとも言へよう。それを嫌つて後にこの二字を去つたものと思はれる。句意は木枯に吹かれながら、飄然として名古屋にやつて來た自分の身は、誠に古への竹齋に似てゐる事よといふのである。なほ連句篇參照。

(1)鯵節物語には「尾張の國熱田にまかりける頃、人〻師走の海見んとて舟さしけるに」と詞書がある。

海暮れて鴨の聲ほのかに白し（同　上）

海(1)邊に日暮して

海面はすでに暮れて蒼暗い闇が迫つた。その中に鴨の聲だけが暮れ殘つて聞えるのである。その聲を直ちに仄白い感じに聞き取つた直觀的な句。「石山の石より白し秋の風」に、風を直に白しと言つたのと同じである。五五七のリズムもその感じを端的に表現するにふさはしい。

年暮れぬ笠着て草鞋はきながら（同　上）

旅に漂泊する境涯をそのまゝに言つたのである。芭蕉が深い感慨をこめながら、自分の生活を語つて居るのだ。聞く人の心にもまた限り無き悲寥の感が迫る。

春なれや名も無き山の薄(2)がすみ（同　上）

奈良に出る途中での吟。三笠山とか春日山とか名の有る山ではない。ふだんならばたゞ見過す山も、流石に春であるよ、その薄霞した風情に心ひかれるといふのである。自然への深い親しみが籠つて居る。

水(3)取や氷の僧の沓の音（同　上）

「氷の僧」は紀行の原文のみならず、芭蕉の眞蹟や『芭蕉庵小文庫』等にもさうなつて居る

○以下貞享二年作

(2)芭蕉庵小文庫その他諸集に「朝がすみ」とある。

(3)水取は二月朔日から二七日間奈良二月堂で行はれる修法。その間東大寺の僧が參籠して晝夜共に行法がある。又七日と十二日の夜に水屋の井の水を汲んで年中牛王に貼すべき水とする儀があるので、これを俗に御水取と呼ぶ。

が、これはどうしても「籠の僧」の誤にちがひない。恐らく芭蕉自身「籠の僧」といふのを「氷の僧」と聞き違へ、しかもそれを面白い言葉だと思つてそのまゝ用ひた誤であらうと思はれる。（「氷の僧」を正しいとして解した舊説もあるが、種々の點から見て從ひ難い。やはり『芭蕉翁發句集』に「こもりの僧」と正して居るのが穩當である。）句は若狹井の水を汲む後夜のさまである。春とはいへまだ餘寒の烈しい深夜、廊下を通る僧の沓音が高く冴え返つて聞える。僧徒は皆白い紙衣を着して居るので、大松明の燃え上る光に、その白い清淨な姿も闇の中にパッと照らし出される事だらう。靜寂、森嚴の氣がおのづから迫つて來る。

山路來て何やらゆかし菫草（同　上）

紀行によると大津に行く途中の山道での吟である。箱根山での吟だとか、尾張の白鳥山での作だなどと傳へたものもあるが、場所は何處でもよい。旅人が山路でふと見つけた一菫の菫草に寄せた愛情が、「何やらゆかし」といふ仄かな表現に一層なつかしく味ははれる。

湖水の眺望

辛崎の松は花より朧にて（同　上）

湖水の面も湖邊の花も、すべて朧々と霞んだ春の夜である。中にも辛崎の名高い古松は、花よりも朧で一しほ趣が深いといふのである。この句は形式上發句に必要とされる切字がないので、古來これについて說が多いが、「朧かな」でなく「朧にて」で終つたのは、要するに句の餘情を主とした爲である。

杜國に贈る

白罌粟に羽もぐ蝶の形見かな（同　上）

尾張で門人杜國に逢ひ、別れる時の吟である。杜國の事は『笈の小文』にも見え、又『嵯峨日記』には杜國を夢に見て悲しむことがある。芭蕉の數多い門人の中でも、特に深く愛されて居た人である。その杜國と別れるに忍びない切々の情をのべた句で、白罌粟の花に遊んで居た蝶が花を去らうとする、別離に堪へないあまり、遂に羽をもいで形見に殘して行くといふのである。白罌粟が杜國、蝶が芭蕉である事はいふまでもない。「羽もぐ」とは實に悲痛な心の表現で、杜國に對してもつて居た芭蕉の愛情が、どんなに深いものであつたかが知られる。

ゆく駒の麥になぐさむ宿りかな（同　上）

甲斐の山中での吟。人は主じの溫いもてなしぶりにゆつたり寬いで居る。自分たちの乘つて來た馬も、穗麥の御馳走にでもなりながら背戸のあたりに遊んで居る。馬が慰むといふのに、自ら人も慰むさまが思はれる。

雲をり〳〵人を休むる月見哉（春の日）

意水に宛てた芭蕉の手紙に、「西行のなか〳〵にときぐ〵雲のかゝるといふ心を持ちて、雲折折人を休むる月見かな。右之句にて今年の名月はすまし申候」とある。歌は兼好法師が「花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは」と言つた心もちに近いが、句は清光の美しさに醉うた心の興奮を、裏面から言ひ現はしたのである。その說明的な言ひ方が、何となく月並的

(1)鰹箱物語・熱田三歌仙には上五「何とはなしに」とあり、三冊子によればそれは初案の形らしい。

(2)孤松集にはこの下五「朧かな」とある。

(1)孤松集等には「人を休める」、墨吉物語には「人休まする」とある。
(2)意水は何人か未詳。
(3)山家集「なか〳〵に時ゝ雲のかゝるこそ月をもてなすかぎりなりけれ」

な臭味を感じさせる。芭蕉の道にもかうした危險な一筋がある事を忘れてはならない。しかし芭蕉はその危ふい一筋の上に、いつも確かな安定を保つてゐる。この句の如きも、今一歩といふ所でふみ止つて居るのだ。それは芭蕉の心の深さのゆゑである。

○以下貞享三年作
(1)曉山集に上五「山吹や」又蓬櫻に中七「蛙飛んだる」。なほこの句の制作年代については、すでに天和元、二年頃に成つて居たとの說もある。

古(1)池や蛙飛びこむ水の音（同　上）

支考の『葛の松原』によれば、この句は最初「蛙飛び込む水の音」といふ七五だけを得て、上五文字を案じて居た時、其角が傍らにあつて「山吹や」とつけた。しかし芭蕉はこれをとらないで「古池や」に定めたのだといふ。山吹では一通りの寫生句にすぎない。蒼く湛へた靜かな池の面に、突然大きな波紋を描いて起る水音、靜と動との交錯がそこには象徴されて居るので、平面的な寫生に終つてない所以である。研究篇參照。

(2)眞蹟に謠曲西行櫻の「毘沙門堂の花盛云々」といふ一節を前に題したものもある。
(3)其角の撰。元錄十年刊。

觀(2)音の蕚(いらか)見やりつ花の雲（末若葉）

『末若葉(3)』に病起の眺望だと言つてある。當時は深川の草庵から、遠く淺草觀音の屋根が望まれたのである。芭蕉の生活を偲ぶべき句。

(4)今日の昔に上五「米買て」

深川八貧のうち

米(4)買ひに雪の袋や投(なげ)頭巾(きん)（雪丸げ）

雪は行にかけたのであるが、この場合その洒落が輕い心もちに應じて面白い。米袋をそのまますつぽり頭巾に冠つて、雪の中を出て行く芭蕉の姿が想はれる。

(5)芭蕉の門人。

曾良(5)(そら)何某このあたり近くかりに居を占めて、朝な夕なに訪ひつ訪はる。

我が食物(くひもの)營む時は柴を折りくぶるたすけとなり、茶を煮る夜は來りて軒をたゝく。性隱閑を好む人にて交り金を斷つ。ある夜雪に訪はれて

君(1)火を焚けよき物見せん雪丸(ゆきまろ)げ（雪丸げ）

芭蕉が雪夜に客を得て、ひどく興じた心もちが見える。「あ曾良か、いゝ時に來た。一人で淋しがつて居たのだよ。ところでお客樣にいいものを見せて上げよう。まあ爐に火でもどんどん焚いて居てくれ。わしはこの庭の雪で、大きな雪丸げをこしらへて見せてあげるよ。」さう言つて芭蕉は庭先に出て行く。

年の市線香買ひに出でばやな（續虛栗）

世にある人は春を迎へる支度に忙しく、いろ〳〵と買物も多い事だらうが、草庵にわび住居して居る自分は、まあ線香でも買ひに出かけようかといふのである。

○以下貞享四年作
(2)續虛栗・俳林良材に「形に似たり」又芭蕉翁發句集に「嵐雪が送りたる正月小袖を着たれば」と詞書がある。

誰やらが姿(2)に似たりけさの春（泊船集）

嵐雪から送られた正月の晴着を着て見た。いつも粗末な着物を着て居る自分とは、何だか人間が變つたやうである。ほんに誰やらの姿に似て居るわいといふのである。「誰やらが姿」といふのが興じて居て面白い。以上數句いづれも當時の芭蕉の生活が偲ばれる。

(1)笈日記に上五「君火たけ」。なほ雪丸げと同じ詞書は續深川・雪の薄・花膾等に見えるが、續虛栗・笈日記等の詞書は短くしてある。

よく見れば薺(なづな)花咲く垣根哉（續虛栗）

どんな小さな自然の中にも、詩人の魂は天地の悠久と造化の機微とを感ずる。垣根に咲いたはかない薺の花にも春の色は滿ちて居る。

草庵

花の雲鐘は上野か淺草か（同　上）

上野・淺草のあたりは今花の盛りである。その花の雲を渡つて鐘の音が響いて來る。それも霞にこもつたやうで、上野の鐘とも淺草の鐘とも聞き分けられない。眠いやうな草庵の長閑さである。

起きよ〳〵我が友にせん寢る胡蝶（己が光）

芭蕉もまた蝶の心である。

露沾公に申し侍る

五月雨に鳰の浮巣を見に行かむ（笈日記）

この五月雨に湖の水嵩も増したらう。そこに漂ふ鳰の浮巣を見に行かうといふ風狂の心である。

畫顔に米搗涼むあはれなり（續の原）

畫顔の咲くあたりに米搗男が暫し手を休めて涼んで居る。その風情をあはれんだのである。祖師の讃といふのは、禪の六祖慧能がはじめ碓踏みをして居たといふ傳說に因んだだけで、特に慧能を詠んだ句ではない。

さゞれ蟹足這ひのぼる清水哉（續虛栗）

清水に足を浸して居ると、小さな澤蟹ががさ〳〵と這ひ上つて來る。清冽な感じ。

(1)續虛栗には「めぐつて」とあるが、眞蹟を初め諸集には「めぐりて」とあるものが多いので、今改めた。雜談集には「丁卯のとし芭蕉庵の月見んとて舟催して參りたれば」と本文があつて、なほ當夜の月見のさまを詳しく述べてある。

(2)まじめな顏といふ程の意。

(3)杜甫の詩句「欲聲聞晨鐘一令人發深省」

(4)笈日記には「狼も一夜はやどせ芦の花」。泊船集には「狼も一夜はやどせ萩がもと」。共に別案の句。

(5)續虛栗には「聽閑」と前書がある。

(6)續虛栗によれば風雪をさして居る。

草庵の月見

名月や池をめぐりて夜もすがら（同　上）

良夜の興盡きぬさまである。

月早し梢は雨をもちながら（鹿島紀行）

紀行の本文に「曉の空いさゝか晴れけるを、和尙起しおどろかし侍れば人々起き出でぬ。月の光雨の音、たゞあはれなるけしきのみ胸にみちて言ふべき言の葉もなし」とある。雲行があわたゞしく月は走るやうで、曉方の木々の梢からは、雨の雫がなほ滴つて居る。

寺に寢てまこと顏なる月見かな（同　上）

寺だけに遊樂氣分の月見とちがつて、殊勝氣な顏をして居る。「まこと顏」が面白い。紀行の本文に「すこぶる人をして深省を發せしむと吟じけむ、しばらく清淨の心を得るに似たり」とあるのに照應して居る。

萩原や一夜は宿せ山の犬（同　上）

臥猪の床といふ事もあれば、やさしい萩の花のもとに不似合ではあるが、山犬にも一夜の宿は貸せよといふのである。

草のとぼそに住みわびて秋風の悲しげなる夕暮、友達の方へ言ひ遣はしける

蓑蟲の音を聞きに來よ草の庵（栞集）

(1)素堂の蓑蟲說の一節。

(2)眞蹟讃に「日にほころびあき花は雨にはたなきけぶけし」と詞書がある。

(3)この句笈日記に大垣の如行亭で菊の畫に讃した句として出てゐるが、それは舊作を流用したのである。

(4)千鳥掛には「はやこなたへといふ露のむぐらの宿はうれたくとも袖をかたしきて御とまりあれやたび人」と、謠曲梅枝の一節を題してある。

(5)鳴海の鍛冶。

蓑虫は「ちゝよ〳〵」と鳴くといふ。素堂も「(1)聲のおぼつかなきを哀れぶ」と言つた。その虫の音を我が住みわびた草庵に聞きに來いと誘つたのである。

草庵(2)雨

起きあがる菊ほのかなり水のあと（續虛栗）

出水に抑へられて居た菊がやつと起直つた。その花の色が仄かに白く見える。草庵の夕べのさまであらう。

(3)痩せながらわりなき菊の莟かな（同上）

ひよろ〳〵と痩せた菊が、痩せながらに小さな莟をつけて居る。「わりなき」の一語が芭蕉の深い主觀を現はして居る。これこそ物の心に通ずる細みであり、又このぬきさしのならぬ一語に表現したのがしをりである。

(4)十月十一日餞別會

旅人と我が名呼ばれむ初時雨（續虛栗）

『笈の小文』の旅に發足する時の吟である。折から神無月の空定めなく、身はこれから行方なき旅路にさまよはうとして居る。しかも詩を思ひ旅を思ふ芭蕉の心は勇み立つて居た。時雨もよひの空さへもこの旅立ちにはふさはしい。早く旅人と呼ばれて見たいものだ。誠に旅に興じ旅を愛する佗び人の心である。

鳴海(5)出羽守氏雲宅にて

面白し雪にやならん冬の雨（千鳥掛）

雪を待つ興である。

鳴(1)海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼く千鳥（笈の小文）

『鯱箱物語』の詞書で闇夜の景は星崎との意が、おのづから句に繫がつて聞える。その星崎の闇の景を見よと言つて、あの千鳥は鳴くのかといふ意。

冬(2)の日や馬上に氷る影法師（笈の小文）

田の中の細道を寒風に吹きさらされながら行く自分の姿である。

旅宿

ご(3)を焚いて手拭あぶる寒さ哉（笈日記）

爐に松葉を焚いて、途中で濡らした手拭を乾かして居る。田舍の旅亭のわびしいさまである。

鷹(4)一つ見つけてうれし伊良子崎（笈の小文）

紀行の本文にある通り、三河の國保美村に蟄居して居る杜國を訪ね、ついでに伊良古崎に遊んだ時の吟である。そこは鷹の渡り來る地として知られて居るが、句は杜國をその鷹に比して、この地に相逢うた嬉しさを言つたのである。

い(5)ざさらば雪見にころぶ所まで（花摘）

興に乘じた雅懷。

(1)畿箱物語には「寢覺は松風の里、呼續は夜明けてから、笠寺は雪のふる日」と詞書がある。

(2)笈日記には上五「すくみ行くや」如行子には「冬の田の馬上にすくむ影法師」合歡のいびきには「さむき田や馬上にすくむ影法師」

(3)ごは松葉をいふ方言。

(4)鵲尾冠に「杜國が不幸を伊良古崎にたづねて鷹の聲を折ふし聞て、夢よりも現の鷹ぞたのもしき」とあるのも、この句の別案と見られる。

(5)笈の小文・曠野等には上五「いざ行かむ」とあるが、それは初案である由三册子に見える。

故里や臍の緒に泣く年の暮（笈の小文）

『千鳥掛』には「歳暮」と題して、次のやうな詞書がある。

代々の賢き人も古郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は初め[1]の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔のなつかしきまゝに、はらからのあまたよはひ傾ぶきて侍るも見捨てがたくて、初冬の空のうち時雨るゝ頃より雪を重ね霜を經て、師走の末伊陽[2]の山に至る。なほ父母のいまそかりせばと慈愛の昔も悲しく、思ふ事のみあまたありて、當時の芭蕉の心情はこれで十分窺はれる。はからず自分の臍の緒を見つけて、血縁骨肉の親を思ふ情にたへないのである。

枯芝やゝかげろふの一二寸（同上）

早春野外の景。

阿古久曾[3]の心は知らず梅の花（白冊子）

句は伊賀の風麥[5]の許での吟だといふ。貫之の「人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香に匂ひける」によつた作意である。歌の言葉の「心も知らず」をそのまゝとつて、今度はそれを、貫之が故郷人の心も知らずとよんだのはどんなわけか知らないがの意としたので、さて自分が今伊賀の舊里に歸つて見ると、花は昔のまゝの香に匂つて居る、人の心も變らう筈はないといふのである。風麥に對する挨拶の心をこめて居る。又貫之といはず特にその童名を用ひたのは、芭蕉自ら幼時を回想する情を含めたのであらう。

（1）四十歳をいふ。即ちこの時芭蕉四十四歳。
（2）伊賀。
○以下貞享五年（元祿元年）作
（3）阿古久曾は紀貫之の童名だと傳へられ、蕪村にも「阿古久曾の指貫ふるふ落花哉」の句がある。
（4）芭蕉句選拾遺には「心もしらす」とある。
（5）小川氏、楷風尼の父。

伊勢神法樂[1]

何の木の花[2]ともしらず匂ひかな（泊船集）

西行の詠と傳へられる「何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ」によつて、伊勢神宮の有難さをよんだ作。

御子[3]良子の一本ゆかし梅の花（笈の小文）

紀行の本文で句意は明かであるが、ゆかしいのは梅ばかりではない。御子良子の清淨な姿に寄せた感興でもある。

菩提山

山寺[4]のかなしさ告げよ野老掘（笈日記）

菩提山は伊勢朝熊山の西の尾にある神宮寺。昔は盛んであつたらしいが、芭蕉の頃はもう淋しい山寺にすぎなかつたのであらう。山中に野老を掘る里人などに向つて、盛衰の悲しさを語れよと言つたのである。

大和行脚の時に丹波市[5]とかやいふ處にて日の暮れかゝりけるを、藤のぼつかなく咲きこぼれける

草臥れて宿かる頃や藤の花（泊船集）

おぼつかなく咲きこぼれた藤の花、それに春の夕の淡い旅愁が象徴されて居る。景情一如の境。

（1）詞書は諸集によつて異るが、今他は略する。
（2）笈の小文等には「花とはしらす」とあるが、花は櫻によれば右の形は初案であるといふ。
（3）大神宮に奉仕して神樂・神饌の事などを掌る少女。
（4）笈の小文には上五「此の山の」とある。
（5）原本「たはむ市」とあるのを今改めた。句は笈の小文にも見える。
（6）徒然草に「藤のおぼつかなきさましたる」

初瀬

春の夜や籠人(こもりど)ゆかし堂の隅（笈の小文）

源氏や枕草子などに描かれた初瀬詣、さては西行が昔の女とめぐりあつた昔物語なども想はれる。

大和草尾村(1)にて

花の陰謠に似たる旅寢かな（曠野）

句を作つたのは吉野の菜摘川に近い所である。それで謠曲二人靜(2)の「所はみ吉野の花に宿かる下臥も」などの文句を思ひ浮べたのであらう。

高野にて

父母のしきりに戀し雉子の聲（同上）

玉葉集に見える行基の歌「山鳥(3)のほろ〳〵と鳴く聲きけば父かとぞ思ふ母かとぞ思ふ」をふまへた作。故郷で臍の緒に泣いた芭蕉は、また高野に詣でて亡き父母を戀ふ情にたへなかつた。

行く春に和歌の浦にて追附たり（笈の小文）

初瀬から吉野、高野と花を訪ねた芭蕉が、和歌の浦でなほ暮春の風趣を賞する事が出來て、その喜びを述べたのである。もう少し遲いと、こゝの春の眺めは見られない所だつた。さう言つて行く春を惜しみつゝ、眼前の風光を愛する情がある。

(1)平尾村の誤。

(2)初めに勝手神社に仕へる女が、菜摘川で芹菜を摘む事がある。

(3)世に高野での詠と傳へる。

○一つ脱いでうしろに負ひぬ衣がへ（同上）

今日は更衣の日である。旅中の事であるから、重ねて居た着物を一枚脱いで、それを荷物に包み込んで背負つたといふのである。無造作な旅の生活が出て居る。輕い句ではあるが、旅に終始した芭蕉の面目が窺はれて面白い。

夏來てもたゞ一つ葉の一葉哉（笈日記）

一つ葉は漢名石韋、和名イシノカハ又イハグミ、俗にヒトツバといふ。山野に自生する羊齒類で、長い柄についた葉が一枚づゝ生える。葉は强靱で多も枯れない。句は夏になつて他の草木は青々と茂るのに、一つ葉だけは相變らず一葉きりしかないといふので、その寂しげな姿にあはれを感じたのである。慈しみ愛する芭蕉の心が動いて居る。そして芭蕉自身の姿が、やはりこの一つ葉に象徴されてゐるのだ。

若葉して御目(おんめ)の雫拭はばや（笈の小文）

鑑眞(3)和尚の尊像を拜しての作。折から爽やかな若葉の色は目もさめるやうである。この若葉の爽やかさから、尊像に對して御目の雫を拭いてあげたいと、芭蕉は心中に思つたのである。まごゝろからの强い實感がにじみ出て居る。

此(4)の境はひわたるほどといへるもこゝの事にや

かたつぶり角ふり分けよ須磨明石（猿蓑）

須磨と明石との間はたゞ蝸牛の兩角の隔たりに過ぎないとの意。蝸牛といふ夏季の景物を用

(1)芭蕉庵小文庫には「せなに負ひけり」

(2)曠野には「山路にて」と前書があり、下五「一つ哉」とある。

(3)紀行の本文參照。

(4)源氏物語、須磨の卷「明石の浦はたゞはひわたるほどなれば云々」間近い程をいつたのである。

ひて、「角ふり分けよ」と興じたので、芭蕉の才の凡でない事を見るべきである。勿論即興的の句。

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月（同　上）

明くれば海から引上げられるのも知らず、蛸は壺の中ではかない夢を貪つて居る。それが短い夏の月のあはれに通つて、こゝに芭蕉の詠歎となつたのである。「はかなき夢を」の下に「見るらむ」が略された形ではあるが、文法的にさうはつきり定めない所に俳諧の複雑な味がある。

五月雨に隠れぬものや瀬田の橋（曠野）

(1)湖邊の風景すべて雨中に隠れ去つた中に、流石に瀬田の長橋だけは虹の如く横はつて見える。

このあたり目に見ゆるものは皆涼し（笈日記）

一望すべて涼味に満つる風景である。何の巧みもなく言下して、いかにも清爽な感じのする句。

鵜舟も通り過ぐる程に歸るとて

面白うてやがて悲しき鵜舟かな（笈日記）

岐阜での吟である。『笈日記』によれば鵜飼を見ようと人々に誘はれ、稲葉山の木陰に席を設けて盃をあげ、「又やたぐひ長良の川の鮎膾」などと興じた後の作であるといふ。最初は鵜飼の面白さに興じて居たが、やがて夜も更け篝火の光も薄く、鵜舟も通り過ぎる程になると、急に淋しさがひし〳〵と身に迫る。歡樂極まつて哀情多き感である。

(1)この句評については其角の雑談集参照。

(2)この詞書諸集によつて異同がある。

(3)菊の香によれば芭蕉の自筆に「面白うてやがて泣かるゝ鵜ぶね哉」とあつた由。それが初案であつたのであらう。

鳴海眺望

初秋や海も青田の一みどり（千鳥掛）

青田から海につゞいて一望たゞ緑の色、初秋の爽涼がおのづから感ぜられる。

賀新宅

よき家や雀よろこぶ背戸の粟（同　上）

鳴海の知足亭でその新宅のめでたさを賀した句。背戸にみのる粟はやがてこの家の豐かさを祝するものである。

初秋中一、此所に遊びて

夕顔や秋はいろ〳〵のふくべ哉（同　上）

たゞ一色の夕顔の花である。それが秋には長短大小さま〴〵の形をした瓢になることよと言ふのである。「縁なる一つ草とぞ春は見し秋はいろ〳〵の花にぞありける」と同工異曲。その間に墨子が絲に泣いたと同じ寓意も受取れるが、それは餘意とするに止めねばならぬ。感興の所詮は瓢の形のさま〴〵にある。

桟や命をからむ蔦かつら（更科紀行）

木曾路での吟。見る目も危い桟に、蔦かつらが命限りとひしとからみついて居る。それはや

(1)鳴海がたや青田にかはる一みどり。又當時鳴海の人人と催した一卷の發句には「初秋は海やら田やら一みどり」とあつて、それが初案である。

(2)泊船集・記念題等には「鳴海知足亭」と詞書あり、又句の下五「背戸の秋」とある。

(3)鳴海。

(4)古今集。

がて嶮しい岨道を辿る芭蕉自身の心である。「命をからむ」に景も情も一如となつて居る。

(1)芭蕉庵小文庫には「更科姨捨月之辭」と題した文がある。なほ同書には句の上五「俤は」とある。

(2)笈日記には「ひよろ〳〵とこけて露けし女郎花」

(3)更科紀行には「送られつ別れつ果は木曾の秋」

(4)紀行の眞蹟によれば、初め「秋風や石吹きおろす淺間山」、「吹く風淺間は石の野分かな」、「吹落す石は淺間の野分かな」等と作り、最後に本文所出の如く定まつたのである。

(5)御影講・御影供等とも書き、オメイコ・オメイク等といふ。十月十三日。日蓮上人の忌日をいふ。

姨捨山

俤や姨ひとり泣く月の友(同上)

ひよろ〳〵となほ露けしや女郎花(同上)

送られつ送りつ果は木曾の秋(曠野)

『笈日記』によれば岐阜での留別の吟だといふ。我は人々に送られ、人々は我を送つて袖を別つたが、さうしてさまよひ出た末は、木曾路の秋のあはれを味はふ事よとの意。

吹きとばす石は淺間の野分かな(更科紀行)

意は「石を吹き飛ばすは」であるが、「吹き飛ばす石は」と言つたので、眼前にひゆう〳〵と吹き飛ぶ石のさまが見える。又文法的には「吹き飛ばさるゝ石は」が正しいが、それでは句の力が全くなくなる。推敲(頭註參照)のあとを見るべきである。

御命講や油のやうな酒五升(芭蕉庵小文庫)

日蓮上人の消息に「新麥一斗笋三本油のやうな酒五升、南無妙法蓮華經と回向致し候」とあるのによつた作意。この名高い文句をそのまゝ用ひて、御命講に手向けた酒を稱したのである。機才を見るべき句。

(1)笈日記には「少年を失へる人の心を思ひやりて」とある。

○以下元祿二年作

(2)泊船集には上五「元日に」とある。

(3)雪丸げには「元祿二仲春嗜山旅宿にて」と詞書がある。嗜山は大垣の人、當時江戸に出て居たのである。

(4)以下奥の細道所出の句については同紀行參照。この句笈日記・泊船集等には中七「住みかはる世や」とある。

冬籠りまた寄添はんこの柱(曠野)

去年の冬は旅で過したが、今年は自分の草庵に冬籠りをする事だ。いつもたれかゝるこの柱に、又寄添つて暮さうといふのである。柱を撫でながらしみ〴〵といとほしんで居る芭蕉の姿が想はれる。

(1)ある人の追善に

埋火も消ゆや涙の烹ゆる音(同上)

落ちる涙に埋火も消えるとまでは普通の句である。その涙の烹える音まで聞くのは、容易に至り難い。

(2)元日は田毎の日こそ戀しけれ(木曾の谿)

江戸の初日影を拜んで、去年遊んだ更科の事を思出したのである。しかも月を賞すべき田毎の景に、初日のさまを思ひよせた所が俳諧である。單に元日に曾遊の地をなつかしむといふだけでは曲が無い。

(3)陽炎の我が肩に立つ紙衣哉(伊達衣)

我と我が肩に立つ陽炎を見て居る。いかにも暖かさが感ぜられる。

(4)草の戸も住みかはる代ぞ雛の家(奥の細道)

この侘しい草の戸の住ひですら、やはり住みかはるべき時は來るものだ。そして今度新に主となる人は、自分のやうな世捨人ではない。妻や娘たち[1]もあり、折から雛祭の頃だから、華やかな雛人形なども飾られる事だらうとの意。住みかはるべき人もあるまいと思はれる草庵にすら、變替順環の時節があり、しかも新舊その趣を異にすべきさまを詠歎したのである。

行く春や鳥啼き魚の目は涙（同　上）

愈々人々と別れる。幻の巷と思ひ捨てても、流石に前途三千里のおもひには胸も塞るのである。折から春は逝かうとしてゐる。空の鳥、水の魚も春の名殘を惜しみ悲しんで居るやうである。而してその魚鳥の情は、卽ち我と人との惜別の感であつた。

あ[2]らたふと青葉若葉の日の光（同　上）

青葉若葉に照り輝く初夏の眩しい日の光に對する敬虔な感じ、一讀すればそれだけのやうであるが、實は東照宮の威德を稱へる意をその間に現はして居るのである。しかもそれが少し〻技巧的な彌縫の跡を止めず、偉人讃仰の念と自然禮讃の情とは渾然として一になつて居る。

野を横に馬牽き向けよ郭公（同　上）

「野を横に」といふ上五に、先づ廣々とした景色が感ぜられる。「横に馬牽き向けよ」とは、時鳥の啼きすぎた方向へ馬首を轉ぜよとの意で、今一聲を聞きたい餘情を現はして居る。

田一枚植ゑて立去る柳かな（同　上）

(1)この事は一葉集の詞書に見える。

(2)初蟬には「日光山にて、たふとき哉青葉若葉の日のひかり」又もゝよ草に載る芭蕉の眞蹟によれば、初案は「あらたふと木の下闇も日の光」であつた。

[1]西行の歌に名高い柳を訪ねた。しばしと思つて立寄つたのに、そこらに居た早乙女は早くも田一枚を植ゑ終つた。時が經つたのに驚いて、見返りがちに柳の下を去つて行く。「植ゑて」と「立去る」とは主格が別である。措辭としてはどうしても不備を免れない。

[2]みちのくの名所名所心に思ひこめて、まづ關屋の跡なつかしきまゝに古道にかゝりて今の白河も越えぬ。やがて岩瀨の郡に至りて乍[3]單齋等躬子の芳扉を叩き、かの陽關を出て故人に逢ふなるべし

風流のはじめや奥の田植歌（信夫摺）

芭蕉は白川關にかゝつて「旅心定まりぬ」と言つて居る。こゝから愈々本格的な奥州の旅路になるのだ。そしてその旅路の最初に催されたのが等躬亭に於ける風流の一會であつた。芭蕉はその喜びを田植歌に寄せてかう挨拶したのである。風流を謠物の名目として解するのは當らぬ。

[4]忍の郡忍の里とかや、文字摺の名殘とて方二間ばかりなる石あり。この石は昔の女の思ひに石になりて、その面に文字ありとかや。山藍摺り亂るゝ故に戀によせて多くよめり。今は谷あひに埋れて石の面は下ざまになりたれば、させる風情も見えず侍れども、さすがに昔おぼえてなつかしければ

早苗とる手もとや昔しのぶ摺（芭蕉庵小文庫）

(1)新古今集、西行「道のべに清水流るゝ柳かげしばしとてこそ立ち止りつれ」

(2)句は奥の細道にも出てゐるが、詞書がその本文とちがふので、今信夫摺所出のものを掲げた。

(3)奥州須賀川の人、相良氏。信夫摺・伊達衣等の撰がある。寶永二年歿、年七十八。

(4)これも詞書が異なるので今奥の細道によらず、小文庫を出典とした。なほ卯辰集・續代笠等には句の上五「早苗つかむ」とあり詞書も奥の細道の本文と小異がある。雪丸げには別に「早乙女にしかた望まん信夫摺」といふ句があり、これが初案で、後「早苗つかむ」とし更に「早苗とる」と改めたのであらう。

早苗とる乙女たちの手つきを見ると、昔忍ぶ摺を摺り出した時の手つきも、そんなものであつたらうかと偲ばれるとの意。下五の「しのぶ摺」は掛詞になつて居る。

(1)奥州名取の郡に入つて、中將實方の塚はいづくにやと尋ね侍れば、道より一里半ばかり左の方笠島といふ處にありと教ふ。降り續きたる五月雨

いとわりなく打過ぐるに

(2)笠島やいづこ五月の（さつき）ぬかり道（猿蓑）

笠島といへばこの五月雨のぬかるみを歩いて居る身にとつては、特に雨を凌ぐ縁でゆかしいのだが、それは一體何處だらうといふのである。笠島の名に興をもつた輕い句。

夏草やつはものどもが夢の跡（奥の細道）

(3)泊船集等には「つはものどもの」とある。

高館の廢址に立つた芭蕉は、そこに一ぱい亂れ茂つてゐる夏草に對して、じつと感慨深い眼をそゝいだ。思へば義臣すぐつてこの城に籠り戰つたが、運拙くして兵ども討死し、藤原氏三代の榮耀もまた一睡の中に亡びてしまつた。今は徒らにかうして夏草が茂つてゐるだけだ。誠に往時茫々たゞ一夢にひとしい。さうした芭蕉の感懷である。

五月雨の降り殘してや光堂（同　上）

(4)河西本奥の細道によれば、この句の原案は「五月雨や年々降つて五百たび」であつたらしい。

幾百年の風雨を凌いで、榮華の俤を殘して居る光堂に對して、歴史的な詠歎の情から發した句。

閑（しづか）さや岩にしみ入る蟬の聲（同　上）

(5)初蟬・泊船集には「さびしさや岩にしみ込む蟬の聲」、木がらし集には「淋しさの岩にしみ込む蟬の聲」とある。又眞蹟に上五を「さびしさや」とも「涼しさや」と作つたものもあるといふ。いづれも初案であらう。

全山は寂寞と靜まりかへつて物音一つしない。誠に心もすみ行くやうな思ひである。そこへふとジーと鳴き出した蟬の聲。じつと耳を傾けて居ると、それはこの靜寂を透して、やがてそこらの大きな岩の中までしみ入つて行くやうに感ぜられる。「一鳥啼山更幽（イテニナリ）」の境である。

五月雨を集（1）めて早し最上川（同　上）

庄内の山河に降り注ぐ雨を集めて、矢の如く流れて行く大河のさま。「涼し」（頭註參照）ではたゞ兩岸の青葉の色を想はせるだけの寫生句にすぎない。「早し」でその豪壯な感じが端的に現はされて居る。推敲の苦心がある。

江上之晩望

(2)あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ（(3)纔尾集）

酒田の淵庵不玉の亭での吟。南に遠く溫海山を望み、そこから遙か北方吹浦へかけての長汀を見渡しながら、夕すゞみをして居るといふので、廣い大きな景色に對して、十分に晩涼を納れてゐる爽快さが感ぜられる。

暑(4)き日を海に入れたり最上川（奥の細道）

「暑き一日」は「暑さ一日」である。暑熱に苦しんだ夏の一日も、夕べとなれば何處からか涼しさが湧いて來る。洋々と海にそゝぐ最上川のあたりはもう涼しい夕風がさつと吹過ぎる。さては今日の暑い日も、あの大河の水に浮べて海に流し入れてしまつたのであらうかといふのである。

(1)伊達衣・雫丸げ等には「集めて涼し」とあり、それが初案であつた。

(2)句は奥の細道を始め諸集に出て居る。續雪等に「五「あつみ山」とあるのは「や」字を脱した誤。

(3)纔尾集は不玉の撰、

(4)纔尾集には「安種亭より袖の浦を見渡して、涼しさや海に入れたる最上川」とある。雫丸げにも同じ句形で出で、それが初案であつたのだらう。

(1)繼尾集・陸奥千鳥等には「象潟の雨や西施が合歡の花」とあり、これもやはり旅行當時の初案であらう。

(2)この詞書は雪丸げ所出のものもあり、又風俗文選には「銀河序」と題した一文があつて、それ〴〵異同がある。

象潟(1)や雨に西施が合歡(ねふ)の花（同　上）

「寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり」と言つた象潟である。その地の雨景は一しほ哀憐の趣を加へたであらう。それを西施のものうげに眠つて居るさまに比したのであるが、實際象潟のあたりには合歡が多いので、その花が雨に濡れて居るさまも、弱々しい美女の姿を想はせて、それがそのまゝ象潟の雨景の象徴とも感ぜられたのである。紀行の本文に引いた蘇東坡の詩句をふまへ、かなり技巧的な要素の多い句ではあるが、合歡の花を捉へた所に俳諧の妙味が存し、それを象徴化した芭蕉の非凡な力量も窺はれる。

越後(2)の國出雲崎といふところより沖の方十八里に佐渡が島見ゆ。東西三十餘里に横折ふしたり。昔よりこの島は黄金多く湧き出でて世にめでたき島にて侍るを、重罪朝敵の人〻の遠流の地にて、いと恐ろしき名に立てり。折節初秋七日の夜、宵月入り果てて波の音とう〳〵と物凄かりければ

荒海や佐渡に横たふ天の川（柴　橋）

この詞書や「銀河序」を一讀すれば、眼前の風景も作者の心境も自ら明かにされる。「荒海や」といふ上五文字は、此海の荒波を大きく描き出すと共に、この荒海の果に幾多の哀史を秘めた佐渡が島への悲しい思ひを籠めて居る。雄渾の中に悲愁の情がある事を忘れてはならない。

(1)有磯海にはこの句を出して「此の句は元祿二年奥羽の行脚に春夏を送り、秋風立つころ三越路にかゝり、處々の風吟有りける中に當所の發句と申傳へける」と註記してある。當所は越中をさす。

(2)加賀の人一笑を追悼した句。文章篇、紀行の本文參照。

(3)一笑追善の集。

(4)この詞書があるので、雪丸げを出典としてあげた。句は諸集に多く見えてゐる。又「目にはさやかに見えねどもといひけん秋立つけしき、薄刈萱の葉末に動きていさゝか昨日にかはる空のながめ哀れなりければ」と詞書のある眞蹟も存したといふ。

一つ家に遊女も寢たり萩と月（奥の細道）

同じ旅の宿に偶々遊女と泊り合はせた。自分のやうな雲水に身を任せた旅人と、なまめかしい若い遊女との對照を、芭蕉は面白いものに感じたであらう。そして又白波の寄する汀に身をはふらかす境涯を憐れんでは、同情の思ひをとゞめる事が出來なかつたであらう。折から庭には萩が咲いて居る。空には月が照つて居る。その萩と月とが遊女と自分との對照の如く思はれるのであつた。

早(1)稲の香や分け入る右は有磯海（同　上）

これから愈々加賀の國に入らうとする。折から早稲の穂ははや出揃つて、一望萬頃の黄金の波をうたせて居る。その中を分け入ると、右手には遠く有磯の海が續いて見えるといふのである。いかにも廣々とした景色である。

塚(2)も動け我が泣く聲は秋の風（同　上）

烈しい悲しみの情をのべたのである。一見あまりに誇張した句の如く感ずるが、靜かに誦し味へば、どこにも誇張から來る句のすきや弛みは見出せない。これは芭蕉のまことから生み出された故である。『西(3)の雲』によれば、芭蕉は「あはれ年月我を待ちしとなん、生きて世にいまさば越の月をも共に見ばやとは何思ひけん」と、泣く〳〵一笑の墓に詣で、回向の袖を絞つたといふ。

旅愁(4)なぐさめかねてものうき秋もやゝ至りぬれば、流石目に見えぬ風の

(1)つれなしは元來物に對して無感情・無神經なさまにいふ。平氣な、そ知らぬ風な、冷淡な等の意。

(2)詞書は諸書により若干の異同がある。

(3)卯辰集には上五「あなむざんや」とある。去來抄によれば後に「あな」の二字を捨てたのであると。

(4)「樋口登りてたゞ一目見て、あなむざんやな齋藤別當實盛にて候ひけるぞや」

(5)田中集に下五「秋の霜」とあるのは誤と思はれる。

(6)これを近江の石山寺の石山と解した說は全く誤である。

(7)田中集並に先手後手集所收の眞蹟によつた溫泉頌には中七「菊は手折らじ」とある。それが旅中當時の初案であつたらしい。

音づれもいとゞしくなるに、殘暑なほやまざりければ

赤〻と日はつれなくも秋の風（雪丸げ）

もう秋が立つて居るのに、日はそれもそ知らぬげに相變らず赤々と照りつけて居る。しかし流石に季節は爭はれないものだ。吹く風にはやはり秋らしさを感ずるとの意。これをたゞ秋の夕の物淋しい景に解するのは、詞書並に「つれなく」の語義に不注意だと言はねばならぬ。殘暑なほやまない間に、早くも秋風の至るに驚く旅情である。

加賀小松といふ處多田の神社の寶物として、實盛が唐草のかぶと同じく錦のきれ有り。遠き事ながらまのあたりあはれにおぼえて

むざんやな甲の下のきりぐ〻す（猿蓑）

きりぐ〻すが實際甲の下に居たといふよりは、老武者の悲壯な最後への追想を、折からの景物たるきりぐ〻すに託したのである。「むざんやな」は謠曲實盛の文句取。

石山の石より白し秋の風（奥の細道）

石山は那谷の山をさす。芭蕉はこの石山に立つて、蕭殺として吹く秋の風に對したのである。するとその秋の風は、今目前に眺めて居る白い石の肌よりも、更に白く冷徹な感じがするのであつた。それをすぐに「石より白し」と言切つた所に、芭蕉の自然に對する直觀の鋭さと主觀の深さとが見られる。

山中や菊は手折らぬ湯の匂（同　上）

昔慈童は酈縣の山路の菊水を汲んで八百歳の壽を保つたといふが、今この山中の溫泉に浴すればその菊を手折る必要もない。涌き出る湯の匂は菊の香よりも芳しいといふので、全體菊花延齡の故事をふまへて、溫泉の效を頌した句。

物書いて扇引裂く名殘かな（同　上）

扇は句を書いてそのまゝ北枝に與へたので、事實へぎ分けたのでも引裂いたのでもない。たゞこの言葉に惜別の堪へ難い情を籠め、兼ねて捨扇の季題としたものである。

名月や北國日和定めなき（同　上）

上五文字名月を待望して居た心もちを先づ現はし、やがて北國日和の定めなきをうち恨んだ風情である。

蛤の二見に別れ行く秋ぞ（同　上）

無事に長途の旅を終へて人々に迎へられたが、又伊勢の遷宮を拜むために二見の方へ別れて行く、それは丁度晩秋の物淋しい時だといふのが一句の意。蛤のを蓋にかけて二見の枕詞の如く用ひ、別れ行くから行く秋と言掛けるなど技巧的な仕立てである。

ふとさに皆押合ひぬ御遷宮（花　摘）

伊勢で御遷宮を拜した時の作。

伊勢の又玄が宅へとゞめられ侍る頃、その妻男の心にひとしくもの毎にまめやかに見えければ、旅の心をやすくし侍りぬ。かの日向守の妻髪を

(1)卯辰集には「松岡にて翁に別侍し時あふぎに書きてたまはる」と北枝の詞書があり、句は「もの書いて扇へぎ分くる別哉」とある。當時の初案である事が知られる。

(2)捨扇は秋季。

(3)其袋・後の旅等には「二見へ」とある。

(4)和歌だと二見の枕詞は「玉くしげ」であるが、それを「蛤の」としたのは一種の俳諧である。

(5)泊船集には「內宮はことをさまりて外宮の遷宮拜み侍りて」と詞書がある。

切つて席を設けられし心ばせ今更申し出でて

月さびよ明智が妻の咄しせん（勸進牒）[1]

「月寂びよ」といふのに、又玄が妻の古烈女らしい俤が浮んで來る。

初時雨猿も小蓑をほしげなり（猿蓑）[2]

淋しい山中である。ハラ〳〵と落葉をうつ雨の音、初時雨が降つて來たのだ。ふと見るとそこの岩鼻か木の枝に、小猿が雨に濡れながら寒さうにしよんぼりしやがんで居る。芭蕉は一寸驚きながら、立止つてその猿をじつと見て居た。「おゝお前も蓑でも欲しいのだな」。やがて芭蕉は憐れむやうな、又親しむやうな口調でさう呟いた。

元祿二年霜月朔日於良品亭[3]

いざ子供走りありかん玉霰（木葉集）

興に乘じた童心である。

山中子供とあそびて

雪の中に兎の皮の髭作れ（いつを昔）[4]

『去來抄』に「强ひて理會すべからず、機關を踏み破つて知るべし」と評してある通り、たゞ雪中の戯ぶれである。兎の皮の髭を作つて何にしようといふのではない。わけもなく子供たちと嬉戯して居るのだ。前の句と同じやうな芭蕉の童心の現はれである。

長嘯の墓もめぐるか鉢叩（いつを昔）[5][6]

(1)芭蕉庵小文庫には上五「月さびて」とある。

(2)猿蓑集卷頭の句。集の名はこの句に基く。句は諸集に出て居り、卯辰集には「伊賀へ歸る山中にて」と詞書がある。

(3)伊賀上野の人、友田氏、通稱覺左衛門。妻楢風尼も俳諧をよくした。木葉集は尼の撰。

(4)三册子には上五「初雪に」とあり、それが初案と思はれる。去來抄に「雪の日に」とあるは誤か。

(5)いつを昔には「鉢叩聞きにとて翁の宿り申されしに、鉢叩參らざりければ、帶こせまねても見せん鉢叩　去來。明けてまゐりたれば」としてこの句が出てゐる。

(6)泊船集には「塚も」とある。

(1)長嘯子の歌文集。

(2)生駒堂には中七「師走の市へ」、又泊船集には「何をこの師走の市を行く烏」とある。「市を」は誤であらう。

○以下元祿三年作

(3)卯辰集には「湖水のほとりに春を迎へて」と詞書がある。

(4)芭蕉の北枝宛書簡に「誰人か菰着ています花の春」とあり、後世の芭蕉句集類にはこの形に從つたものが多いが、これは寧ろ初案と思はれる。

(5)伊勢の人。渡會一有の妻。

(6)眞蹟には「ものふかし」とあり、それは初案と思はれる。

鉢叩の來るのがあまり遲かつたので、汝は遠い洛外の長嘯の墓までも廻るのか、それで遲かつたのかと尋ねた意である。特に長嘯の墓をいつたのは、『擧白集』[1]に鉢叩の辭と歌とがあるからで、長嘯子の風流を慕ふ意を鉢叩に寄せたのである。

何にこの師走の市に行く烏（花摘）[2]

この句のいきごみは「何にこの」といふ上五文字にあると、芭蕉自身が語つたといふ。騷々しい町などへ何で行くのかと烏を咎めたので、そんな俗世間に交はるより、自然を相手に靜かに暮したいといふ自分の强い願ひをその中に籠めて居る。

都近き所に年をとりて

薦を着て誰人いますか花の春（其袋）[3][4]

世は皆正月小袖を着飾つて居る花の春に、薦を被つた見すぼらしい乞食の姿を見て、ふと感を發した句である。いやあの姿でも、實はどういふ聖賢が世を韜晦して居るのかも知れない。例へば聖德太子が片岡山で會はれた飢者のやうな、或は又撰集抄に見える乞食僧のやうな、尊いひじりではあるまいかといふのである。詞書に「都近き所に」と特に書添へたのは、さすが都近くだから、どんな偉い人が乞食の中にもあるかも知れぬといふ心もちがあつたからであらう。

國女亭[5]

暖簾の奥もものゆかし北の梅（笈日記）[6]

(1)園女の撰。寶永初年刊。

(2)三冊子その他に「木の下は」とある。しかし眞蹟に「木の下に」とあり、それは別に初案とも思はれぬから、やはりにを正しいとすべきである。

(3)白馬集には「鳴の波」とある。

(4)酒落堂は膳所の人濱田珍碩の居で、芭蕉の作になる酒落堂記が白馬集に載つて居る。

(5)文藝篇、幻住庵記參照。

『菊の塵』の序文によれば、元祿三年二月芭蕉が園女を訪ねた時の吟であるといふ。梅を園女に比した挨拶の句。北は妻の住む奥向の方を指したのである。

花見

木の下に汁も膾も櫻かな（ひさご）

花下遊宴の狀である。折から花は繽紛と散りかゝつて、提重箱の汁も膾も櫻かなである。

四方より花吹入れて鳴の海（卯辰集）

「酒落堂記」に述べた地勢の如く、湖を取卷く四方の山々の花が、湖上に散り集まる大觀である。「四方より花吹入れて」と强く一氣に言下したのが、この大觀を敍するにふさはしい。

雲雀鳴く中の拍子や雉子の聲（猿蓑）

雲雀がチイチク〳〵と鳴き續けて居る間に、雉子が時々ケン〳〵と聲を入れる。それを中の拍子と面白く言つたのである。

先づ賴む椎の木もあり夏木立（猿蓑）

去年の春江戸を出て以來、旅から旅とさまよつて居た芭蕉も、こゝにしばし草鞋の紐を解くべき庵を得て、やれ〳〵これで先づ當分身を寄すべき木蔭が出來たよと喜んだのである。しかし「先づ賴む」といふのに、安らかではあるがわびしい心もちが籠つて居る。幻住庵記の最後の一節から、この句につゞけてよむと、芭蕉がこの椎の木蔭を賴まうとする心境がよく味はれる。

(1)猿蓑には「けしきは」とあり、句としてはその方が宜いが、諸集に載するもの「けしきも」となつてゐる方が多い。東西夜話によれば、加賀の秋之坊に示した句であるといふ。

(2)類柑子には「幻住庵にとゞまれる頃」と詞書がある。

(3)七夕の句。

(4)古今抄によれば「田莊の酒家」といふ題があつたと。

無常迅速

やがて死ぬけしきも見えず蟬の聲（卯辰集）

今勢ひよく鳴いて居る蟬の聲を聞くと、秋をも知らず直ぐに死んでしまふやうな樣子は少しも見えないといふので、その間に無常の迅速なのを觀じたのである。談理がむしろ露はに過ぎるやうだが、當時幻住庵にあつて實際にこの感があつたのであらう。

夕べにも朝にもつかず瓜の花（藤の實）

瓜の花の咲く時が、夕にも朝にもつかず中途半端なのを言つたので、いづれとも定まる趣のない所に、をかしみもあればあはれもある。

合歡の木の葉越もいとへ星の影（猿蓑）

一年にたゞ一夜の契りである。今夜こそは一年分の睦言を語り明かさねばならぬのだから、なか〳〵眠るひまなど有る筈はない。だから夜は眠るといふ合歡の葉越すらも心して厭ひ給へ、星の光よと言つたのである。だが合歡の葉のなよやかな情趣に、七夕の夜の思ひを寄せた點に面白味はある。

白髮拔く枕の下やきりぐす（江鮭子）

老を嘆ずる情である。

桐の木に鶉鳴くなる塀の内（猿蓑）

草の中などでなく、桐の木に鶉が鳴いてゐるのに興味を感じたのである。構への廣い富裕な

田舍の家のさまが想はれる。芭蕉としては珍しく純客觀的な句。

(1)横平樂には「堅田にふしなやみて」と詞書がある。
(2)枯尾花に「病む雁の堅田におりて旅ね哉」とあるのは記憶の誤であらう。

堅田(1)にて

病む雁の夜寒に落ちて旅寢哉（同　上）

芭蕉は病んで堅田に旅寢して居た。折柄夜寒の風に誘はれてそのあたりに落ちる雁の聲を聞いたのである。その雁が芭蕉には恰かも自分自身のやうに思はれた。病む雁卽ち自分は、夜寒をわびながらこゝに旅寢して居るといふのである。しかしそれは自分を雁に、又雁を自分に喩へたのではない。芭蕉の旅情が雁の心におのづから通じた細みである。

(3)この句も堅田での作。

海士(3)の屋は小海老にまじるいとゞ哉（同　上）

笊か桶の中に小海老が入れてある。そこへ偶々竈馬が飛び込んで交つて居たといふのだが、竈馬は小海老と形が似て居るので、そこに興を催したのである。海士の家だけにそれが又面白かつたのだ。卽興の句。

(4)ホホバレ。今日いふ耳下腺炎。頰が腫れ上つて痛む一種の流行病で、俗にお多福風とか挾箱などといふ。

木枯や頰腫(4)痛む人の顏（同　上）

木枯が寒く吹きまくつて居る中に、頰腫で痛さうにした人の顏を見出したのである。木枯と頰腫の顏とが、何かしらかさ〳〵とした冬ざれの感じの中に、微妙な調和を作つてゐる。それがにほひの調和であり、一句の眼目である。

いね〳〵と人に言はれても猶食ひあらす旅のやどり、どこやら寒き居心を佗びて

(1)蘆津原に上五「落ちつかぬ」とあるのは杜撰であらう。
(2)空也念佛、俗に所謂鉢叩である。空也忌（十一月十三日）から四十八夜の間洛の内外を鉦と瓢を叩きながら念佛唱歌しつゝ修行して歩く。
(3)三册子に見える。

住(1)みつかぬ旅の心や置火燵（勸進牒）

この頃芭蕉は京師・湖南の門人たちの家を轉々として居た。折からあわたゞしい年末の頃ではあるし、いとゞ旅の心はおちつかない。その心もちを置火燵に寄せたのである。卽ち置火燵があちこちと持ち動かされて、落着きのない所と、おちつかぬ旅の心とのうつりである。言ひかへるとやはりにほひの諧調である。

乾鮭も空也(2)の痩も寒の内（猿　蓑）

修行に痩せた空也の僧と、ひからびた乾鮭とを、かれ切つた寒中の感じに配したのである。この句について、芭蕉は自ら「心の味を云ひとらんと數日腸を絞るなり」(3)と言つたといふ。心の味を言ひとるとは、事物の姿を通して、その中に潛む本質的なにほひ、象徵味を捉へる事である。それは鋭い直觀と、深い主觀と、さうして長い間の藝術的修練とのみが、捉へ得る境地である。

大津繪の筆のはじめは何佛（猿　蓑）

三日(4)口を閉ぢて、題正月四日

特に「題正月四日」としたのは、元日から三日間は佛事關係の事を忌むからである。卽ち普通の筆始めならば、元日か二日に目出度い文句や繪でも書くのであるが、十三佛などを書く大津繪では、恐らく四日に始めて筆をとる事であらう。さてその筆始めに書かれる佛は一體何佛だらうかと、折柄大津あたりに滯在して居た芭蕉が、ふと感興を發した吟である。

○以下元祿四年作
(4)この詞書は諸集によつて小異がある。
(5)芭蕉庵小文庫・小松原等には「はじめや」とあるが、「はじめは」の方が正しい。

(1)乙州（オトクニ）は川井氏、大津の驛長で母は智月尼といひ、同じく芭蕉に俳諧を學んだ。

(2)芭蕉翁全傳によれば大津から伊賀に赴き、橋木子の會でよんだ句だといふ。

梅若菜鞠子の宿のとろゝ汁（勸進牒）

乙州が江戸へ赴く時

これも芭蕉が湖南にあつて、門人乙州が江戸へ行くのを送つた吟である。東海道は今まさに梅も盛り、若菜も青み、さうして鞠子の宿の名物とろゝ汁も甘い頃であらうといふので、折からの道中の風物を並べただけであるが、最後にとろゝ汁を點出した事によつて、一句の俳味が生きて來るのである。それを見遁してはならない。梅・若菜はもとより早春の景物の最なるものではあるが、それだけならば和歌にも連歌にも言ひ古されて居る。それを何と言廻しても、所詮和歌・連歌に於ける美の境地を出る事は出來ないであらう。そこへ突然とろゝ汁を配して、俳諧の神を入れたのである。

山里は萬歳遲し梅の花（笈日記）

山里は萬歳がやつて來るのも大分遲い。その頃には丁度梅も盛りである。梅さへ咲くに遲い山里だとの餘情がある。

田家に有て

麥めしにやつるゝ戀か猫の妻（猿蓑）

美食に飽く富家の飼猫ではない、麥飯の殘りばかり食はされて居る農家の痩猫である。それがこの頃一入やつれて居るのは戀故であらうといふのである。そのわびしげな戀猫の姿を憐れんで居る。同じ戀にしても、美しく華やかな面を見るよりは、かうしたわびしさ寂しさに思ひを寄せるのが芭蕉の情であつた。

(1)西の雲に「囁當る身のおとろひや海苔の砂」とあるのはこの句の初案と思はれる。

(2)堅田集所載の眞蹟には「志賀辛崎に舟を浮べて人々春の名殘をいひけるに」といふ詞書があり、句は上五「行く春や」となつてゐる。それが初案であらう。

起きるにも懶い春雨の朝である。

畫讃

山吹や宇治の焙爐（ほいろ）の匂ふ時（同上）

宇治の新茶を製する頃、丁度山吹が咲くといふだけの意であるが、茶のかをりと山吹の色と、季節に對する感覺的な調和がある。

衰ひや齒に食ひ當てし海苔の砂（己が光）

海苔の砂を食ひあてたその味氣ない氣もちに、自分の老を嘆じたのである。しみ〴〵とした細かな感じが味ははれる。

望湖水惜春

行く春を近江の人と惜みける（同上）

芭蕉が偶々近江の國にあつて、湖面朦朧たる暮春の情景に對し、人々と共に之を惜み之を賞する情を抒べたのである。『去來抄』にこの句について詳しい說があるが、要するに所に應じ時に應じての感賞で、行く春を行く年とも變へ難く、近江が丹波でもいけないといふ事を力說して居る。

(3)誹林一字幽蘭集その他には上五「京に居て」とある。

京にても京なつかしや時鳥（己が光）

今現在京都に居ながら、ふと時鳥の聲を聞いて今さら京都がなつかしく思はれるといふのである。時鳥の聲から懐古的な氣分が誘ひ出されて、今居る現實の京都が何だか遠い昔の都を思ふやうな氣がして來る。こんな心理は誰にも經驗があるであらう。

嵐山藪の茂りや風[1]の筋（嵯峨日記）

日記[2]によるとこの日は臨川寺や虚空藏に詣でたり、松尾の竹の中に小督屋敷を訪ねたりして居る。その途上矚目の景であらう。竹藪などが風の流に從つて、ふさ〳〵と靡いてゐるさまが見える。

柚[3]の花や昔しのばん料理の間（同上）

花橘の香に昔をしのぶのは和歌の趣である。それを柚の花の匂にかへたのが俳味である。しかも昔を偲ぶのが袖[4]の香でなく、料理の間をもつて來た所に、一層俗談平話の特質が發揮されて面白い。

ほとゝぎす大[5]竹藪を洩[6]る月夜（同上）

嵯峨附近の竹藪は、實際大の字を附けて言はねばならぬ程の深い大きなものが多い。その大藪を洩れて斜に月の光がさす。と、空には裂帛の一聲。暗い凄味と清爽な感じとが句に溢れて居る。

憂き我を淋しがらせよかんこ[7]鳥（同上）

獨居して淋しさをあるじとする芭蕉が、この物憂い我が心をお前の淋しい鳴聲で、もつと淋しがらせてくれよと、閑古鳥に呼びかけたのである。さびの世界に徹したい心願が見える。

手[1]を打てば木魂に明くる夏の月（同上）

まだ仄暗い夏の夜明、早起をした芭蕉は庭下駄でもつつかけてそこらを歩いて居た。朝の輕やかな機嫌で何といふ事もなく手を叩いて見たのだらう。その音が遠くにこだまして消えて行く。と、もう夜はいつの間にかすつかり明けはなれて、空には白〻と月が殘つて居る。木魂の消え行く音に、短夜のはかなく明ける心もちが感ぜられる。

(1)風の筋は風の吹き通る道筋をいふ。
(2)以下の數句、文章篇參照。
(3)芭蕉庵小文庫・泊船集等には「柚の花に昔をしのぶ料理の間」とある。
(4)古今集「五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」
(5)笈日記には「大竹原を」
(6)芭蕉庵小文庫に「もる月ぞ」とあるのは杜撰であらう。
(7)伊勢長島の大智院に藏する眞蹟には下五「秋の寺」とある。日記にある寺での句と言つてゐるのは、この初案の句作の時をさすのであらう。
(1)嵯峨日記によれば「夏の夜や木魂に明くる下駄の音」の改作と思はれる。
(2)笈日記その他には「色紙まくれし」とある。

五月雨や色[2]紙へぎたる壁の跡（同上）

明日は愈々こゝを立去るのだ。流石に名殘が惜しまれて、奥の方まで一間々々見まはつて見た。折柄しと〳〵と五月雨が降つて居る。とある一間の薄暗い壁の所に、ふと何か物を剝がしたらしい跡を見つけた。美しい色紙でもはつてあつたのだらう。そのわびしい情景の中に、別離を惜む心もちがしつくり融け合つてゐる。

初秋や疊みながらの蚊屋の夜着（西の雲）

もう蚊もあまり居ないので、蚊帳は疊んだまゝ吊りもしないで寢た。夜中になると早くも初秋の肌寒さが感ぜられる。そこで足許においてあつた蚊帳を、そのまゝ夜着のやうにかけて寢たといふのである。簡素な生活のさまもおのづから浮んで來る。

ある智識ののたまはく、なま禪大疵の基とかや、いとありがたく覺えて

稲妻にさとらぬ人のたふとさよ（已が光）

電光石火のはかなさに無常を感ずるのも、一時の感傷に終るだけならば、却つて悟らぬ人こそ尊く思はれる。芭蕉にはさうした凡人禮讃の心があつた。なまじつかな智や才を厭ふ教戒の句である。

庵にかけんとて句空が書かせける兼好の繪に

秋の色糠味噌壺もなかりけり（柞原）

徒然草の文句[1]に因んで兼好の讃としたのである。右の文句に示されたやうな執着を離れ切つた境地、そこに芭蕉は兼好の面目を捉へ、而してその高潔な心境の象徴として秋の色を配したのである。つまり糠味噌壺も持たぬ高士の生活が、爽やかに澄みきつた秋の色の匂に感ぜられるのである。

米くるゝ友を今宵の月の客（笈日記）

『笈日記』によれば湖上に十四、十五、十六の三夜の月を賞した第二夜、即ち名月の吟であるといふ。『和漢文操』に載する「月見の賦[2]」に、その夜の清遊のさまは知られる。句はこれも徒然草[3]の一節に因んだ作で、芭蕉は當時木曾寺に旅寢して、湖南の弟子たちのみつぎを受けて居たのだから、それらの人々を「米くるゝ友」と呼び、さうした親しいよき友達を今宵客に迎へて月見の舟遊をする樂しみをのべたのである。

三井寺の門たゝかばや今日の月（雜談集）

於大津義仲庵[4]

(1)「後世を思はん者は糠汰瓶一つも持つまじき事なり。云々」の文句。糠汰瓶は卽ち糠味噌壺のこと。

(2)芭蕉の作としてあげてあるが、支考が師の名に假託した作とも言はれ、なほ眞僞は確定されてない。しかしいづれにせよ當夜のさまを知る事は出來る。

(3)「よき友三あり、一には物くるゝ友、二にはくすし、三には智慧ある人」

(4)詞書は諸集によつて小異がある。

同じ夜の吟。「月見の賦」によれば興に乘じて湖上に舟を泛べ、遂に夜は五更も過ぎようといふ頃、千那や尙白を訪ねて驚かしたといふ。句は賈島[1]の詩句をふまへた作で、この清夜の興に乘じて、三井寺の門を叩いて知人を訪はうといふのである。

十六夜[2]　その後浮見堂に吟行して

鎖あけて月さし入れよ浮見堂（笈日記）

堂の扉が閉つて居たので、鎖をあけてこの清光を隈なく堂の內にさし入れよと言つたのである。

水仙[3]や白き障子のともうつり[4]（笈日記）

江戸に向ふ途中尾張熱田の梅人亭での吟である。床の間などにさしてある水仙の白く潔い色が、新しく張りかへた障子の白さと互に映發するさまである。いかにもすがゝしい感じがする。

三河の國鳳來寺に詣る道の邊より、例のやまひ起りて麓の宿に一夜明かすとて

夜着ひとつ祈り出して旅寢哉（茶の草子）

持病に惱まされて止むなく途中で一宿せねばならなくなつた。旅寢の寒さも憂く思はれる折柄、はからず暖い夜着を借り得た。それを名だたる靈場の威德にかけて、祈り出すと言つたのが面白い。

(1)「鳥宿池邊樹、僧敲月下門」

(2)十六夜にはなほこの外に「やすやすと出でていさよふ月の雲」、「十六夜や海老顔る程の宵の闇」の吟があつた。

(3)笈日記の本文に、「元祿三年の冬神無月二十日ばかりならん、熱田梅人亭に宿して厨裏の閑を思ひよせられけむ、九衢齋といへる名を殘して」とある。文中元祿三年とあるは四年の誤。

(4)笈日記の原本には「とも移り」とあるが、移りは宛字。

(5)誹諧白眼によれば、三河新城の人白雪が世話して、鳳來寺から特に夜具を借りて來てくれたのだといふ。

(1)雪の尾花所戯の眞蹟には「世の中定めがたくてこの六とせ七とせが程は旅寢がちに侍れども、多病苦しむにたへ年頃ちなみ置ける舊友門人の情忘れ難きまゝに、重ねて武藏野に歸りし頃人々日々草扉を訪づれ侍るに答へたる一句」と詞書がある。

○以下元祿五年作

行脚年を重ね東武にかへりて
ともかくもならでや雪の枯尾花(1)（北の山）

風葉の行方なきに託してさまよひ出た身であつたが、それでもどうやら旅路の露とも消えないで再び歸つて來た。その纔かに無事を喜び、かつ衰殘の身を憐む情を、雪の中になほ枯れ殘つて居る尾花に寄せたのである。

人も見ぬ春や鏡の裏の梅（己が光）

昔の鏡の裏面には花・鳥などの模樣が鑄つけてある。鏡の面は常に用ひられるけれども、裏はめつたに覗かれる事はない。その裏にある梅の模樣を見て、こんな所に人に知られず咲いて居る梅もあるよと、ひそかに憐れんだのである。世に隱れ人に知られぬまゝに、淸さ、美しさ、氣高さを保つて居るものへ、芭蕉の心は常に强くひかれて居る。

春もやゝけしきとゝのふ月と梅（薦獅子）

月と梅との風情に、漸く春らしくなつて來たけはひを感ずるのである。「けしきとゝのふ」といふ言葉が、誠によく据つて居る。自然に對する芭蕉の豐かな、そして靜かな觀照が窺はれる。

鶯や餅に糞する緣の先(2)（葛の松原）

暖い緣先に餅を干してある。そこへ鶯がぽたりと糞を落して行つた。誠に長閑なさまである。餅に糞する所を見つけたのが俳諧の自在である。

(2)末若葉には「餅に屎する緣の上」、泊船集には「餅に糞する緣の上」とある。

猫の戀やむ時閨のおぼろ月（己が光）

今までやかましく鳴いて居た戀猫の聲が止んだ。と、閨の戸を洩れてほのかに朧月の光がさす。さう言つた情景である。閨の月に戀猫の餘情が感ぜられる。

櫻をばなど寢どころにせぬぞ。花に寢ぬ春の鳥の心よ(1)
花に寢ぬこれもたぐひか鼠の巢(2)（有磯海）

源氏物語の歌は、源氏が女三宮の許に泊らないで、紫の上の方へばかり通はれる事をよんだもの。句は春の夜にふと鼠の巢をのぞいて見たら、鼠は一匹もそこに居ない。そこで鼠も浮氣心を出したのだなと興じたのである。それを源氏のよそどまりに比して、勿體ぶつた詞書などをつけたのが面白い。

三日月の地は朧なり蕎麥畠(3)（泊船集）

空には淡い三日月の光がかゝつて居る。地には蕎麥の花が黃昏の暗い中に白く朧に浮び出て居る。幽趣限りなき境である。

名月や門にさし來る潮がしら(4)（名月集）

深川芭蕉庵での實景であらう。あの邊は堀が多く、そこへは海水がすぐ通じて居るので、滿潮時には潮頭が門先までもさして來る。折から名月の夜だ。緣先にでもすわりながら、この佳景に對して居る芭蕉の姿が想はれる。

閉關之比(5)

(1)源氏物語若菜上に柏木が「いかなれば花に木づたふ鶯の櫻をわけて墻とはせぬ」とよみ、「春の鳥の櫻一つにとまらぬ心よ云々」とあるのによる。
(2)佐郎山に上五「花を見ぬ」とあるのは誤であらう。
(3)浮世の北には「三日月に地は朧なり蕎麥の花」、三日月日記には「三日月や地は朧なる蕎麥畠」とある。
(4)桃の實・陸奥千鳥等には「門へ」、又芭蕉庵小文庫には中七「門にさし込む」とある。
(5)文章篇、閉關之說參照。

葬や晝は錠おろす門の垣（藤の實）

「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業をさまたぐるも憂し」である。「晝は錠おろす」に芭蕉の固い決意が見える。そして自分は垣に咲く朝顔の花でも友としようといふのである。だがその朝顔すら、結局

葬やこれもまた我が友ならず（今日の昔）

であつた。芭蕉の孤獨感は益々深い。

深川夜遊

青くてもあるべきものを唐辛子（深川）

青いまゝでも宜いのに、このやうに眞赤になつた唐辛子よといふのであるが、その寓意は種種に解されるであらう。例へば錐はやがて囊を脱し、玉は遂に光を韜む事が出來ない。才有る者の所詮愚を守り難い意にも聞かれる。しかし芭蕉の眞意は、一旦門を閉ぢ客を謝しながらも、やはりかうして俳諧に遊ばずに居れない、止むに止まれぬ風雅の發露を、唐辛子のおのづから赤くなるのに比したものと思はれる。

けふばかり人も年よれ初時雨（韻塞）

初時雨の風情にふさはしいのは老の姿である。若い人々も今日ばかりは老の心になれかしといふのである。

支梁亭口切

口切に堺の庭ぞなつかしき（深川）

堺は紹鷗や利休などの遺跡があつて、茶人には最もゆかりの深い地である。利休の造つた名高い庭などもあつた。支梁の口切の席に招かれて、その庭のさまから堺の庭もなつかしく偲ばれると言つたので、亭主に對する挨拶である。

鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店（鳶獅子）

句意は明かである。其角の「聲かれて猿の齒白し峰の月」と對比される事が多いが、其角の句は支考も評して居る通り、哀猿月に叫ぶなどの趣をうつして人を驚かさうといふ所があり、芭蕉の作は日常卑近の間に情を探らうとして居る。特に下五に奇を求めず、有の儘に「魚の店」と置いたのが、却つて及び難い所である。

年ゝや猿に着せたる猿の面（同上）

歳旦の吟である。年は改つて行くけれども、人は同じく去年の愚に止つて居る。恰も猿が面を冠つたところで、相變らずの猿の面なのと同じやうなものだといふのである。この句に歳旦を現はす季語はないが、一句全體の意から歳旦と定まるので、蕉門ではこの種の句を無季の一格として取扱つて居る。

ほとゝぎす聲横たふや水の上（藤の實）

芭蕉はこの句と同時に、

一聲の江に横たふやほとゝぎす（笈日記）

(1)同上。

(2)「深川閑關の比」といふ詞書がある。

(3)九月はるゝ〳〵訪ねて來た酒堂を迎へて、嵐蘭・岱水等と四人で催した歌仙の發句である。

(4)十月三日折から江戸滯在中の許六の旅宿で、許六・酒堂・岱水・嵐蘭と五人で催した歌仙の發句である。

(5)口切は十月の初め頃、茶壺の口を切つて新茶を用ひる茶會の式。

(1)支考の評は十論爲辨抄に見える。

(2)この事については、三册子に芭蕉自ら「下を魚の棚とたゞ言ひたるも自句也」と言つた由が見える。

○以下元祿六年作

(3)類柑子に上五「元日や」とあるは杜撰であらう。

(4)芭蕉から荆口に宛てた手紙によれば、最初中七「聲や横たふ」とも案じたので、陸奥千鳥にはその形で出てゐる。又翁艸には「横たふ聲や」ともある。

(5)この事右の荆口宛の手紙に見える。

とも案じて、二句いづれに定めようか決しかねて居たが、偶々來訪した水間沾德の意見をきいて、「水の上」の方をとる事にしたといふ。しかし許六はこの評に反對して「一聲の」の方をあげて居る。いづれにせよ芭蕉自ら「水光接天白露横江の字、横句眼なるべしや」と言つて居る通り、「横たふや」が句の眼目である。それで廣々とした江水の上を斜に横ぎつて、時鳥が一聲鳴き過ぎるといふ大きな景趣が浮んで來る。

弔三初秋七日兩星一

高水に星も旅寢や岩の上（芭蕉庵小文庫）

『小文庫』にはなほこの夜風雲天に滿ち、二星も屋形を失ふ有樣であつたが、空しく過すのも殘り惜しいといふので、小町と遍昭の歌に縋つて句を作り、それで兩星を慰めた由の文が見える。句は天の川も今宵の風浪で渡る事が出來ず、織女は小町のやうに岩の上で一人旅寢する事であらうといふのである。小町と遍昭との贈答歌に因んだ作意が、時にとつて面白い。

悼松倉嵐蘭

秋風に折れて悲しき桑の杖（笈日記）

桑の木は桑弧蓬矢の語もある如く、男子出生を祝ふ意に緣があるが、こゝでは武人たる嵐蘭に因みをもたせたのである。それを桑の弓でなく桑の杖と言つたので、今まで賴みにして居たものを失つた悲しみが強く感ぜられる。

東順傳

入る月の跡は机の四隅かな（句兄弟）

入る月は東順である。人はすでに亡く、その人の常によりかゝつて居た机だけが、空しく殘つて居るといふのである。机の四隅といふのに、机の姿がはつきり浮んで來る。月が入つたあとの淋しい空虛感が、それで具體化されて居る。

元祿辛酉之初冬九日素堂菊園之遊　重陽の宴を神無月のけふに設け侍る事は、その頃は花いまだ芽ぐみもやらず、菊花ひらく時卽ち重陽といへる心により、かつは展重陽のためしなきにしもあらねば、なほ秋菊を詠じて人々をすゝめられける事になりぬ

菊の香や庭に切れたる履の底（續猿蓑）

とりつくろはぬ庭のさまに、却つて雅趣があるのを賞したのである。

神無月廿日　深川にて卽興

振賣の雁あはれなりえびす講（炭俵）

振賣といへば多くは貧しい小商人のなりはひである。蛭子講の日商家では緣起を祝つて、百兩・千兩などと高値をつけて景氣の宜い取引の眞似などをする。そこへ恰も雁を振賣して來た。同じ雁でもさうして振賣にされる事が、蛭子講の賑かさと對照して、特にあはれに感ぜられたのである。

寒菊や粉糠のかゝる臼の端（同上）

(1)この論篇突に見える。
(2)荆口宛手紙の文句。水光云々は蘇東坡の前赤壁賦の一節。
(3)後撰集「岩の上に旅寢をすればいと寒し苔の衣を我にかさなん　小町」その返し「世をそむく苔の衣はたゞ一重かさねばうとしいざ二人寢ん　遍昭」。遍昭の歌に因んでは、杉風に「七夕にかさねばうとし絹合羽」の吟があつた。
(4)文章篇參照。
(5)榎本氏、其角の父。元祿六年八月廿九日に歿した。句兄弟に芭蕉がその傳を草して、その終にこの句がある。

(1)癸酉（六年）の誤。
(2)この句を發句として、野坡・孤屋・利牛と四吟の歌仙があつた。
(3)振賣は賣物の名を呼びつゝ路上を賣り歩くこと。
(4)寒菊隨筆には「ばせを庵にて」と詞書がある。

句意は解を要しない。純客觀の句ではあるが漫然たる寫生ではない。寒菊の地味でわびしげな美しさといふものの本情が、深く觀察されて居る。炭俵

鞍壺に小坊主乘(1)るや大根引（同　上）

この句について『去來抄』に次のやうな意味の評がある。例へば花を繪がくのに、奇山・幽谷・社寺・禁闕等を背景とすれば立派だから、古來さうした繪は頗る多い。隨つてこの種の繪は惡いといふのではないが、ありふれて珍らしくない。ところが大根引の傍に草を食む馬が首をさげて居る、鞍壺に小坊主がちよつこり乘つて居る。そんな圖があつたら面白いではないか。去來はさういつてこの句の清新な着想を稱して居る。

金(2)屏の松の古さよ冬ごもり（同　上）

支考の『續五論』に、「金屏は暖かに銀屏は涼し。是おのづから金銀屏の本情なり。（中略）然れども金屏銀屏のうち出でたる本情は、貴人高家の千疊敷を思ひよるべし。それを松の古さよと言はれたるは、蝶番ひも離れ〳〵に兀げかゝりて、芭蕉庵六疊敷の冬ごもりと見え侍る。是風雅の淋しき實なるべし。金屏の暖かなるは物の本情にして、松の古さよといふ所は二十年骨折りたる風雅のさびといふべし。」とある。評し盡して餘蘊がない。

煤掃は己が棚釣る大工かな（同　上）

いつもはよその仕事にばかり働いて居る大工が、偶々今日の煤掃に自分の家の棚をこしらへる。その一寸したをかしみを捉へて居る。所謂輕みはかうした極めて卑近な境地に、一脈の

(1)陸奥千鳥には「乘せて」とある。

(2)笈日記には「金屏に松の古びや冬籠り」、陸奥千鳥には「金屏の松の古びや冬籠り」、芭蕉庵小文庫には「金屏の松も古さよ冬籠り」とある。なほ三册子・芭蕉翁發句集頭註によれば、初案は「屏風には山を繪がいて冬籠り」であつたといふ。

俳趣を見出す事である。

有(1)明も三十日に近し餅の音（笈日記）

有明の月が幽かに薄れる頃、世間は餅搗の音に忙しい。空の月はすでに三十日に近く、影は有るか無きかにかぼそいのである。『芭蕉翁行狀記』に「今年限りなるべき敎へなるべし」と言つて居るが、誠に死の豫感に似た心細さが感ぜられる。

蓬萊に聞かばや伊勢の初便（炭　俵）

『去來抄』に「深川(2)よりの文に、この句さま〴〵の評有り、汝いかゞ聞き侍るやとなり。去來曰、都・古郷の便りともあらず、伊勢と侍るは元日の式の今樣ならぬに、神代を思ひ出で、便り聞かばやと、道祖(3)神のはや胸中を騷がし奉るとこそ承り侍れと申す。先師返事に曰、汝聞く所に違はず。今日神の神々しきあたりを思ひ出て、慈鎭(4)和尙の言葉にたより、初の一字を吟じ侍るばかりなりとなり。淸淨のうるはしく、神祇の神々しきあたりを蓬萊に對して結びたるまで也。」とある。卽ち床上に飾つた蓬萊の古代めいた感じから、遙かに伊勢大廟の神々しい元朝のさまを思ひやつて、まづこの伊勢からの初便りこそ聞きたいものだと願つた意である。

梅が香にのつと日の出る山路哉（同　上）

早春の山路の景。「のつと」といふ一語が生きて居る。平易卑近でしかも毫も俗に陷つて居ない。

(1)翁艸・芭蕉翁行狀記には「月代や三十日に近き餅の音」とある。なほ笈日記を始め、諸集とも兼好の「ありとだに人に知られですむ月の三十日に近き有明の空」の歌を引いてある。

○以下元祿七年作

(2)芭蕉からの手紙の意。

(3)旅行の心が動くとの意。

(4)拾玉和歌集に出づる慈鎭和尙の歌「このたびは伊勢に知る人音づれてたよりうれしき花柑子かな」をさす。

春雨や蜂の巣傳ふ屋根の漏（同　上）

屋根から軒下、軒下から蜂の巣へと、ぽとり〳〵傳はつて落ちる春雨。それを物うげにぼんやり眺めて居る。侘びた感じが味はれる。

上野の花見にまかり侍りしに、人々幕打ち騒ぎ物の音小唄の聲、さまざまなりにける傍らの松陰をたのみて

四つ五器の揃はぬ花見心かな（同　上）

人々は珍味佳肴を携へ、三味や太鼓で騒いで居る中に、一人花見る心のわびしさを「四つ五器の揃はぬ」と言つたのである。四ッ五器さへも揃はぬのは、卽ち貧しい行厨なのである。

紫陽花や藪を小庭の別座敷（別座敷）

自然の藪をそのまゝ小庭に取入れた別座敷の風流を賞したのである。紫陽花は丁度そこへ咲いて居たのであらう。時にとつての輕い挨拶の句である。

木がくれて茶摘も聞くや時鳥（同　上）

茶畑には人々が忙しくはたらいて居る。折柄時鳥が一聲啼き過ぎた。あの茶摘の人たちもしばしは手を休めて、この聲に聞き入つて居るだらうといふのである。「木がくれて」といふのが、茶の木の間に隱見する人影を想はせて、實景を浮び上らせる。

卯の花やくらき柳の及腰（同　上）

及腰は柳の樹の屈曲したさまを喩へたのである。こちらには卯の花が眞白く咲いて居る。青く茂つた夏柳が、そこへ手を延ばすやうなさまで枝を垂れて居る。一は垣根に明るく浮き出で、一は暗く向ふに屈曲して居る。眼前のまゝを捉へて面白い。

麥の穗を便りにつかむ別れ哉（有磯海）

「便りにつかむ」といふのに、人々に別れて心細い悲しみの情を託して居る。麥の穗は眼前の實景である。しかしつかむは實際の動作でなく、つかみたい心もちである。別離の眞情が惻々として人を動かす。

どんみりと樗や雨の花曇り（芭蕉翁行狀記）

しどけなく道芝にやすらひて

西に赴く途中の吟。樗は木高いもので、花は薄紫色をして居る。それが雨に一入曇つた趣に見えるのを言つたので、どんみりといふ形容が下し得て妙である。

駿河路や花橘も茶の匂ひ（別座敷）

芭蕉が駿河路にかゝつた頃は、丁度名產の茶を製する時で、どこへ行つても新茶の匂がする。折柄の花橘の高いかをりさへも、その茶の匂に壓倒されて居るといふのである。

五月雨の空吹き落せ大井川（有磯海）

大井川水出でて、島田塚本氏のもとにとゞまりて

降りつゞく雨に大井川は濁流滔々として逆卷き、空には暗雲が低く垂れて、いつ晴るべしと

(1)五器は御器の宛字で食器の汎稱。托鉢の僧などが大・中・小の鉢四ツを一組として携へてゐるのを四ツ五器といふ。

(2)芭蕉が近く旅行の思立ちがあるといふので、子珊（別座敷の撰者）が自分の別居に芭蕉を招いて、一卷を催した時の發句である。

(3)及腰は立ちながら身體を屈め、手を延ばして物を取らうとする姿勢をいふ。

(1)五月八日江戸を立つて最後の旅に赴いた時の事である。研究篇參照。

(2)陸奥千鳥には「力につかむ」とある。

(3)以下數句皆旅中の吟。

(4)炭俵には「此の句は島田よりの便に」と註してある。

(5)塚本如舟。

(6)笈日記には「五月雨の雲吹き落せ大井川」、芭蕉翁行狀記には「五月雨や雲吹落す大井川」とある。

も分らない。いつそこの五月雨の空を、風で一思ひに大井川へ吹落してしまつてくれたらいい。そしたら雨の根も切れるだらうといふのである。豪壯な感じのする句である。

隱士[1]山田氏の亭にとめられて

水鶏啼くと人の言へばや佐屋[2]泊り（笈日記）

佐屋では水鶏が鳴くと人が言ふものだから、わざ〳〵こゝに一夜を過す事にしたといふので、かつは主人に對する挨拶の詞とし、かつは水鶏を聞きたい風流の意を述べたのである。

朝[3]露によごれて涼し瓜[4]の泥（同上）

句意は明かである。『三冊子』に『この句は瓜の土と始め有り。涼しきといふに活きたる所を見て、泥とはなしかへられ侍る』とある。土といへば乾いた感じであり、泥の方は濡れた感じが多いからであらう。一字に良匠の苦心の存する所が見られる。一讀清爽の涼味が掬せられる。

六[5]月や峯に雲置く嵐山（句兄弟）

嵐山といへばすぐ花か紅葉の優雅な景色が聯想されるのであるが、これは盛夏炎天下の嵐山である。山は鬱蒼たる緑に覆はれて、峯には入道雲が湧き立つて居る。春秋の女性的な感じと異つて、男性的な強烈な色彩がある。支考[6]が特に六月を音讀せよと注意してゐるのも、その強い感じを失はない爲である。

清[7]瀧や波に散込む青松葉（笈日記）

(1)有磯海には「露川が等（ともがら）佐屋まで道送りて共に假寢す」と詞書がある。山田氏は號素覽。
(2)佐屋は尾張國海部郡にある。
(3)笈日記によれば去來の別莊（落柿舍）での吟だといふ。
(4)續猿蓑その他には「瓜の土」とある。
(5)芭蕉翁行狀記によれば、六月嵯峨野のあたりを逍遙した時の吟といふ。
(6)この事古今抄に見え、なほ杉風宛芭蕉の手紙にもこの句を錄して、芭蕉自ら六にロクと振假名してある。
(7)其便・陸奥千鳥に「清瀧や浪に碎なき夏の月」とある。これは青松葉に改作前の別案か。

『笈日記』によれば、初めの作は「大井川浪に塵なし夏の月」であつたが、それから後に園女の許でよんだ白菊[1]の吟と紛らはしいからとて、青松葉に案じかへたのであるといふ。芭蕉の所謂藝術的良心の深さが見られる。一は夏の月に照し出された一點の塵も止めぬ清冽な川波のさまであり、一は白菊の清淨を稱へて園女に對する挨拶の意を寓したのである。大よそに考ふれば共に存して差支ないやうだが、芭蕉は「塵なし」といふ同工に慊らなかつたのである。そこで青松葉の清爽味を點じて別趣を出し、更に大井川を清瀧にかへた。さきには「塵なし」といひ、今度は地名ではあるが清瀧の字面に波の清さを想はせる。一字の間にも彫心鏤骨の苦心が存して居たのである。

夏[2]の夜や崩れて明けし冷[3]し物（續猿蓑）

短か夜が早くも明ける。昨夜の冷し物はいつの間にか崩れてしまつて居る。それだけの事であるが、形の崩れた冷し物を見る心もちに、夏の夜明のはかない感じがぴつたりとうつり合つて居る。微妙な感合である。

秋[4]近き心の寄るや四疊半（鳥の道）

四疊半の部屋には芭蕉・木節主客の外に、惟然や支考も膝を交へて居た。まだ暑さは去りやらぬが、時折訪れるひやりとした風の感觸には、流石にもう秋近い事を思はせた。「あゝ秋が來るのだな」口にこそは出さないが、誰も淡い寂しさを感じて居るのだ。四人の心は何となくしんみりと寄り合つて行くのである。「秋近き心」は誠に巧みな表現である。一座の人々の淋しい、しかし風雅の一筋に繋がつて互に生きようとする心もちが、言外におのづから味はれ

(1)後出「白菊の目に立てて見る塵もなし」をさす。
(2)六月芭蕉は京都から近江に赴き、膳所の曲翠亭で支考・惟然などと十六夜の月を賞しながら、一卷の俳諧を催した。その時の發句である。
(3)夏の料理で野菜・果物等の類を水に冷したもの。
(4)「元祿七年六月廿一日大津木節庵にて」と詞書がある。

はれる。

ひや〳〵と壁をふまへて晝寢哉（芭蕉翁行狀記）

芭蕉はこの句を支考に示して、「どう解釋するかね」ときいた。支考は「殘暑の句と存じます。きつと蚊帳の釣手など手にからまきながら、何か考へて居るといつた人のさまでせう」と答へると、芭蕉は「この謎はお前にうまく解かれてしまつた」と言つて笑つたといふ。寢そべつたまゝ足をそこらの壁にもたせかけて居る。足裏が流石に冷や〳〵と感ぜられるので、誠に支考の解は趣を盡して居る。この句の季語は「ひや〳〵」で秋季。

甲戌の夏大津に侍りしを、このかみのもとより消息せられければ、舊里に歸りて盆會をいとなむとて

家はみな杖に白髮の墓參（續猿蓑）

鄉里の親戚故舊もいつの間にか老いてしまつた。一家打揃つて祖先の墓に詣でる。見ると人人の多くはもう杖に縋り、髮は白くなつて居るのだ。芭蕉自身ももとよりその老の中にある。哀傷の言葉があらはに出てゐないだけに、一入感慨の深いものが味はれる。

尼壽貞が身まかりけるときゝて

數ならぬ身となな思ひそ魂祭（有磯海）

今は亡き人の魂に向つて、決して數ならぬ身だなどと思はないで、自分の手向を十分受取つてくれと呼びかけたのである。壽貞に對する深い情愛が籠つて居る。

（1）芭蕉翁全傳によれば文月の頃伊賀の猿雖宅での吟であるといふ。

（2）芭蕉翁全傳によれば、伊賀赤坂の無名庵で門人たちを招き月見をした時の吟であるといふ。

（3）續猿蓑等には上五「名月の」とある。

（4）篇突には「麓の霧か」とある。

（5）全傳によれば伊賀猿雖宅での吟である。隨つて時雨の句ではあるが、九月上旬頃の作。

（6）笈日記にこの句奈良猿澤の池のほとりを吟行した時の吟である事が詳しく見える。

（6）研究篇參照。

稻妻や闇の方行く五位の聲（續猿蓑）

稻妻が一方にぱつと光る。反對の眞暗な方を、五位鷺が鳴いて行く。五位鷺の聲は一種の凄味を帶びて居るので、稻妻との取合せがよく働くのである。

伊賀山中にありて

名月や花かと見えて綿ばたけ（有磯海）

名月に麓の霧や田の曇り（有磯海）

二句同時の吟。一は名月の光に花かと疑はれる綿畠の新しみを採り、一は麓の田にかゝつた薄霧の曇りに幽玄の趣をうつして居る。

新藁の出初めて早き時雨哉（芭蕉翁全傳）

稻も苅り終へて、新藁が出初める頃になると、早くも時雨が訪れて來る。「早き」といふのに季節のあわたゞしい移りを嘆ずる情がある。新藁の仄かな香ひに浸む時雨の趣は、誠に農家の晩秋をしみ〴〵と味ははせる。

いと啼く尻聲悲し夜の鹿（陸奥千鳥）

句意は明かである。哀切斷腸の響がある。

九月九日

菊の香や奈良には古き佛たち（笈日記）

菊の芳ばしい香と、古都に年ふる佛との取合せである。高雅・蒼古のにほひが互に映發して、

(1)この詞書は諸集により小異がある。
(2)笈日記所載の芭蕉の手紙、笈日記の本文參照。
(3)九月二十一日、大阪の潮江車庸亭での吟。
(4)車庸の撰。

情趣は全く一に融合して居る。

住吉[1]の市に立ちてそのもどり長谷川畦止亭におの〳〵月を見侍るに

升買うて分別かはる月見かな（墨吉物語）

芭蕉[2]は九月十三夜の月見かた〴〵住吉の市に詣でて、壹合枡を一つ買つた。ところがその日は天氣も惡く、又惡寒の氣味もあつたのでそのまゝ歸つたらしい。そしてこの句があつたのである。句意は月を見ようと思つて出かけたのであるが、途中で實の市に立寄つて小枡を買つたら、急に世間並の世帶氣が出て歸つてしまつたといふのである。月見が出來なかつた事を、さうした世間氣にかこつけて輕く興じた句。

秋[3]の夜を打崩したる咄かな（笈日記）

『松濤集[4]』によると、この夜は主客たる芭蕉・車庸を始め、洒堂・游刀・諷竹・惟然・支考が集つて半歌仙を催して居る。秋の夜は更けて四邊は寂寞として居る。だが一座の賑やかな話聲は、さうした寂しさを打崩してしまつたやうだといふのである。「打崩す」の語がまことに妙である。

あるじは夜遊ぶことを好みて朝寢せらるゝ人なり。宵寢はいやしく朝起はせはし

面白き秋の朝寢や亭主ぶり（松濤集）

車庸の許に泊つた翌朝の挨拶である。詞書に言つて居る通り、鄙しからず、忙しからざる亭主の風雅ぶりを賞したのである。

(1)淡路島には「此の道を行く人なしや秋の暮」とある。
(2)陶淵明に「雲無心而出岫、鳥倦飛而知還」、蘇東坡に「倦鳥孤雲豈有期」等の詩句がある。

所思

此[1]の道や行く人なしに秋の暮（笈日記）

『笈日記』によれば、芭蕉はこの句と共に「人聲や此の道かへる秋の暮」の吟を示して、二句どちらをとるかと支考に尋ねた。支考は「此の道や行く人なしにと獨歩したる所、誰かその後に隨ひ候はん」と答へて、そこに所思といふ題をつけたといふ。句は行人絶えて暮風冷やかな秋の淋しさを言つたのであるが、「所思」と題した所以は、その中に眞に我が俳諧の道を歩く人の少いのを歎ずる意を寓したからである。獨歩する者の淋しさ、天才の抱く孤獨感が味ははれる。

旅懷

此の秋は何で年よる雲に鳥（同上）

『笈日記』の本文によれば、此の句はその朝から心に籠めて念じた句で、下の五文字に腸を割いて苦心したとある。旅中老境を歎ずる情であるが、それを無心の雲と鳥とに寄せたのである。しかしそれは必しも現實の雲や鳥をさして言つたのではない。いはゞ漂泊の旅を象徴したやうなものである。陶淵明[2]や蘇東坡などの詩句もすぐに聯想されて、おのづから漂泊隱閑の情が深い。飄々として流れ行く白雲、飛ぶに倦んで歸り行く鳥の姿、その雲や鳥に情を勞しつゝ、又今年も老い行く事かなあと歎じたのである。

(1)大阪で園女の亭に招かれた時の吟。

白菊の目に立てて見る塵もなし(1)（同　上）

白菊の清さを園女の風雅の氣品に比したので、その場の挨拶である。しかし單に比喩の句では勿論ない。所詮はやはり一塵も留めない白菊の清さに見入つた作である。その間におのづから園女に對する挨拶を含んで居る。これは芭蕉ほどの鍛練がなくては出來ない藝道の至妙であらう。

畦止亭(2)において卽興　月下送兒

月澄むや狐こはがる兒の供（其　便）

兒は男色にいふ少人(3)で、そこに戀の意を持たせたのである。月が澄み渡つた夜、兒の供をして野の路でも送つて行く。どこか遠くに狐の鳴聲がする。それを怖がる兒の風情が、何となくなまめかしく美しい。芭蕉としては珍しく浪曼的な匂の濃い作である。

秋深き隣は何を・する人ぞ（笈日記）

隣り合せに住んで居ながら、あるじは何をしてゐる人か一向分らない。家の中もいつも何だか森閑として居る。「一體隣は何をする人だらう」。秋も更けて次第に世間も淋しくなる頃、ふとさうした疑が強く迫つて來る。晩秋の寂しさの中に、じつと耳をすましてゐるやうな人の姿がある。そして一種の神秘的な氣分が漂つて來る。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る(4)（同　上）

芭蕉の最後の吟としてよく知られて居る。枯尾花・笈日記・三冊子等によれば、はじめ中七

(2)笈日記によれば九月廿八日の夜、七種の戀を結題にしてよんだ作の一である。

(3)美少年。

(4)笈日記をはじめ諸書多く「廻る」と漢字でかいてあるが、芭蕉翁行狀記には「かけまはる」、和漢文操には「かけめぐる」と假名書にしてある。「めぐる」と訓むのが穩當と思はれる。

○以下年代不詳

(1)この句芭蕉句選拾遺には元祿二年の作としてある。

(2)この句元祿五年以前の作。

(3)しらゝ・落窪・京太郎は共に室町時代に行はれた小說の名。(落窪は平安朝の落窪物語とは別)夏目成美の『隨齋諧話』にも引いてある如く、淨瑠璃十二段草子にも見える。

以下を「枯野を廻る夢心」とも「なほかけ廻る夢心」とも案じたといふ。病苦の間にもなほかうした推敲を怠らなかつたのである。西は不知火筑紫の果てまでもと思ひ立つた旅路が、まだ半ばにも達しない中に、空しく病に臥さねばならなくなつた芭蕉の吟魂は、誠に夢裡にも枯野をかけめぐつた事であらう。一生を詩に瘠せ旅に終つた芭蕉の最後の吟として、特に深い感慨を覺えさせる。研究篇參照。

春(1)雨や蓬をのばす草の道（草の道）

春雨がしと〳〵と降る細道、そこには雜草がもうそろ〳〵青みかけて居る。その中でも蓬だけがことに目立つて伸びて來た。それを春雨が蓬を伸ばすと言つたのである。靜かに自然をながめた氣もちがある。

梅(2)が香やし(3)らゝ落窪京太郎（忘　梅）

古い物語の名に梅の香をとり合せた作である。古典の氣品と梅の清高と、それだけでもすでにある美感は釀し出されるが、それらの物語を淨瑠璃姫が讀んだといふやうな傳說から、更に古風な姫君の部屋のさまなども聯想される。この種の浪曼的・古典的趣味は、後の蕪村や曉臺等が特に好んだ所である。

紅梅や見ぬ戀つくる玉すだれ（其木枯）

ある家の庭に紅梅が咲いて居る。住居のさまも上品なので、ゆかしいまゝに立寄つて見ると、庭に面した奧まつた部屋には簾がかゝつて、なまめかしい女の話聲なども聞える。中のある

(1)「雲の上はありし昔にかはらねど見し玉だれのうちぞゆかしき」

(2)この句は芭蕉生前の集に見えず、蓮甘介我は才麿の作だとの説を出し、又續山井（寛文七年刊）にも「名所や奈良は七堂八重櫻　如貞」といふ類句が見える。しかし宇陀法師・古今抄等にも芭蕉の句としてあげてあり、許六や支考も別に疑つて居ないのだから、芭蕉の作と認めて差支ない。

(3)この句芭蕉翁發句集には貞享五年の作としてあるが、據る所が明かでない。

(4)きれ〴〵には「花見の座では」

(5)この句芭蕉庵小文庫・翁草等に出づ。

じはいかなる美人ぞ。見ぬ戀にふと心をときめかすのである。紅梅の色に全體として艶麗な背景を描き、玉簾といふ古典的な言葉で、平安朝の物語でも見るやうな高雅な氣分を作つて居る。鸚鵡(1)小町の傳説で知られた歌をふまへた事は勿論である。芭蕉の戀の句は連句にはすぐれた作が多いが、發句には極めて稀で、偶々あつてもかうした戀を美化して傍觀して居る。といふやうな作である。

奈良七重七堂伽藍八重櫻(2)（泊船集）

奈良七重は奈良朝の七代を、下の八重櫻に對へて七重といひ、更に「七」の調子をとつて七堂伽藍と續けたのである。八重櫻は「古への奈良の都の八重櫻」と言はれたその櫻。奈良は七代の帝が居給うた古都であり、又七堂伽藍を備へた古寺も多い。さうしてそこには八重櫻が今も匂うて居るといふのである。奈良の歴史を背景にして、爛漫たる櫻花の美を咏じた作。天爾波などを全く用ひず、名詞ばかりで仕立てた句として名高く、古來疊字の格だとか五七五の三段切だとか稱されて居る。

景清も花見の座には七兵衛(3)（翁草）

悪七兵衛景清といへば名だたる豪勇の武士であるが、その景清もうちやはらいだ花見の座では、たゞの七兵衛殿でをさまつて居るだらうといふ滑稽の句である。景清は五條坂の遊女に馴染んだなどといふ傳説もあるので、清水あたりの花見の座が聯想されて面白い。支考はこの句と「昔聞け秩父殿さへ相撲取」といふ句とを卽興體としてあげ、蕉風俳諧に於ける滑稽味はこゝにあると説いて居る。貞門や談林の技巧的・理知的な滑稽と異つて、輕く無邪氣な

(1)芭蕉庵小文庫には「はれ物に柳のきはるしなへかな」とあり、宇陀法師・去來抄等によれば、去來は小文庫の形を正しいとし、支考・許六等は有磯海の形に從ふべしとして論爭して居る。

(2)しなへは垂れ下つた枝。

(3)句は鬼日記・續猿蓑等にも出てゐるが、いづれも詞書はない。陸奥千鳥には「八九間空に」とある。なほ續猿蓑にはこれを發句とした歌仙があり、それは元祿七年の興行と思はれるが、發句はその時の吟か、以前の作か確定し難い。

笑ひがある。

はれ物にさはる柳のしなへかな(1)（有磯海）

柳の絲のしなやかな感觸を、そつと腫物にでもさはるやうだと言つたのである。去來はこれを比喩でなく、柳が實際腫物にさはるのだとし、だから「柳のさはる」でなければならぬと主張して居る（頭註參照）。しかし句は柳のしなやかさを言ふのが主であるから、やはり比喩的に解すべきであらう。隨つて句形は「さはる柳」で差支ない。卑近な比喩でその感觸をあらはした所が面白いのである。

春の雨いと靜に降りてやがて晴れたる頃、近きあたりなる柳見に行きけるに春光きよらかなる中にもしたゝりいまだをやみなければ

八九間空で雨降る柳かな(3)（花は櫻）

八九間は柳の高さである。その木高い所から柳の絲を傳つて雨雫が滴る。空はもう晴れ渡つて居るが、雫がきら〳〵と光りながら、柳の絲が細く靡いて居るさまは、そこだけまだ雨が降つて居るやうである。それを直に八九間の空から雨が降ると言つたのである。雨後の柳の風情を面白く寫して居る。『梟日記』によると、これは嘗て芭蕉が大佛のあたりで見ておいた柳のさまであるといふ。かなり大きな柳なので、わざ〳〵見に出かけたものと見える。

富花月　草庵に桃櫻あり、門人に其角・嵐雪あり

兩の手に桃と櫻や草の餅（桃の實）

句意は詞書で明かである。俊秀の門人に富む事を誇つたので、桃と櫻は全く比喩である。草の餅はたゞ季題を定めたにすぎない。雛祭の頃の桃も櫻も艶を競ふさまとしたのである。

(1)この句元祿二年もしくは三年以前の作。

むすぶより早齒にひゞく泉哉(1)（都曲）

手に掬ぶから早くも齒にしみわたる程に冷たい清水である。清冽な感じが巧みに現はされて居る。

座右之銘(2)

人の短をいふ事なかれ
己が長をとく事なかれ

(2)これは湛琢の座右銘の句をそのまゝ前書としたのである。

物いへば唇寒し秋の風（芭蕉庵小文庫）

前書がすでに示して居る通り、教戒の意を寓した作である。もと史記の「言也牙齒寒」の如き句に基いたのであらうが、それをそのまゝ十七字に翻譯したのではない。唇に吹く秋風の冷やかさが、實感的に味ははれる所に、やはり俳諧としての文藝性がある。勿論これは純藝術的な感興に發した作ではない。けれども少くとも芭蕉は、自省の箴を藝術的表現に求めて、この句を得たのである事を認めねばならぬ。

白露をこぼさぬ萩のうねりかな(3)（翁草）

露をもこぼさぬといふので、萩のなよやかにうねるさまが巧みに寫されて居る。繪のやうに美しい句である。『栞集』によれば、この句はもと杉風の採茶庵の垣根に咲いた萩をよんだものだといふが、後に又萩の畫讃にも用ひて居る。畫讃などには誠にふさはしい句である。

(3)この句元祿五、六年頃の作と推定される。句形芭蕉庵小文庫・類柑子には上五「白露も」、栞集には「白露もこぼれぬ」とあり、栞集のは初案と思はれる。

猿曳は猿の小袖を碪かな（續有磯海）

句意は明かである。猿の小袖を見つけたのが俳諧であるが、たゞ輕い滑稽だけの句ではない。やはり猿曳の生活に對する同情が籠つて居る。『猿蓑』の附句「猿曳の猿と世を經る秋の月　芭蕉」が思ひ出される。或はそれと同じ頃の作かもしれない。

畫讃

秋海棠西瓜の色に咲きにけり（正風彦根體）

『東西夜話』(1)によると、この句は芭蕉が湖南の曲翠亭にあつた時、水鉢のあたりに秋海棠が咲いて居たのを見て、この花は句作し難いものだからと言つて、右の句を言捨てたといふ。秋海棠も西瓜も江戸時代の初め頃舶來したもので、當時はなほ珍らしく思はれて居たのであらう。その二つの物が色彩の水々しい感じでよく似よつて居る。そこで芭蕉はそのまゝ「西瓜の色に咲きにけり」と言つたのだが、それで輕快清新な味が出て居て面白い。

(1)この話によれば、句は元祿三、四年の作か。

何食うて小家は秋の柳かげ（茶の草子）

葉も半ば散つてしまつた柳の木陰に、小さな家が一軒ある。何を商賣にして居るやうにも見えぬ。どうして生活して居るのだらうと、ふと思ひやつたのである。「秋深き隣は何をする人ぞ」ほどの神祕感はないが、單なる寫實の句ではない。秋の柳の寂しさから、人間生活の中に深くはひつて行く所がある。

(1)墨吉物語には「冬之竹」と題し、句の上五「木枯は」とある。

(2)爐開は冬になつて今まで閉ぢて居た爐を開き、火燵など入れる事。又特に茶式で風爐をやめ地爐を用ひ始める事。この句はいづれの場合としても解される。

(3)この句元祿五、六年頃の作と推定される。

竹畫讃(1)

木枯や竹に隱れてしづまりぬ（鳥の道）

木枯が烈しい音を立てて吹いて來る。それが一しきり竹の葉をざはめかしたまゝ、その竹の中にでも隱れてしまつたやうに、あとはひつそりと靜まり返る。さういつた實感を畫に讃したのである。或はすでに句があつたのをそのまゝ畫讃としたのかも知れぬ。いづれにせよ疎竹に渡る淅瀝の響を聞くやうな佳句である。

爐(2)開や左官老い行く鬢(びん)の霜（韻塞）

爐開に出入の左官を呼んで、壞れた所などを繕はせる。今年はその左官の鬢にもずつと白髮が增したやうだ。と、同時に主じ自身の老も思はれるのである。寒い冬支度のわびしさと、老境を歎ずる心とがしんみり感ぜられる。

生(3)きながら一つに氷る海鼠(なまこ)哉（續別座敷）

生きながら海鼠が何かと一しよに氷りついて居るさまである。生きながら氷るといふのに、海鼠の鈍な性情が見盡されて居る。そしてその鈍さをあはれむ芭蕉の心が下に動いてゐる。

連句篇

凡例

一、本篇には蕉風連句の變遷と特質とを併せ窺ふに便な見地から、冬の日・猿蓑・炭俵から各一卷づゝを選んで、これに註釋を加へた。

一、連句には特殊な形式上の法則があつて、初學者には一往その說明をしておく必要がある。しかし玆には詳細を說く遑がないので、蕉風時代以後最も汎く用ひられた歌仙について、その重要な法式だけを左に述べる。

連句は百韻をその基本の形式とし、これは百句を懷紙四枚に記すのである。懷紙とは詠草の用紙のことで、その一枚を一折(おり)と稱し、又一折を各々表と裏とに分け、最初の一枚を初折又は一の折、次を順次二の折、三の折、最後のを名殘折(なごりのおり)と呼ぶ。而して歌仙は一卷の句數三十六句、懷紙二枚を用ひる形式のものをいひ、もとこれは各句に歌仙の名を賦(ふ)したもの（讀みこむ事）のから起つたといふが、後にはたゞ卅六句を連ねる一體の稱となつた。さ

て歌仙を懐紙に記すには、初折の表に六句、同裏に十二句、名殘折の表に十二句、同裏に六句と定まつて居り、一卷の最初の句を發句、第二句を脇句、第三句を第三、一卷の最後の句を擧句、その他の句を平句と呼ぶ。なほその外に一卷中に月の句が三句、花の句が二句は必ずなければならず、又戀の句も少くとも一箇所はよむのが普通である。而して戀の句については特に制限はないが、月・花の句はそのよむべき場所が一定されて居り、月は初折表五句目・初折裏八句目（後世は七句目）・名殘折表十一句目の三箇所、花は初折裏十一句目・名殘折裏五句目の二箇所である。これを月の定座・花の定座と呼ぶ。たゞし定座は大體の標準を示したにすぎず、實際に當つては臨機應變必ずしもこれに拘泥する必要はないのであるが、少くとも定座までには月・花の句をそれ〴〵よむ事になつて居る。例へば初折表で第四句目迄月の句がなければ、第五句目には必ず月をよまなければならぬ。それを第六句以後に翻す（定座より後に月花の句を出すこと）のは普通禁ぜられて居るのである。これは要するに自然の景物の最上たる月・花の句を、一卷中適宜な箇所に出す爲の用意に外ならぬ。なほ發句以下特殊の句について、作法上特に必要な點を略述しよう。

(一)**發句**　發句には季の詞と切字とを必要とする。その必要な理由については、歴史的な說明を要するので今は省くが、とにかく發句はその季節に應じて、必ず當季の詞をよみ込まなければならない。

(二)**脇句**　脇句は發句の季に隨ひ、發句の餘情を盡すのを主眼とする。即ち發句が春ならば脇句も春、發句に七月の景物をよんであれば、脇句も七月の景物で附けねばならぬ。

(三)**第三**　第三は脇から一轉して新しい局面を展開させる第一歩である。即ち連句一卷の變化はこゝから始まる。通常「て」といふ天爾波で留め、又に・らむ・もなし等の天爾波を用ひる事もある。

(四)**月の句**　月は秋の清光を賞するのを本體とするが、前句との關係上、他季即ち春・夏・冬の月を附けても勿論差支ない。なほ發句が秋季である場合には、脇か第三かに月の句を出すのが普通である。

(五)**花の句**　花といへば俳諧では櫻の花の事であるが、しかも花の句では必ず「花」といふ詞を用ひねばならぬ。「櫻」といふ詞を代用する事は、特殊の場合でなければ許されない。なほ眞實の花でなく、花嫁・花の都等の如き比喩的な詞でも、それが花の象徴的意義で解されるものは花の句に取扱はれる。

(六)**戀の句**　戀の句は歌仙であれば一卷中二箇所もしくは三箇所に出すのが適當とされる。場所は一定して居ないが、たゞ初折の表には普通出す事を許されない。又戀の句が出たら、これを一句で捨ててはならぬ。少くとも二句は續けねばならない。

(七)**擧句**（揚句）　一卷中の最後の句であるから、なるべく穩やかに安らかに結ぶのを宜いとする。前句が花であるから、通常春季の句で終るのであるが、花が定座より前に引上げられて居る場合は、他季若しくは雜の句を附ける事もある。

その外連句で最もやかましいのは、指合去嫌の法則である。これは句を附ける場合に、それより以前の句と牴觸することを避ける爲に設けられた制禁で、例へばある語とある語と

は何句を隔てねばならぬとか、何といふ語は一卷中何句以上用ひてはならぬとかいふやうな事を定めたものである。しかしこれは要するに一卷の變化と統一とをはかり、單調に流れしめない爲に生じた法則であるから、その眞意を領會すれば必ずしも形式的な準繩に泥む必要はない。蕉風の連句ではむしろその點は自由な態度をとつて居る。だから今はたゞさうした法式が存した事を知るのみでよからう。なほ最後に心得ておかねばならぬのは季のことである。季の詞が發句に必ず必要とされる事は既に述べたが、その他季の詞については次の如き法則がある。卽ち春季と秋季の句が出た場合には、同じ季の句を三句以上續けねばならぬ。但し五句以上になつてはならぬ。又夏季と冬季の句は一句きりでよく、二句以上續けてはならぬ。例へば發句が春なら、脇、第三までは勿論春。第四句は春でも他季でも又雜（無季）でもよい。第五句までは春季をつゞけてよいが、こゝは月の定座であるから、その關係上秋季の句となる。隨つて前の第四句も普通は雜である。何となれば第四句が春だと、次に秋季に移りにくいからである。

一、頭註欄には法式上注意すべき事を記し、なほ語句に關する註も交へた。

一　木枯[1]の卷

笠は長途の雨にほころび、紙衣はとまり〳〵の嵐にもめたり、わびつくしたるわび人、我さへあはれにおぼえける。むかし狂歌[1]の才士、この國[2]にたどりし事をふと思ひ出て申侍る

狂句木枯の身は竹齋に似たる哉　芭蕉

詞書は長途の行脚にやつれて、侘しい姿で尾張の國に辿りついた事を述べ、昔同じやうな旅姿でさまよつた竹齋に、我が身を思ひ比べたのである。その竹齋は狂歌の才士だつたが、自分はそれに對して狂句をよまう。さういふ心もちで「狂句」の二字を句の頭に置いたので、この二字は一句として無ければならぬものではない。しかしこの詞書から句に續けてよむと、「狂句」が浮いた文字でない事はおのゞから味はれる。發句篇參照。

誰そや[3]とばしる笠の山茶花　野水

木枯に吹き落ちた山茶花が、笠に當つて花瓣がパッと亂れ散る。その音に驚いて、笠の主は誰だらうといぶかつたさまである。「似たる」に「誰そや」が打てば響く如く應じて居る。恐らく野水の家のあたりには、山茶花が盛りに咲いて居たのであらう。門前の笠の音に驚いたあるじが、竹齋に似た客を迎へ入れた挨拶の意が含まれて居る。『冬の日』五歌仙の第五卷の揚句が、

山茶花匂ふ笠の木がらし　羽笠

であるのも、やはり一種の挨拶としてこゝに應じて居る。又『笈の小文』の旅に芭蕉が江戸を發足する際、「旅人[4]と我が名呼ばれん初時雨」の吟があつた脇に、

(1)貞享元年の冬、尾張で興行された。七部集の第一篇たる冬の日に收められてある。

(1)竹齋。
(2)尾張の國。

○狂句木枯の　發句。冬季。

○誰そやとばしる　脇句。冬季。
(3)とばしるは飛び散ること。「誰そや走る」とよむ說もあるが、原本は字に濁點が施してあるので、かく訓むのは誤である。

(4)發句篇參照。

また山茶花を宿々にして　由之

と付けたのも、この野水の山茶花の宿を思ひ浮べたのであらう。

有明の主水に酒屋つくらせて　荷兮

○有明の　第三句。秋季。月の句。

(1)曲齋の婆心錄には「昔京に何某の主水と申す大内の御棟梁あり。有明の歌に名高き故に世襲つて有明の主水といへりとぞ」とある。その他なほ諸說が多い。

(2)元祿二年刊『京羽二重織留』名酒屋の條に「後水尾院樣御製あり。堀川御池下ル町　有明　富田屋」とある。なほ有明といふ酒のことは諸書に散見するが、引用を略する。

(3)酒屋は酒を賣る店もいふが、こゝは酒を製造する家と見た方がよい。

(1)有明の主水については諸說あるが、實在した人物ではなく、作者が假に設けた人名である。有明の主水といへば物かはの藏人・待宵の侍從の類で、もとよりたゞの主水ではない。何となく風雅の人の思ひがするのであるが、こゝに有明の名を案じたのは、(2)當時京都の酒屋で「有明」といふ名高い銘酒を賣出した店があるので、それに因んだのであらう。その「有明」といふ銘は後水尾院の御製によつて名けられた由で、さうした點から「有明の主水」が酒屋普請の棟梁か奉行人かの名として、いかにも優雅な聯想をもつて來る。一句の意は有明の主水といふ名も風流な男に差配させて、(3)酒屋を作らせるといふので、前句とのかゝりは、その有明の主水が風雅な笠などを冠つて普請場を見廻つて歩く、その笠に山茶花が落ちるさまとしたのである。笠のさまが一際目立つので、「誰そや」と注意したのである。なほこの有明は人名であるが、それに月の意を通はせてこれを季の詞としてある。卽ちこの句は秋季で月の句として取扱はれて居る。隨つて一句にも秋の早曉の爽かな氣分がおのづから背後に感ぜられるわけである。

かしらの露をふるふ赤馬　重五

○かしらの露を　初表第四句。秋季。

早曉酒屋の軒端に花をつけた赤馬が着いて、しとゞに濡れた朝露を振ひ落して居る光景である。一句の意も前句とのかゝりも明かである。

朝鮮のほそり薄の匂ひなき　杜國

○朝鮮の　初表第五句。秋季。

(1)ほそり薄は細い薄。冬の日註解等には朝鮮芒といふ一種の芒があると說いて居る。

(2)匂ひは色つやの義。

これは荒野に立つ馬のさまである。生えた芒も朝鮮產の細い種類で、色澤さへもなく一入蕭條たる感を增す。

日のちり〳〵に野に米を刈る　正平

○日のちり〳〵に　初表第六句。秋季。

ちり〳〵は日の沒するさまにいふ語。

呼立てて日もちり〳〵や友千鳥　定明（元祿四年蓮の實）

寺を出て日はちり〳〵や蕗の薹　鷺助（元祿十六年塵の香）

米を刈るは稻を刈るといふ方が普通であるが、地方によつてはかく言ふのかもしれない。前句をうけて秋の田家の營みをつけたのである。夕日が赤く沈まうとする頃、野にはなほ稻刈る人の姿が淋しく殘つて居る。

我が庵は鷺に宿かすあたりにて　野水

○我が庵は　初裏第一句。雜。

山陰などに庵を結んで、世をのがれ住む風流隱逸の士であらう。前句を庵から眺めやつた景としたのである。「鷺に宿かす」は「日のちり〳〵」におのづから應ずる。『婆心錄』に「鷺に宿かすといふは風流人の詞遣ひなり。又鷺の寢に來るとあらば道心坊の庵ならむ。詞の姿とはこの事なり」とある。

髮はやす間を忍ぶ身の程　芭蕉

○髮はやす間を　初裏第二句。雜。戀の句。

一旦の失意か悲しみに出家はしたが、再び俗縁にひかれて髪を生やさうといふ庵の主である。流石に人目も思はれて、暫くかうした所に忍んで居る身の程を、つくづくと思へば煩悶も多からう。しかし捨て難いのは浮世の妄執である。前句「鷺に宿かす」に、獨ある寂しさにたへない情がある。そこを芭蕉は見逃して居ない。

○いつはりの　初裏第三句。雜。戀の句。

いつはりのつらしと乳をしぼりすて　重五

前句の髪生やす人を女と見て、戀の情を定めたのである。男の僞りを恨んで切つた髪か、また人の爲に切られた髪とも解し得る。後の如く解すれば、さまざまな小説的な聯想も加はつて來るであらう。例へば男が故らに妻を疑つて髪を切つたとか、或は忍び妻が本妻の妬みを受けた場合などが考へられる。自ら髪を切つたとすれば、流石に子の上などに心引かれて一旦の決心も鈍つたさまと見てよい。人に切られたのであれば、その見にくいさまを恥ぢて暫し人目を忍んで居るのである。とにかく子までなした間の男と別れ、その上子供とさへ引離されて、張出る乳を搾り捨てつゝ僞多き男の無情を恨んで居る女のさまである。前句はその一句だけではなほ戀の句とは言へない。附句にそれを戀と見定めて戀の句を附けると、そこで二句共に戀の句として取扱はれるのである。

○消えぬ卒塔婆に　初裏第四句。雜。

消えぬ卒塔婆にすごゝと泣く　荷兮

前句を子に死別して歎く母親と見たのである。「いつはり」はこの場合、世間の相がすべて虚假である意に解されねばならぬ。「消えぬ卒塔婆」はまだ墓標の文字も眞新しい意に、亡き兒の面影が目前から消え去らぬ心をも、おのづから含んで居る。戀を無常に轉じた附句である。

○影法の　初裏第五句。冬季。
(1)影法は影法師に同じ。

影法の曉寒く火をたきて　芭蕉

前句の無常をそのまゝ受けて、喪屋のさまを附けたのである。卒塔婆のほとりに終夜寢もやらず明して、曉寒きまゝ焚火に纔に暖をとつて居るのでもあらう。墓前に泣く人の影が、うそ寒く地上に映つて居る。悲寥の氣人に迫るものがある。

○あるじは貧に　初裏第六句。雜。

あるじは貧にたえし虚家　杜國

虚家は空家である。今はあまり聞かぬ言葉であるが、古くは用例に乏しくない。

訪ふに内に居ぬは人の氣も扨は秋

虚家を尋ねありきぬ秋の暮　虎角（元祿七年芦分船）

虚家や花たちばなの花つくし　牧童（元祿十一年續有磯海）

虚家やなみだのあとの蝸牛　閏毛（天明八年夜の柱）

即ち今いふ明家に同じ意である。貧窮の間に一家は離散し、あるじも住み絶えた空家に、浮浪の旅人などが焚火をして居るさまとつけたのである。前句の悲寥の氣に應じて居る。大和物語や謠曲の芦刈の俤として解する舊説もあるが、それは寧ろ詮鑿に過ぎるものであらう。又「たえし」(2)を「堪へし」と見る説もあるが、虚家がすでに明家の意であれば、貧に堪へて住むと解するは無理である。

(2)原本に「たえし」とあるので、歴史的假名遣からいへば、これは勿論「絶え」でなければならぬが、古くは假名遣も正しく定まつて居ないので、「堪へ」と見る説も有り得るのである。

○田中なる　初裏第七句。秋季。

田中なるこまんが柳落つる頃　荷兮

小萬が柳を實在について求め、或は伊勢の浮洲、或は攝津の田中などとする說もあるが、これまた有明の主水と同樣な假想的なものと見るべきであらう。小萬といへば關の小萬の名もある如く、おのづから宿場女郎などが聯想される。その小萬の名を負うた柳の葉が、はらはらと散る頃である。田中も固有名詞といふよりは、たゞ田の中にあるといふだけでよい。宿驛の出はづれなどの情景であらう。主は絶えて家空しく荒れ、名は柳に殘つて遊女はすでに亡い。二句の間荒廢懷古の情が互に通つて居る。

○霧に舟曳く　初裏第八句。秋季。

霧に舟曳く人はちんばか　野水

前句の柳に水邊の景を附けたのである。霧の中に舟を曳いて上る人の恰好が、丁度跛のやうに見えるといふので、舟曳の實狀を知つて居る人ならば、「ちんばか」の語の下し得て妙なのを感ずるであらう。堤を越えて小萬が柳は枝も瘠せ、岸に沿うて跛行の人影が動く。一幅畫繪のやうな景である。さてこゝに「ちんばか」の形容があるのによつて、これまで數句悲寥沈痛の氣が續いた緊張が、輕く破られて居る事を見逃してはならない。連句の變化である。その變化は小萬が柳の句からすでに見られるのだが、この句に至つて全く輕快な氣分へ轉換されてゐる。

○黃昏を　初裏第九句。秋季。月の句。

黃昏を横に眺むる月細し　杜國

淀川などを舟行する客が、船中から遠く岸のあたりを望んださまである。

○隣さかしき　初裏第十句。雜。

隣さかしき町に下り居る　重五

さかしについては「嶮し」、「黠し」の二說がある。前說に從へば高野・吉野のやうな坂に沿つた町のさまだとするのであるが、それを特に隣が嶮しいといふのは、一句として意の係る所が極めて薄弱である。後說の意に解して初めて隣の語もきいて來るのみならず、一句の仕立も面白く聞かれる。下り居るは宮仕する者が奉公を退いて宿に下りること、又數日の暇を得て家に歸ることにもいふ。こゝはいづれと見てもよからう。一句は人氣の惡い町に下り居る女房などのさまである。口さがない近隣の人との交りもおのづから疎く、つゝましく淋しく住んで居る上品な人の面影が浮んで來る。その人が黃昏の月を獨り靜かに眺めて居る風情である。

○二の尼に　初裏第十一句。春季。花の句。

(1)二の尼は尼になつた官女の第二位の人である。

二(1)の尼に近衞の花の盛りきく　野水

前句の下り居る人の、昔を憶ひ語るさまである。すでに宮仕を退いて年久しくなる。隣點しい町に淋しく暮して居る所へ、偶々訪ねて來たのは二の尼であつた。その二の尼に近衞の花はもう盛りであるかなどと問ひきくのである。近衞の花といへば古來名高い近衞殿の糸櫻がすぐ想はれるが、こゝは特に糸櫻と限るよりは、たゞそれで禁裏近いあたりの意をほのめかしたにすぎない。前句の人の上薦めいた情趣を捉へて、高貴のあたりの花を附けたのである。

○蝶はむぐらに　初裏第十二句。春季。

蝶はむぐらにとばかり鼻かむ　芭蕉

前句の二の尼を、昔宮中に時めいた人の、今は葎の宿に侘居して居るさまと見たのである。

一句は二の尼が近衛の花のさまを人に問はれて昔を憶ひ、また今の自分の身をかへりみて悲しむさまである。葎に飛ぶ蝶は眼前の景であるが、その蝶に不遇の身を思ひよせて、「蝶は葎に」とばかり言ひさして尼は泣き入る。花に遊んだ昔を偲ぶのであらう。この句二の尼に近衛の花の盛りを聞いた相手のさまと解する説もあるが、それでは前々句まで意が復つて來る。連句は一歩毎に新しい境地に踏み入つて行くので、附句は前句のみに附き、前々句まで復つて附けるのではない。打越を離れて新しく附けて行く所に、一卷の變化があるのである。

(1)前々句を連俳の用語では打越（ウチコシ）といふ。

のり物に簾透く顔朧なる　重五

○のり物に　名殘裏第一句。春季。
(2)のり物は駕籠の上等なもので、相當の身分ある者又は婦人の乘用である。
(3)朧は俳諧の季語としては春の夜の朧たさまをいふ。

『冬の日注解』に「是は前句の人にして、其の人の位を定めて、蝶は葎と答ふるその詞のただならぬ所を、上薦のさまと見て附けたり。簾すくといふに其の人柄をも知るべし」とある。蕉風の位付については、なほ後に詳説するが、要するに前句に現はれた人物の貴賤貧富等を見定めて、それに相應した位の句を附ける事である。それは即ち蕉風連句に最も重んぜられる匂の調和といふ事に歸する。連句であるから、勿論意味の上で前句とつゞいて居なければならない。けれども單に意味の連續のみを主とするのは、所謂心附と稱する附方で、談林風の附方などは多くこれである。芭蕉はそれから進んで、更に一句の匂を中心として附けようとして居る。この匂附に至つては意味の連續はむしろ從である。前句と附句と匂の相映發する所に、より複雜高次な文藝美が味はれる。さてこの句は前句の鼻かむ人を上薦と見て、乘物の簾に透いて朧に見える顔を附けたのである。前句に對していかなる場所、いかなる事情等といふ如き意味の上は、たゞおほよそに解すべきで、それを詳しく説き定める必要はない。

○今ぞ恨みの　名殘表第二句。雜。

今ぞ恨みの矢を放つ聲　荷兮

○盗人の　名殘表第三句。雜。
(1)吹折れては語格的に正しくは「吹折られて」とあるべきだが、これは一種の慣用的な言方と見てよい。

これは全く心附である。つけねらふ仇を見つけて、恨みの矢を放つといふので、小説的な曲折を設けたのであるが、あまりに前句の意につきすぎた嫌ひがある。

盗人の記念の松の吹折れて　芭蕉

盗人の記念の松といへば、例へば美濃國青野村に殘る熊坂長範物見の松の如きが想はれる。恨みの矢を放つあたりの背景を附けたのである。悽愴荒涼な感じを釀し出して居る。

○しばし宗祇の　名殘表第四句。雜。

しばし宗祇の名をつけし水　杜國

美濃國郡上郡山田庄宮瀬川のほとりに宗祇の清水がある。白雲水ともいふ。東常縁が宗祇から古今傳授を受けて、こゝまで送つて來て別れた遺跡だと傳へて居る。前句の松を長範物見の松として、同じ國中の宗祇の水を以て對したのである。一は盗人の記念となり、一は風雅の名を殘す。しかしいづれも流轉の世相は免れ得ず、松は吹折られ、清水もしばしの名を止めるだけで、やがては忘れられてしまふであらう。かれもこれも一時の假現である。

○笠脱ぎて　名殘表第五句。冬季。
(2)北時雨は北風と共に吹きつける時雨。
(3)「世にふるもさらに時雨のやどりかな」

笠脱ぎて無理にも濡るゝ北時雨　荷兮

前句を歌枕など尋ね歩く風狂の人と見て附けたのである。折から降り出した時雨に、宗祇の名高い句もおもはれるまゝ、濡れずともよいのにわざ〳〵笠を脱ぐさまである。

○冬がれわけて　名殘表第六句。冬季。
(1)唐苣は俗にいふ不斷草。四季通じて畑にある。

冬がれわけてひとり唐苣(1)　野水

滿目多枯の野園に、ひとり唐苣だけが青々として居る。無理にも濡れ行く風狂の旅人、その通りすぎる傍に眼を移せば、物にも似ずひとり青い唐苣がある。人と物と氣趣おのづから感合する所がある。

○しら〳〵と　名殘表第七句。雜。

しら〳〵と碎けしは人の骨か何　杜國

前句の蕭條たる冬枯のさまを主に附けた句である。何か白々と碎け散つたものが見える。人の骨だらうか何だらうかと疑つたので、肌に寒さが迫つて來る。

○烏賊は夷の　名殘表第八句。雜。

烏賊は夷の國の占形　重五

占形に用ひるもの、支那では龜の甲、日本では鹿の骨である。それに因んで野蠻未開の夷の國では、烏賊の甲を燒いて占形にすると案じたのが、この句の趣向である。前句に人の骨かと疑つたものを拾ひ上げて見ると、それは夷の國の占形に用ひる烏賊の甲であつたといふので、事はもとより架空の想像にすぎない。烏賊の甲の占形とは、いはゞ荒唐虛誕の事を設けて俳諧の興としたのである。かうした興を主とする事は、貞門・談林時代に專ら行はれた事で、當時の俳諧とは專らそのやうな知性的な滑稽と解されて居る。その名殘がこゝになほ見られるのである。

○あはれさの　名殘表第九句。夏季。

あはれさの謎にもとけし郭公　野水

時鳥の鳴聲について吉凶禍福を占ふ事は古來多い。今その一聲を聞いて、我が身の拙い運命の謎も解けた氣がするといふので、前句を異域に流浪する人と見てつけたのである。占形に謎と附けるのは、些か親しきに過ぎて面白くない。このやうに前句のある言葉に、直接の緣をもつ言葉を案じて附けるのは、附物又は物附と稱して貞門時代には最も多く行はれた。これは專ら知識的な聯想を中心とする附方で、貞門・談林の俳諧が一種の遊戯文字から多く出る事が出來なかつたのはその故である。蕉風俳諧の特質は、さうした境地を全く止揚した所に見出されねばならないが、『多の日』時代まではなほ古風の餘臭をかうして幾分殘して居る。

○秋水一斗　名殘表第十句。秋季。

秋水一斗もり盡す夜ぞ　芭蕉

秋水は秋の水である。一斗漏り盡すとのみでは、桶の水か鹽の水か不明であるが、「漏り盡す夜ぞ」とあるので、長夜を刻む漏斗の水たる事が察せられる。斗は勿論斗升の斗で、水量を示す辭ではあるが、漏斗の字面とおのづから通ふのも面白い。前句の郭公を謎句などの題に出されたものと見て、水時計の水が一斗も漏り盡す秋の夜を、それを解く爲に考へ明かした體を附けたのである。前句夏の句にすぐ秋の句を附けたのは、郭公をかうして實の景物でなく取扱つたからで、もし前句を實に郭公の鳴くさまと解すれば、秋水一斗は季節上全く不合理な事になつてしまふ。これは連句の季移りに於ける一の技術である。一(1)に秋水を酒の事とし、「もり」は盛りだとする說もあるが、酒を秋水と言つた出典は全くなく、芭蕉がさうした語を濫りに造つたとも思はれない。これは次句の李白にひかれた妄解に過ぎない。

(1)七部集大鑑所引一說に「秋水は酒なり。アキミヅとは云はず、シウスキとよむべし。秋は酉の方にて金氣なり、酉は酉なれば三水にひよみの酉を書きて酒の字の義も是によるとなり、一斗もり盡すは酒宴なり。」

○日東の　名殘表第十一句。秋季。月の句。

日東の李白が坊に月を見て　重五

(1)この事丈山の詩集『覆醬集』の中に見える。

○巾に木槿を　名殘表第十二句。秋季。

(2)この故事は開元遺事・羯鼓錄等に見える。

(3)東風流（寶曆六年）

日東の李白は舊註に石川丈山の事として居る。丈山[1]の詩才を感じて、朝鮮の人權侶が「君を以て日東の李杜と爲さむも妄に非ざる也」と稱した事によるのである。たゞしこゝは必ずしも丈山と、その人を定めるには及ばない。李白に比すべき我が朝の詩人である。例へば丈山の如き隱士と見て勿論差支ない。その詩人の住む坊、例へば洛北詩仙堂の如き幽居に、漏斗のもり盡すまで月を賞するとの一句で、前句とのかゝりも明かである。秋水一斗の漢語調に日東の李白を以て應じたのはよいが、もし「李白一斗詩百篇」の詩句に因んだとすれば、一斗と李白とは所謂物附に近く、やはり古風の調を脫しない。

巾（きん）に木槿（むくげ）をはさむ琵琶打　荷兮

巾は髮を包むきれ。巾に木槿をはさむは、汝陽王[2]の故事を翻した作意である。汝陽王は音樂に巧である。嘗て絹帽を戴いて曲を打した。玄宗がその帽の上に紅槿花一朶を置いたが、曲の終るまで花が墜ちなかつたので、大にこれを賞したといふ。羯鼓を打つ手が急なのにも拘はらず、滑り易い帽上の花を靜かに保ち得たのは、汝陽王の技の妙なるが爲である。一句はこの故事をふまへて帽を巾とし、羯鼓を琵琶にかへた俳諧である。然るに琵琶打の語が甚だ不審で、從來一も明解がない。一句の意からすれば琵琶を彈ずる人と見ねばならないが、國語の「打つ」とはすべてその物を工作する義で、面打・鞍打等は面を作る人、鞍を作る人である。これに倣つて解すれば、琵琶打は卽ち琵琶を作る工人でなければならぬ。しかしそれでは一句の興趣は索然として來る。尤も琵琶打だけが特殊の用法で、琵琶彈きの義ではあるまいかとも考へられるが、それは當時の用例に徵して定める外はない。よつて[3]今その用例を些か集めて見たが、それはすべて江戸後半期に屬する文獻のみで、貞享・元祿頃の例は一も知る事が出來ない。これは管見の故でもあらうが、とにかく後半期の例のみによつて考へると、その中若干意味の不分明なものもあるが、大部分は琵琶彈の意と見られる。特に『續一夜松』・『霰供養』・『ふる時雨』等の例は確かに琵琶彈である。隨つて問題は容易に解決されたやうであるが、こゝに注意すべきは、これらの用例がすべて俳諧に限られ、――俳諧以外の用例はなほ一も知らない。――しかも蕉風復古の機運が盛んになつた寶曆以後のものたる事である。するとこれらはすべて『冬の日』の語句を假り用ひたのではあるまいかといふ疑が生ずる。要するに「琵琶打」といふ言葉については、なほ今後汎く用例を知り得た上でなければ決せられないが、假に頭註にあげた諸例が、『冬の日』の語句に倣つたものだとしても、大部分がこれを琵琶彈の意と解した事だけは明かである。按ふにこれは前句の「日本の李白」といふやうな語に對し、「琵琶ひき」といふ通俗な言葉ではふさはしくないので、打曲の語に因んで「琵琶打」と言つたのではあるまいか。一句の意はそれで姑く解されたものとする。前句とのかゝりは、雅人の幽居に月を觀つゝ、一曲の琵琶に興ずるさまである。

「男踏歌につきあたる夜や　仙季、
琵琶打の木賊の下の朧月　春川、花にかくれる眞似はうたゝね　故一」
續一夜松（天明六年）
「門の土橋に落穗干すころ　成美、
琵琶打の言煩ふ月の雪　凡董」
あづまがひ（寛政十二年）
「しら雲をはなれて秋のはたて哉
玉屑、厥やすむる琵琶打が月　五明」
美佐古鮓（文化十五年）
「琵琶打の茅花が吹けば出て失る
桂林」
霰供養（文政十一年）
「梅雨の霽きる鶯の羽たゝき　丁知、
琵琶打の加茂のあたりへやとはれて
脇交、あした夕べに何かとなへる
凡峯」
ふる時雨（天保四年）
「雀弓おとならしくも折捨てて　杉露、二人つれだつ琵琶ちちが弟子
万舊」

○牛のあと　名殘裏第一句。雜。

(1)萬治二年逢坂山の關寺に彌勒堂を建立した折、迦葉佛が牛に現じてその工事を助けたといふ事が榮華物語に見える。

牛のあととぶらふ草の夕暮に　芭蕉

この句舊註に牛佛[1]の故事を以て解して居る。前句の琵琶打から蟬丸に因んで、逢坂山を案じ出したとすれば、これも些か物附に近い。すでに屢々述べる如く、蕉風の完成期の作ならばさうした附方はあるべくもないが、これは『冬の日』であるから舊註の說も首肯される。逢坂山を通り過ぎる琵琶師が、蟬丸の社に詣でた序に、たそがれ頃關寺の牛佛に草を手向ける

○箕に鮗の　名殘裏第二句。雜。

さまである。

箕に鮗の魚をいたゞき　杜國

舊註室の八島の故事によつて說くものがあるが、それは鮗について强ひて意を求めようとした鑿解にすぎない。すでに前句・打越共に故事を踏んで居る。更に故事によつて解するのは、作者も煩はしく思ふであらう。これはたゞ安らかに漁村の一風景と解してよい。鮗は漁村に珍しからぬ魚である。又女子が物を頭上に戴く風習は海島に屢々見る。鮗を盛つた箕を頭に載せて運ぶ島の女が、山かげにある牛の墓に、通りすがりに草を手向けて行く夕暮のさまなどを想ひ浮ぶればよからう。

○我が祈り　名殘裏第三句。雜。戀の句。

我が祈りあけがたの星孕むべく　荷兮

鮗は子の代りにこれを燒いて難を免れたといふ傳說をもつ魚である。コノシロは卽ち子の代の義といふ。「孕むべく」の着想はそこから得たのであらう。而して前句の箕を戴いて立つ女のさまが、何となく妖氣を帶びた異樣な風にも思はれるので、咒文でも唱へながら曉天の星に子を祈るといふ劇的な脚色を構へて來たのである。その附方は全く意の上を辿つて奇を求めたもので、奇は奇であるが、蕉風連句の縹渺たる美からは寧ろ遠い。

○今日はいもとの　名殘裏第四句。雜。戀の句。

今日はいもとの眉かきに行き　野水

前句の子を祈る女を、貴人の寵を得て居る美妾を妹にもつ姉と見たのである。ひたすらに妹の幸福を願つて、ある時は貴人の胤を宿さんことを祈り、今日は又自ら化粧をしてやらうと出かけるのである。前句の劇的な構想の上に、更に同じやうな構想を加へた附方である。前句「孕む」は戀の詞で、この句も戀の情を含んで居る。

○綾一重　名殘裏第五句。春季。花の句。

綾一重居湯に志賀の花漉て　杜國

(1)保元物語に「古き湯屋をかりて常におりゆをぞしける」とあるのも、同じ語であらう。

居湯は原本にヲリユと假名附してある。[1]この語江戸前半期の文獻には屢〻散見するが、後半期になると用ひられた例が少く、特に江戸末期に至つては全く用例を見ない。卽ち『七部集大鏡』・『婆心錄』の頃にはすでにその語義が詳かでなくなつて居たのである。だから諸說紛紛として居るのであるが、[2]『懷子傳母』に「居湯ヲリユ　坐湯　窪湯」とあり、又[3]『世話盡』に「水風呂」と並べて「居湯」と出して居るのなどから考へると、要するに浴する風呂の事ではあるが、水風呂が桶を適宜の所に据ゑ、踏臺によつて入るのに對し、居湯は浴する場所よりも低く設備したものをいふらしい。隨つてこれは水風呂の如く移動し得ず、湯殿などにちやんと作りつけたものであらう。たゞし[4]頭註に示した如き用例もあつて、焚場はやり桶の下方に設けたものが多かつたらしいが、設備の都合では別に湯を沸かして移し入れたのである。――貴人の浴用の如きは專らさうであつたと思はれる。――『七部集大鏡』に「居湯は釜のなき風呂桶なり」とあるのは、居湯のすべてに當つた解說ではないが、この句の居湯はまさにこれに該當する。前句が貴人の趣であるから、特にその湯は綾に漉して移し入れるのである。折から志賀の花がはら〳〵と散り込んで、薄い綾の一重に止まつた。それを「漉て」と言つたのである。「漉て」はコシテともスキテとも訓まれるが、意の上からコシテと訓むべきであらう。美女の化粧に浴室のさまを附けたので、誠に艶な趣である。

(2)萬治三年刊。
(3)明曆二年刊。
(4)新續犬筑波集「おり湯桶のそこぬは人のつめたくて　康吉」。大湊「鬱ふかみ居湯の下をくべさせて　閑卜」

○廊下は藤の　樂句。春季。

廊下は藤の影傳ふなり　重五

春の日ざしも長閑に、湯殿に傳ふ廊下には、藤の花房の影があたゝかに映つて居る。揚句の體はこのやうに和らかで穏かなさまに終るのが通常で、この句の如きはその典型的なものと言つてよい。

(1)元祿三年の冬芭蕉の指導の下に去來・凡兆・史邦と四人で催された一卷で、猿蓑卷之五に收められて居る。芭蕉連句の圓熟した時代を代表する作の一である。

○鳶の羽も　發句。冬季。

(2)例へば貞享五年刊『正月揃』には鵰字を用ひてカイツクロフとよませてある。

(3)梁の簡文帝の詠「單鳧」に「刷羽向沙洲」。沈休文の酬「謝宣城朓臥疾」に「刷羽汎清源」等。

二　初時雨の卷

鳶の羽も刷ひぬはつしぐれ　去來

刷はカイツクロフと訓じ、整へる義である。服、唰、嘒等とも書き、江戸期の文獻にもそれらの文字が散見して居る。又刷羽の語は漢詩文に屢々見え、鳥の羽毛を治めるさまにいふ。而して刷ふは他動詞であるから、語法としては「羽を刷ふ」でなければならぬ。しかしそれでは、鳶が主で羽は從となる。こゝは是非羽が主たるべき情景である。「鳶の羽も」は語法的に誤であるとしても、この場合「鳶も羽を」とする事は斷じて出來ない。烏の濡羽とはちがつて、鳶の羽毛は荒立つた感じのものであるが、今それが初時雨にいさゝか濡れて、形もしつとりと落ちついたさまである。寒雨初めて至る日の情趣を、さうした鳶の姿に捉へた去來の詩眼も凡でない。正に一幅の畫である。

○一ふき風の　脇句。冬季。

一ふき風の木の葉しづまる　芭蕉

發句の餘情を添へるのが脇の體である。『三冊子』にこれを前後附一體の句の例としてあげ、「木の葉の句は發句の前をいふ句也。脇に一あらし落葉を亂し、をさまりて後の鳶のけしきと見込みて、發句の前の事をいふ也。共に景色の句也」とある。前後とは時間の關係について言つたので、要するに發句の時雨の景氣を言添へたのである。風が吹き靜まつて、梢には鳶の姿がひとり寒く殘つて居る。

○股引の　第三。雜。

股引の朝から濡るゝ川越えて　凡兆

第三は發句と脇と一體になつた境地から、一歩新に地を轉ずべき場である。即ち連句一卷の變化はまづこゝから始まる。第三に「何々て」と、所謂て止の形が多く用ひられるのも、さうした未了のまゝで、更に次に轉じ續いて行かうとする語氣を示す爲であらう。發句と脇とが自然の景色なので、こゝには新たに人物を點出したのである。木の葉が吹き散る冬の朝、小川を寒さうに歩行渡りする人のさまである。「朝から濡るる」といふのに、その人の生活が想はれて佗しい情が伴ふ。

○狸をおどす　初表第四句。雜。

狸をおどす篠張の弓　史邦

篠張の弓は篠竹を曲げて張つた弓である。西行の歌に「篠ためて雀弓張る男の童額烏帽子のほしげなる哉」とあり、又この歌によつたと覺しい「篠(1)ためて雀弓張る笹の雪　菊阿」の句もあつて、雀などを射るに用ひるが、この句の篠弓は

(1)正風蹇根體に出る句。

鹿のおどしに笹張の弓　嘯風（東山萬句）

とあるのと同じく、やゝ大きな篠竹をため作つて、狸・鹿等の出て來る畑際・藪蔭などに仕掛けておき、これを威すに用ひるものをいふ。篠張はシノハリ、ササハリ、いづれによんでも宜い。前句を百姓の朝早く畑に出かけるさまと見て、小川のほとりの藪蔭などにしかけた篠張の弓をつけたのである。

○まひら戸に　初表第五句。秋季。月の句。
(1)まひら戸は横に細い桟の密にある戸。玄關などに多く用ひる。

まひら戸に蔦這ひかゝる宵の月　芭蕉

蔦が這ひかゝるといへば、おのづから破屋、山居等のさまと聞える。山寺と見てもよからう。門前の藪には狸威しの弓がしかけてあり、玄關のまひら戸は蔦が這ふに任せてある。宵月の影が傾いた堂の上に淡くかゝつて居る。

○人にもくれず　初表第六句。秋季。

人にもくれず名物の梨　去來

前句の住居のさまに、世に拗ね人と絶つた偏屈者の趣を見たのである。これをかの徒然草に柑子を惜んだ類の話と混ずるのは、前句とのかゝりに於ける匂ひ・響の照應を、深く味はないものの言といはねばならぬ。これは單に物吝みをする俗物ではない。「名物の梨」とあるのに主じの氣品を看取しないやうでは、所詮瞎眼の謗りを免れないであらう。まひら戸がある程であれば、勿論鄙夫窮民の居ではない。しかしそれも蔦が這ふに任せてあつては、もとより人に驕り時めく者とは見えない。清閑を樂しむ雅人の居とも見られるのであるが、それを些かひねつて世に拗ね隠れた者の趣としたのである。そして心性が鄙しくさもしいのではない、たゞすね者たるの面目を「名物の梨」に言ひとつたのは、全く作者のはたらきであつた。これはやはり匂の感合である。『猿蓑』の如くすでに完成期に達した蕉風連句にあつては、この機微を十分に探り味はねばならぬ。

○書きなぐる　初裏第一句。秋季。

書きなぐる墨繪をかしく秋暮れて　史邦

前句の人の生活を附けたのである。同じく隠士の生活にしても、打越は專ら景色として見られ、これは直に人物を描き出さうとして居る。そこにやはり變化がある。畫は墨繪であり、しかもなぐり書の餘技にすぎない。悠々自適の生活がおのづから想はれるであらう。名物の梨を人に與へないのは、こゝに至つて愈々これを吝むのでなく、我獨り清めりと世を白眼視して居る體に見られて來た。

○穿心よき　初裏第二句。冬季。
(1)めりやすは大小に應じて伸縮し、古くから手袋・足袋・股引等に製し用ひられた。莫大小。

穿心よきめりやすの足袋　凡兆

前句を樂隠居などの境涯と見て、物足り心靜かな自適の狀を附けたのである。

○何事も　初裏第三句。雜。

何事も無言のうちは靜かなり　去來

平靜の境を言つたのである。めりやす足袋の穿心がよいのに滿足して、不平もなく不滿もなくある程こそ、世は平隠無事なのだ。實に何事も無言の間は靜かであるとは、そこに些か悟りめかした口吻を加へた曲折である。附句としては、前句の意をあまりに露はに受けて、含蓄に乏しい憾みがある。

○里見えそめて　初裏第四句。雜。

里見えそめて午の貝吹く　芭蕉

(1)猿蓑の註釋書。椎柯坊空然の著。なほこゝに引用したと同じ說は『七部集大鏡』にも見える。

○ほつれたる　初裏第五句。雜。

(2)婆心錄の說。

○芙蓉の花の　初裏第六句。夏季。

(3)連句では春又は秋の季の句が出たら、少くともその季の句を三句は續けねばならない。たゞし五句以上續いてはならぬといふ法式がある。又夏・冬の句は一句で捨ててもよい。

○吸物は　初裏第七句。雜。

(4)水前寺海苔の略稱。淡水藻の一種。肥後熊本水前寺から產するのが最も名高いのでその名を負うたのである。

『猿蓑さかし』(1)に「前の無言行を峯入と見て附けたる也。大峯に入る驗者の無言の行法あり。午の時に終りて下山するとかや。その時吹く貝の事を午の貝として、里見えそめて午の貝吹くと附けたる也」とある。それで附意は明かで、卽ち全く心附といふべき附方である。蕉風の連句といつても、句毎に匂・響きを以て附けるのでなく、時としては安らかな心附で緊張を解き、又却つてその間に變化も存するのである。

ほつれたる去年の寢莫蓙のしたゝるく　凡兆

「したゝるく」は汚れ垢じみたさまをいふ。午の貝に晝休みの體を附けたのである。さて前句に「里見えそめて」とあれば、おのづから行旅の人の情として解すべきで、里の小店などに腰うちかけて、辨當を遣ふ旅客のさまに解した舊說(2)が穩かである。緣先に敷いたのは、垢づいた去年の寢莫蓙である。

芙蓉の花のはら〳〵と散る　史邦

芙蓉といへば我が國では一般に木芙蓉をいふが、木芙蓉(3)だと秋季の景物であるから、次も秋季の句で續けられねばならぬ。然るに次は雜で、連俳の法式に反する事となる。よつてこの芙蓉は漢語のまゝの意、卽ち蓮花と見なければならぬ。一句の趣から言つても蓮であるべきである。前句の寢莫蓙といふのから、晝寢の閑を樂しんで居る池畔の景を附けたのである。ほつれた寢莫蓙から、はら〳〵と散る花の風情へのうつりを味はふがよい。

吸物はまづ出來されし水前寺(4)　芭蕉

前句の淸楚淡白な境地を奪ひ來つた附句である。まづその照應の妙味を察せねばならない。水前寺海苔の吸物といへば、もとより厚味佳肴と稱すべきものではない。たゞ淸淡の風味を愛するだけである。「まづ出來されし」は賞讚の辭で、客が亭主のもてなしに滿足の意を表するのである。池畔の小亭に主客相對して、淡い吸物の味を賞しながら蓮を見てゐる。花ははら〳〵と散る。雅趣掬すべきものがある。

○三里あまりの　初裏第八句。雜。

三里あまりの道かゝへける　去來

前句の「まづ」といふのに取急いだ餘情を見て、なほ三里の前路をかゝへて落ちついて居られないさまを附けたのである。

○この春も　初裏第九句。春季。

(1)廬同は唐の人、玉川子と號す。茶人として知られ、茶經の著がある。

この春も廬同(1)が男居成(なり)にて　史邦

廬同とは實に唐の廬同をさしていふのではない。例へば廬同の如き茶人といふ程の意である。さうした隱逸の人に仕へる下僕は、定めし朴訥忠實な男であらう。前句の前路を氣にするさまを、主用に忠實なしもべと見て附けたのである。居成は春の出替にも交代せず、そのまゝ又主家に勤めるをいふ。その忠實を愛された爲であることはいふまでもない。春の日永に僅か三里の道を氣にしながらも、ゆる〳〵と歩み行くさまも見えて、「この春も」の五文字も徒辭でない事を知る。

○さし木つきたる　初裏第十句。春季。月の句。

さし木つきたる月の朧夜　凡兆

茶人の僕の庭を見廻るなどのさまとしたのである。前句の「居成」といふに、この句の「さ

し木つきたる」は響きである。共にその所に安定する感じで照應して居る。

○苔ながら　初裏第十一句。春季。花の句。

苔ながら花に並ぶる手水鉢　芭蕉

前句庭の趣に同じく庭の景を言添へたのである。苔蒸したまゝの古い手水鉢が花に並んで居る。ついた挿木の芽も伸びた。それらが朧月の光に柔かく包まれて居る庭のさまである。景に景を以て對へた附句であるが、さし木つき、花が匂ふのにおのづから生氣の動くものがあり、しかもそれが朧月の光と手水鉢のさびとに、和らかな落着を得て居る。神韻縹渺たるとも言はうか。

○ひとり直りし　初裏第十二句。雜。

ひとり直りし今朝の腹立　去來

庭せゝりに慰んで、今朝の腹立もいつかひとりでに直つてしまつた。花に置き並べた手水鉢を眺めながら、すでに上機嫌になつて居る。

○いち時に　名殘表第一句。雜。

いち時に二日の物も食うて置き　凡兆

前句を獨身者のさまと見たのである。何事かに腹立ちながらも、鬱憤を洩らし語る相手とてもないので、おのづから腹立も直つてしまふ。食事なども無ければ食はず、有れば有るに任せて二日分も食つて置く。我ながらをかしくも又悲しい境涯なのである。舊註氣儘女、肝癪持などの體に解したものが多いが、それでは「腹立」には附くであらうが、「ひとり直りし」の語が閑却されて居る。又この句「食うて置き」といふのも腹立紛れのわざとは見えない。附句は前句の一語のみに附けるのではない。特に蕉風の連句ではさうである。

○雪氣に寒き　名殘表第二句。冬季。(1)雪氣は雪になるらしい空模樣。

雪氣に寒き島の北風　史邦

前句「食うて置き」を非常の用と見て附けたのである。北風が寒く吹きまくる日、屈竟な漁夫どもが出漁の準備をするさまであらう。九州五島地方では冬季鰯を漁するのに、北風の烈しい日を最もよいとして居る。それで勇敢な漁夫たちは、辛うじて舟を浮べる程の大あれにも出漁するのである。この句は單に島人があれの用意をする體と見てもよいが、二日分の食糧を食ひこむといふのは、漁夫出動の狀と解するのがより適切である。

○火ともしに　名殘表第三句。雜。

火ともしに暮るれば登る峯の寺　去來

人も住まぬ峯の寺、宵毎に麓の里人が火ともしに登るのである。『猿蓑さがし』に「廻船通行の目當にともす燈籠などの俤を含みて附けけるにや」と解したのは宜い。前句の「島の北風」を念頭に置けば、おのづからさうした餘意も浮んで來る。

○ほとゝぎす皆　名殘表第四句。夏季。

ほとゝぎす皆鳴き仕舞ひたり　芭蕉

麓から峯の寺まで往き反りする木下道に、この日頃聞きなれた時鳥の聲も、いつか夏も末となつてすつかり聞かれなくなつたといふのである。前句の「暮るれば登る」といふ日毎のわざに、時の經過が感ぜられる。そこに聲ををさめた時鳥を案じついたのは、誠に間髪を入れない感合の妙である。「鳴き仕舞ひたり」といふのに、季節の推移を歎ずる情も十分現はれて居る。

○痩骨の　名殘表第五句。雜。

痩骨のまだ起直る力無き　史邦

季節の推移に感傷を寓したのである。感傷の餘情はすでに前句にあつた。その餘情が病後の氣力無きさまへ、直に響いて居るのである。やつと病は癒えたがまだ起直る力さへない。病苦に喘いだ夏の間をかへりみて、「もう夏も寢て居るうちに去つてしまつたのだ。早いものだなあ」と憮然たるさまである。

○隣をかりて　名殘表第六句。雜。

(1)去來から浪化に宛てた手紙で、寛政三年その手紙の所藏者畠芦が『去來文』と題して刊行したもの。内容から見て僞作の疑はない。

(2)猿蓑「市中は物の句や夏の月」を發句とした歌仙の附句「待人入りし小御門の鎰　去來」をさす。

隣をかりて車引込む　凡兆

舊註に種々の解を試みて居るが、『去來文』[1]に「猿蓑集に源氏を下ごゝろに含みたる句有る由被二仰下一候。成程御目利の通に候。隣をかりては夕顔、待人入りし[2]は常陸の宮、かやうなる事に存候」とある。これはこの卷に一座した去來の言葉であるから、解釋上最も有力な參考でなければならぬ。卽ち源氏の夕顔の卷、源氏が大貳の乳母の病を訪うた條の俤をとつて附けたのである。源氏の本文では乳母の門が鎖されてあつたので、暫く源氏の車を隣家の夕顔の垣根に立てた事になつて居るが、この句では隣の門内を借りて車を引込む事にしたのである。すべて連句に俤の附といふのは、故事傳說に有る事をそのまゝに附けるのではない。夕顔の俤ならば夕顔の卷らしい人物・事件を作り設けるといふだけである。だから夕顔の卷に車を隣に引込む事はないといふやうな論駁は當らない。さて前句とのかゝりは、病後の人を源氏の如き貴人が訪ねたさまとしたので、隣を借るといふのに訪はれた人の住居の程も知られ、「起直る力なき」の佗しい餘情にそれが響いて居る。但し一句は心附を主とした着想である。

○うき人を　名殘表第七句。雜。戀の句。

うき人を枳殼垣より潛らせん　芭蕉

憂き人は我につらき人の義で、無情を恨むについて戀人をいふ語。前句の隣に引込んだ車を、女の許に通つて來た男が、女からしめ出しを食つたさまと見たのである。この卷にはこれまでまだ一回も戀の句が出て居ないので、芭蕉はこゝらに戀の趣向を設けようとしたのであらう。この頃は男のおとづれもと絶えて、あだし女でも出來たかと恨んで居る女の許へ、偶々男が訪ねて來たのである。女はもとより嬉しくないのではないが、日頃のねたさに門を閉めて男を入れない。ぜひ會はうといふ親切さがあるならば、枳殼垣の藕を潛つてでもいらつしやいと拗ねて出た。だが男も女の心は察して居る。どうせその中には門も開けるだらうと、車をそのまゝ返すでもなく、暫し隣をかりて引込ませるのである。さうしたかなり複雜な情景が、わづかに七七と五七五との聯繫の間に描き出されて居るのは、驚くべき技巧とも言つて宜からう。

○いまや別れの　名殘表第八句。雜。戀の句。

いまや別れの刀さし出す　去來

前句は男が外から通つて來る體として附けたのであるが、それを「別れ」の語によつて、女の許から歸り去る場に轉じたのである。もう暫くと女が引止めるのを、男はふり切つて歸らうとする。女は恨んで、「それぢやあ門はあけてあげませんよ。」と言つて見ても、どうせ歸さねばならぬのだ。もう男はすつかり身支度をしてしまつた。そして女は「今や別れの刀さし出す」である。

○せはしげに　名殘表第九句。雜。戀の句。

せはしげに櫛で頭をかきちらし　凡兆

「今や」の急迫した語氣に、「せはしげに」と應じたのである。しかし打越から前句へのつゞきは、男を歸しともない女の纏綿たる情であつたが、これはいかにも事務的な輕い別れになつてゐる。「櫛で頭をかきちらし」に女の輕躁野鄙な趣を看取せねばならぬ。宿驛の飯盛女などが、一夜泊りの客を送り出す風情と見てもよからう。眠さうな顏をして櫛でやけに頭をかきちらしながら、男に刀を渡すと一しよにぽんと背中を一つ叩き、口の中では「ほんに野暮客めが。眠くつてなりやしねえ」。そして男が門口を出るか出ないに、くるつとうしろ向いて、階子段をとん〳〵〳〵と馳け上る。三句に亙つた戀が、かうして二句づゝ全く異つた情趣で味はれる所に、連句に於ける變化の面白みがある。

○思ひ切つたる　名殘表第十句。雜。

思ひ切つたる死狂ひ見よ　史邦

前句の物狂ほしい感じに、捨身になつたもののさまを附けたのである。全く聲に應じた響の如き附方である。たゞし響・匂の感得が主となつた爲に、意の上に於ける繫がりはやゝ漠然となつた憾みがある。それは前句はどうしても女であるべきだが、この句の死狂ひはむしろ男と見られるからである。しかしさま〴〵に思ひ亂れた女が、遂に「死狂ひ見よ」とまでに決心したさまと、一通り解して差支ない。要するにこの附句のやうな場合、意の聯繫は從であり、匂の感合が主である事を、まづ十分に察しなければならない。

○青天に　名殘表第十一句。秋季。月の句。

青天に有明月の朝ぼらけ　去來

前句を死を決した勇士と見ての附である事は言ふまでもない。しかも打越から前句への死狂ひはなほ惑亂の情を離れなかつたのに對し、この句に至つては既に生死を超えたものの明朗な心境がある。殘月の影が白い早曉、爽かな秋氣は身にしみて、おのづから心も振ひ立つさまである。青天と漢語を用ひた作者の用意も見逃してはならない。實に精妙の附句と評すべきである。

○湖水の秋の　名殘表第十二句。秋季。

湖水の秋の比良の初霜　芭蕉

『三册子』に「前句の初五の響に心を起し、湖水の秋、比良の初霜と、淸く冷じく大きなる風景を寄す」とある。これで解は盡して居る。卽ち淸く冷じく大きいのが、二句の間に通ふ風趣なので、こゝに着眼する事が疎かでは、蕉風の連句は遂に語る事が出來ない。

○柴の戸や　名殘裏第一句。秋季。

柴の戸や蕎麥盜まれて歌をよむ　史邦

前句を背景として雅人田居のさまを附けたのである。蕎麥は時節の取合せにすぎない。物を盜まれながら歌をよむ洒々落々の心境、湖國の秋の爽かさにも似て居る。舊註(1)に澄惠僧都の故事を以て解するものがある。さうした俤を思ひ浮べるのはもとより差支ないが、その故事について案じた句といふのではない。

(1)古今著聞集に澄惠僧都が坊の隣家の畠の蕎麥を盜まれた事を聞き「盜人は長袴をや着たるらんそば（蕎麥と袴のそば）をとりてぞ走り去りぬる」とよんだ事が見える。

○布子着習ふ　名殘裏第二句。冬季。

布子(2)着習ふ風の夕暮　凡兆

「着習ふ」といふので、今まで綿衣など着た事のない人である事が、言外に示されて居る。前句の歌よむ主じを、都の由ある人などが、田舍に隱れ住む體と見たのである。蕎麥を盜まれ、布子を着習ふ、何となく物あはれな風情がある。

(2)布子は木綿着の綿入。

○押合うて　名殘裏第三句。雜。

押合うて寢ては又立つ假枕　芭蕉

流浪の旅である。夕の風は日毎に寒く、布子もいつか着なれるやうになつた。一夜を過す假の宿は、いつもあやしげな小宿だ。旅商人、順禮、六部、拔參の丁稚等と押合うて寢ては、又今日もさうした宿へと一日のはかない旅をつゞけて行く。

○たゝらの雲の　名殘裏第四句。雜。

たゝらの雲のまだ赤き空　去來

「たゝらの雲」について、或は蹈鞴の炎の空に映じたのであるといひ、或は信州多々良山にかゝる雲とし、或は九州多々良濱の景とするなど諸說定まらない。しかし蹈鞴の炎の赤く映つた雲を、直にたゝらの雲といふのはいかにしても無理である。多々良を地名と見れば言葉に難はない。たゞし多々良は信州、九州その他周防・陸中等いづれの地にしても、富士・淺間といふが如く世に聞知られた名所名山ではない。多々良山の雲といつても、讀者には一向感興をよび起さないのである。强ひて解すれば、前句を邊僻の地を旅するさまと見て、特に人もあまり聞知らぬ名を案じたものであらうか。更に前にあげた蹈鞴の雲說も、もし火氣の映じたやうな赤い雲にさうした特別の名があるとか、實際炎の空に映つたのをさう呼ぶとかいふ證を得れば、寧ろその方が穩かであらう。鍛冶屋などは早起きするものであり、又村端れに馬蹄をうつ鍛冶屋などある事は多いので、前句からのかゝりも、次に鞦を附けた所以も、それならば自然に解される。とにかく「たゝらの雲」についてなほ釋然とした解を得るまで、今は姑くさる地方の山の名と見て置く。さて一句の意は、多々良山あたりにたなびく雲が、まだ明けきらぬ曉の光に赤く彩られて居るといふので、前句旅人の朝出のさまにつゞけたのである。一說に「まだ赤き」は日は暮れて夕燒のなほ幽かに殘るさまとし、前句をたゞ旅中の人と見て解するものもあるが、打越にすでに夕暮があるので、こゝに再び夕暮の景を出しては指合ふ事になる。やはり明方の體と見なければならない。

○一構へ　名殘裏第五句。春季。花の句。

(1)鞦は馬具の名。馬の尾から鞍にかける紐緒。シリガイは尻繫(シリガキ)の音便である。

一構へ(1)鞦つくる窓の花　凡兆

宿場、城下町あたりの朝の景色である。一構へは宏壯な建物・邸宅などにいふ場合もあるが、こゝは

地の瘠せしから瘠藪の竹　愚情

かすかなる所を屠兒の一かまへ　直昌(季吟廿會集)

などの例に於けると同じく一區劃の意で、一定の地域を限つて鞦作る家々が並んで居るさまである。「窓の花」は花の定座だから點出したので、もとよりこの情景に不適當といふのではないが、こゝらには法式に束縛された無理が些か見られる。

○枇杷の古葉に　揚句。春季。

枇杷の古葉に木芽もえ立つ　史邦

窓の花は咲き、木の芽は萌え立つ。陽春の和氣が充ちてゐる。しかも鞦作る家に枇杷の古葉のうつりよく、上乘の揚句であらう。

(1)元祿七年春の興行。芭蕉晩年のかるみを代表する作の一である。

○梅が香に　發句。春季。

(2)この事支考の笈日記に見える。

○ところ〴〵に　脇句。春季。

○家普請を　第三。春季。

○上のたよりに　初表第四句。雜。

三　梅(1)が香の卷

梅が香にのつと日の出る山路哉　芭蕉

極めて平明な句作りである。「のつと」といふ如き俗語を用ひて、しかも些かの俗臭をも止めない。支考(2)はこの句に餘寒の風情を見出して居るが、梅のほのかな香に誘はれたやうに、山の向ふから朝日の登つたさまは、誠に早春の陽氣を感ずる事が深い。

ところ〴〵に雉子の鳴立つ　野坡

その場の景を附け添へたのである。雉子の強く勇ましい鳴聲に、陽氣の感は更に加はる。

家普請を春の手透に取付いて　同

山路の春色に人事を點じて、その情景を轉じたのである。陰曆正月末二月初頃は農家の隙な折で、その手透に家普請を初めたといふ句。折から山里の遠近には雉子が鳴立ち、手斧の音は長閑に響いて來る。おのづから豐かな農家のさまが想はれる。

上のたよりにあがる米の値　芭蕉

上は上方である。都方からの便りに聞けば、米の値も騰るといふ。百姓にとつては嬉しい便りである。前句農家の賑はしいさまに響かせたのである。

○宵のうち　初表第五句。秋季。月の句。

○藪越はなす　初表第六句。秋季。

○御頭へ　初裏第一句。秋季。

○娘を堅う　初裏第二句。雜。

○奈良通ひ　初裏第三句。雜。

宵のうちはら〳〵とせし月の雲　同

前句に米價の高低を言つたので、二百十日前などに天候を案ずるさまを附けたのである。

藪越はなす秋のさびしさ　野坡

隣とは言つても藪を隔てた向ふである。さうした隣同士が、宵のはら〳〵雨に天氣模樣を大きな聲で咄し合つて居る。前句の物淋しい餘情を承けて、藪越の高聲に「秋のさびしさ」を見出した好附句。

御頭へ菊貫はるゝ迷惑さ　同

前句の咄の內容を附けたのである。舊註屋敷町、足輕町などのさまと解して居る。前句に藪越とあり、この句に御頭とあれば、まづひそやかな屋敷町の場末に住む輕輩などの物語る體と見られる。

娘を堅う人にあはせぬ　芭蕉

丹精して育てた菊を愛惜する情の半面には、それを上長へ取入る具にしようとする程の野心もない、物堅い人物が看取される。それだけでこの句の附味は十分理解されるであらう。前句の菊を娘の名としたり、菊を貫ひに來た使が好色顏なので、秘藏娘を奧に隱すなどと解するのは、前句の匂・響・位等を全く探らないで、專ら二句の聯繫を概念的に取扱はうとするもので、それでは蕉風連句の眞面目は遂に闡明する事が出來ない。

奈良通ひ同じつらなる細元手　野坡

奈良通ひは奈良に行き通ふ商人である。同じつらは同列、同程度の意。細元手は小資本。前句の語氣にその人を批難する餘意を探り出したのである。大名の姫君か御大家の嬢樣ではあるまいし、我等と同じなみな小商人の癖に、娘を馬鹿に御大層に取扱つて居ると、仲間同士で陰口をいふ體である。前句娘をあはせぬとあるので、附方によつては二句共に戀となるべき場であるが、この附句では戀の情が甚だ薄い。貞門・談林時代では句意の如何にかゝはらず、一句の中に戀(1)の詞があれば直に戀の句として捌くので、この場合の如きも前句に「娘」の語があるから、當然(2)こゝは戀の句とせねばならぬ所である。しかし蕉風では縱令戀の詞があつても、一句の意が戀に疎ければ戀としない。この二句の場合も特に戀とすべき意がないのであるから、通常の平句として捌いたものであらう。

(1)連俳の法式では戀の詞として一定の詞を認めたものがある。「娘」などは卽ち戀の詞とされる。
(2)戀の句は一句きりで捨てる事は出來ない。少くとも二句はつゞけねばならぬ定めである。

○ことしは雨の　初裏第四句。夏季。

ことしは雨の降らぬ六月　芭蕉

前句を幾年も奈良通ひを續けて居る商人と見て、今年の天候を語り合ふ體を附けたのである。人々會すればおのづからまづ氣象天候のことを語る。況んや寒暖暑濕、苦しみも樂しみも同じに味はつて居る人同士である。この夏は雨が降らないので、特に途中の暑さが身にこたへるなどと話すのである。

○預けたる　初裏第五句。雜。

預けたる味噌とりにやる河河岸(むかふがし)　野坡

これは全く心附である。例年夏の出水に見舞はれるので、對岸の安全地帶に味噌を預けて置いたが、今年は雨も降らぬのでその味噌を取りにやるといふのである。二句の間餘意餘情の照應するものはない。

○ひたと言ひ出す　初裏第六句。雜。
(1)ひたとは頻りと、一途になどの意。

ひたと言ひ出すお袋の事　芭蕉

前句味噌の入用を法事の客まうけするさまと見たのである。味噌だから法事と案ずるので、酒ならば聟取・嫁入などの體がふさはしくなるのであらう。一句は今は亡き母親の事を、何のかのと偲び出てしきりに語るといふので、前句とのかゝりは味噌取りに行つた先方の家でのさまとも、法事の手傳に來た人々のさまとも、好むまゝに解してよからう。

○終宵　初裏第七句。雜。

終宵(よもすがら)尼の持病を押へける　野坡

ひたと言ひ出すを病尼の繰言としたのである。折柄居合せたまゝに終夜尼の介抱をしてやると、尼は年老いながらも苦しさには母親の事を思ひ出し、この持病は自分が幼い時からの事で、その爲に母親がさまゝに心遣ひしてくれたなどと、しきりに昔を懷ひ繰言するさまである。

○蒟蒻ばかり　初裏第八句。秋季。月の句。

蒟蒻ばかり殘る名月　芭蕉

月見の客も去り人も寢、座に出された重の物もすつかり食ひ荒されて、蒟蒻だけがすさめもされず殘つて居る。終宵尼の持病を押へて、曉方宵の月見の座を見たさまである。一句の景情も面白く、尼の介抱してその座に外れた人の興しらけた心もちも、をかしく味ははれる。

○初雁に　初裏第九句。秋季。
(2)乘懸は荷をつけた馬に乘ること。

初雁に乘懸(2)下地敷いて見る　野坡

乘懸下地は乘懸布團の事であらう。乘懸布團とは常にいふ言葉であるが、乘懸下地といふ語

は他にあまり用例を見ない。一句は初雁の音に誘はれて旅出立する人の、乘懸布團の敷心地など試みるといふのである。昨夜月見の座が更けて曉に及び、殘興をかつてそのまゝ旅に出る人のさまと見て附けたのである。「敷いて見る」といふのに旅を樂しむ風情が見え、商用公用などを帶びての出立ではなく、全く雅人の風流行脚らしい趣が言外に味はれる。

○露を相手に　初裏第十句。秋季。

露を相手に居合一拔　芭蕉

前句「敷いて見る」を十分に旅支度をとゝのへ、さあこれなら千里の道中でも大丈夫と、氣力の張切つたさまと解したのである。その緊張した感じが居合一拔に響いて居る。折から早天の空を初雁が鳴いて過ぎる。清爽の氣に興を發して、腰間の長劍を一拔、やつと閃めかしたさまである。場所は武家屋敷の門前、旅立つ人は若侍でもあらうか。露は秋季の景物としてあしらつたのであるが、曉露地に布いて冷やかに、秋水の光芒滴るさまも想はれ、一語置き得て甚だ妙といふべきである。この句從來の諸說すべて心附のみに解し、張切つた響に着眼する所がないのは粗漏と言はねばならぬ。

○町衆の　初裏第十一句。春季。花の句。
(1)町衆は町内の人々。
(2)つらりとは一列に、すつとおしなめて等の意。

町衆(1)のつらり(2)と醉うて花の陰　野坡

こゝでは前句の居合拔を大道藝人としたのである。花見又は祭などに、町内の人々打揃うての行樂である。花の蔭に居並ぶ人々は、みんなもう眞赤な顏をして居る。そろ〳〵日も暮に近いのであらう。今まで辻藝人のまはりに集つて居た人たちも散じ、花の梢にはいつか夕露が置かうとする。でももう一度人寄せしようといふのであらうか、齒磨賣の居合拔が、人も居ない木蔭などでやつと氣合をかけて居る。さうした情景である。こゝは花の定座であるから、ぜひ共春季としなければならない。前句秋季からの季移りに自然無理が出來るわけであるが、花の夕露と見れば穩やかに解される。

○門で押さるゝ　初裏第十二句。春季。
(1)壬生念佛は京都壬生寺で三月十四日から廿四日まで行はれる法會。名高い壬生狂言が演ぜられる。

門で押さるゝ壬生(1)の念佛　芭蕉

洛外の春色濃やかに、花の蔭に醉ふ京の町衆、壬生狂言を見て歸る在鄕の百姓達、門は人の波に押しつ押されつするのである。

○こち風に　名殘表第一句。春季。

こち風に糞のいきれを吹廻し　同

壬生寺の門前あたりは、近頃までまだ畠地が殘つて居た。元祿の當時は勿論全くの郊外だつたのである。折からの陽氣に蒸されて、いきれ立つた肥料のにほひが東風に吹廻されて來る。「いきれ」は「押さるゝ」からのうつりである。

○たゞ居るまゝに　名殘表第二句。雜。

たゞ居るまゝに肱わづらふ　野坡

前句の長閑な陽氣氣分に、無聊に苦しむ人を附けたのである。たゞ居るは何も仕事せず遊んで居る意。平素力業などする人が、偶々遊び暮らすと却つて筋が弛んで痛んだりするものである。煩ふ人は誰と定めなくてもよいが、春先は農の隙ある時であるから、百姓のぶら〳〵遊んで居る體と見るが自然であらう。百姓が働けないで氣を焦つさまといふのは「たゞ居るまゝに」のまゝにの意に當らないのみならず、前句の氣分にもかなはない解である。

○江戸の左右　名殘表第三句。雜。
(2)左右は樣子といふ程の意。

江戸の(2)左右向ひの亭主登られて　芭蕉

上る、下るは京都を中心としていふ。向ひの亭主が江戸から歸つて來て、彼の地の樣子を何かと語るといふのである。肱を煩つて徒然の折から、その土產話を聞きに行くさまと聞かれる。

○こちにもいれど　名殘表第四句。雜。

こちにもいれど唐臼を貸す　野坡

亭主の旅歸りを祝つて、急に精げた米でも炊かうといふのであらう。內儀などが碓をかりに來た。丁度こちらでもいるのだけれども、向ひ同士の親しさから、快く貸して搗かせるのである。

○方々に　名殘表第五句。冬季。
(1)十夜は陰曆十月六日から十五日までの十夜、淨土宗で別時念佛を修することと。

方々に十夜の內のかねの音　芭蕉

あちにもこちにも碓のいる頃を、十夜の客を請ずる設けをするさまと見たのである。「方々に」といふ言葉のはたらきを注意せねばならない。

○桐の木高く　名殘表第六句。冬季。月の句。

桐の木高く月さゆるなり　野坡

葉の落ち盡した木影が高く聳え、十夜の鉦の聲は霜夜に冴える。寒月の景趣が巧みに描かれて居る。

○門しめて　名殘表第七句。雜。

門しめてだまつて寢たる面白さ　芭蕉

(2)文章篇、閉關之說參照。

「人來れば無用の辯あり、出でては他の家業を妨ぐるもうし」といふ人の境涯でもあらう。(2)

(3)先師は芭蕉をさす。

前句は景、附句は情、その位相應して精妙を極めて居る。附句の位について『去來抄』には、「前句の位を知りて附くる事也。たとへば好句有りとても、位應ぜざればのらず。先師戀の句をあげて語らる。(3)

上置の干菜刻むもうはの空
馬に出ぬ日はうちで戀する

此の前句は人の妻にもあらず、武家・町家の下女にもあらず、宿屋・間屋等の下女也。

細き目に花見る人の頬腫れて
菜種色なる袖の輪違ひ

前句、古代めかしき人の有樣也。

白粉を塗れども下地黑い顏
役者模樣の袖のたきもの

前句、今樣ばせをの女とも見ゆ。

尼になるべき宵のきぬぐ
月影に鎧とやらん見透かして

前句、いかさま然るべき武士の妻と見ゆるなり。

ふすまつかんで洗ふ油手
懸乞に戀の心を持たせばや

前句、町屋の腰元などいふべきか。これを以て他を推さるべし」とある。これは專ら位といふ言葉からの說明であるが、匂・響・うつり等といつても、要するに歸する所は同一である。『三册子』によれば、芭蕉は「炭俵は門しめての一句に腹をすゑたり」と自讚したといふ

(1)この附合炭俵に見え「干菜」は「干葉」とある。野坡と芭蕉の句。

(2)この附合市の庵に見え、支考と去來の句。

(3)この附合桃の白實に見え、路通と芭蕉の句。

(4)この附合深川集に見え、嵐蘭と芭蕉の句。ふすまは小麥を粉にひいた皮屑。

(5)懸乞は借金とり。

○拾うた金で　名殘表第八句。雜。
(1)表がへは疊の表をかへるのである。

が、いかにも會心の作だつたのであらう。

拾うた金で表がへする　野坡

前句の「だまつて寢たる」を、俗人の俗情にとりなしたのである。意を一轉した手柄は認めねばならないが、一句は些か卑俗に過ぎる。

○初午に　名殘表第九句。春季。
(2)親子は親戚の意。

初午に女房の親子振舞うて　芭蕉

疊の表替に客を馳走する附味は明かである。たゞ客を女房の親戚と定めた所に、拾うた金を喜ぶ程の人物を仄めかして居る作者の苦心を見遁してはならない。

○又この春も　名殘表第十句。春季。

又この春も濟まぬ浪人　野坡

濟むは勘氣など許されて歸參がかなふ意。今年はと思つて居たのに、又この春も歸參はかなはない浪人である。女房の緣でもたよつて他に主取するか、それとも一時凌ぎの金の借用を頼みこむなどのさまである。「女房の親子」から浪人の附味が見出されて居る。

○法印の　名殘表第十一句。春季。花の句。

法印の湯治を送る花ざかり　芭蕉

法印は僧位の貴いのでなく、こゝは山伏・修驗者などの類である。浪人に山伏は又相應した位といへるであらう。かねて懇意にして居る山伏が湯治に出かけるので、別に仕事とてもない浪人が、郊外までぶら〳〵と見送つて行くさまである。折から世は花ざかりの頃、逸民の無事に居る狀が二句の間に通つて居る。

○繩手を下りて　名殘表第十二句。春季。

繩手を下りて靑麥の出來　野坡

○どの家も　名殘裏第一句。雜。

前數句人事が續いたので、こゝはたゞ送る道筋の景氣を、安らかに附けたのである。春風一路、笠の影、雲雀の囀り、靑み渡つた麥畑には陽炎がちら〳〵と立つて居る。

どの家も東の方に窓をあけ　同

一村皆陽氣を受けた家並のさまである。前句靑々と萠え出た麥からのうつりである事は言ふまでもない。

○魚に食ひあく　名殘裏第二句。雜。

魚に食ひあく濱の雜炊　芭蕉

前句の家並を浦の漁師町と見たのである。意味のかゝりはそれだけでよいが、「どの家も」といふ單調な匂が、「食ひあく」に響いて居る點を見落してはならぬ。

○千鳥啼く　名殘裏第三句。冬季。

千鳥啼く一夜一夜に寒うなり　野坡

旅を渡り歩く商人か藝人であらう。漁村に暫し滯在して、雜炊の魚にも食ひあき、一夜々々に千鳥の聲は寒くなりまさる。あはれさ、わびしさがしみ〴〵と感ぜられる。「食ひあく」に「一夜々々」は誠に精密な附けである。

○未進の高の　名殘裏第四句。雜。
(1)未進は年貢の未納をいふ。

未(1)進の高の果てぬ算用　芭蕉

寒夜の情に貧村の趣を配したのである。一夜々々に多も深くなつて行くが、未納米の高は一向埒が明かない。行灯の光が薄暗い庄屋の奥に、村役人は夜更けるまで帳面と首引して居る。千鳥が寒さうに鳴く。さういつた風情である。

○隣へも　名殘裏第五句。雜。戀の句。

隣へも知らせず嫁をつれて來て　野坡

年貢もまだ濟ませない折からの婚禮である。手許の不如意もさる事ながら、世間への遠慮もあつて、ひそかに嫁をつれて來たさまである。こゝは通常花の句をする場であるが、すでに名殘表第十一句に引上げて花を出したので、雜の句になつて居る。

○屏風のかげに　揚句。雜。戀の句。

屏風のかげに見ゆる菓子盆　　芭蕉

世には憚りながらも、流石にかただけの式宴は開かれたのであらう。屏風の蔭に菓子盆なども見えるのである。その見えるものも銚子・盃の類でないのに、ひそやかな式のさまが想はれる。この句戀の詞はないが、前句からのかゝりで婚禮の場面たる事は明かであるから、當然戀の句と見ねばならない。この卷ではさきに、初裏第二句「娘を堅う人にあはせぬ」に戀の匂を持つては居たが、次の句で戀の意に附けなかつたので、こゝまでまだ戀が出て居ない事になる。元來戀は物のあはれの深いものであるから、月・花の如く定座の制はないけれども、一卷に少くとも一箇所は有るべきが常則となつて居る。それでこの卷では最後に戀を出したのである。

文章篇

凡例

一、本篇には芭蕉の作になる文章・紀行・日記等の中から、代表的なものを選んで收めた。

一、本文は出典とした原文に忠實なるを旨としたが、漢字の使用、送假名、假名遣等は、讀み易いやうに適宜改めた。又本文の重要な異同は頭註欄に記した。

一、頭註はなほ盡さぬ點が多いが、紙面の都合上止むを得ない。なほ各篇毎に若干解題的の註を附し、特に紀行・日記等については重要な參考書類をも附記した。

一　野ざらし紀行

貞享元年八月江戸を立つて東海道を上り、伊勢・伊賀・大和を巡遊し、京都・湖南地方に杖

を曳き、翌二年夏木曾路を經て江戸に歸つた旅の記である。元祿十一年刊『泊船集』（風國撰）に「芭蕉翁道の紀（マヽ）」と題して收められ、又明和五年に至り、月下が所持した稿本により『野ざらし紀行』と題して刊行され、更に安永九年永嘉亭波靜は芭蕉眞蹟の摸本を得、『甲子吟行』と題してこれを翻刻した。――『句兄弟』（元祿七年）に載する其角の熱田奉幣の句の詞書に「芭蕉翁甲子の紀行には社大いに破れ、云々」とあり、甲子の紀行と呼んだのも古くからであるが、勿論これは定稱として言つたのではない。――波靜の言ふ所によれば、右の眞蹟には素堂自筆の序があり、又句の間々に彩色の畫があつたが、摸寫の際畫は省いて、たゞ「城森墨隈」等の如く繪の狀を示すにとゞめた由で、素堂の序と本文とが翻刻されて居る。然るに大橋圖書館に現に藏する紀行の繪卷は、本文・繪畫共右の『甲子吟行』と全く同一であるが、その筆蹟は芭蕉のものでなく、たゞ卷末に

此一卷は必記行の式にもあらす、たゝ山橋野店の風景一念一動をしるすのみ。爰に中川氏濁子丹青をして其形容を補しむ。他見可恥もの也　　芭蕉散翁書

と附記したのだけが芭蕉の自筆である。又素堂の文は序でなく跋となつて居り、加之文章も全く異つて居る。だからこれは波靜翻刻本の原本とは認められないが、少くともその原本と同一系統のものである事は明かで、この紀行の本文として極めて重要な資料とされねばならぬ。又東京菊本直次郎氏の藏する本紀行の一卷は、芭蕉の眞蹟と傳へられて、これまた貴重な資料たるは言ふまでもない。なほ右の菊本氏藏の卷には、終に旅中處々で酬和した句が附記されてある。

たひねして我句をしれや秋の風

本紀行は右の如く諸種の名で呼ばれ、又一に「草枕」とも言つて居るが、今は一般に最も通じて居る「野ざらし紀行」の名に從つた。又本文も各傳本によつて若干の異同があるが、今は『泊船集』所收のものを本文とし、『甲子吟行』並に菊本氏藏卷を參考した。明和版本は誤脫が多くて善本と認め難い。本紀行の註釋書には、輕花坊の『泊船集註解　紀行之部』（文化九年）・石河積翠（イシヨ）の『野ざらし紀行翠園抄』（文化十年）等がある。なほ本文は『蓬萊島（ヨモギガシマ）』・『芭蕉翁文集』『一葉集』等にも收められて居る。

千里に旅立ちて路粮（みち）をつゝまず、三更月下無何に入るといひけん、昔の人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋を出づる程、風の聲そゞろ寒げなり。

野ざらしを心に風のしむ身かな

秋十とせかへつて江戸をさす故郷

霧しぐれ富士を見ぬ日ぞおもしろき

關越ゆる日は雨降りて、山みな雲に隱れけり。

何某千里（ちり）といひけるは、此のたび路のたすけとなりて、萬（よろづ）いたはり心を盡し侍る。常に莫逆の交ぶかく、朋友に信あるかな此の人。

深川や芭蕉を富士に預け行く　　千里

(1)江湖風月集、三山優溪聞和尙の偈に「路不ㇾ齎ㇾ粮笑復歌、三更月下入ニ無何一」
(2)隅田川の邊りなる深川の芭蕉庵。
(3)句餞別、素堂の餞別詩の序に「老人（芭蕉）常調、他鄕卽吾鄕」
(4)箱根の關。
(5)千里は大和竹内村の人、苗村氏、通稱粕屋甚四郎。
(6)菊本氏藏卷に「我にまこと有哉」

富士川のほとりを行くに、三つばかりなる捨子の哀げに泣くあり。此の川の早瀬にかけて、浮世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命まつ間と捨て置きけん、小萩がもとの秋の風、こよひや散るらん、あすや萎れんと、袂より喰物投げて通るに、

猿を聞く人捨子に秋の風いかに

いかにぞや、汝父に悪まれたるか。母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ。母は汝を疎むにあらじ。たゞこれ天にして、汝が性の拙なきを泣け。

大井川越ゆる日は、終日雨降りければ、

秋の日の雨江戸に指折らん大井川　千里

眼前

道のべの木槿は馬にくはれけり

二十日餘りの月かすかに見えて、山の根ぎはいと闇きに、馬上に鞭を垂れて、數里いまだ鶏鳴ならず。杜牧が早行の殘夢、小夜の中山に到りて忽ち驚く。

馬に寝て殘夢月遠し茶の煙

松葉屋風瀑が伊勢に有りけるを尋ね音信れて、十日ばかり足を留む。

暮れて外宮に詣で侍りけるに、一の鳥居の陰ほのぐらく、御燈處〻に見えて、また上もなき峰の松風、身にしむばかり深き心を起して、

三十日月なし千とせの杉を抱く嵐

腰間に寸鐵を帶びず、襟に一嚢を懸けて、手に十八の珠を携ふ。僧に似て塵あり。俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、鬢なきものは浮屠の屬にたぐへて、神前に入るをゆるさず。

西行谷の麓に流あり。女どもの芋洗ふを見るに、

芋洗ふ女西行ならば歌よまん

其の日のかへさ、ある茶店に立寄りけるに、てふといひける女あが名に發句せよと言ひて、白き絹出しけるに書付け侍る。

蘭の香や蝶の翅にたきものす

閑人の茅舎をとひて

蔦植ゑて竹四五本のあらし哉

長月の初め故郷に歸りて、北堂の萱草も霜枯れ果てて、今は跡だになし。何事も昔にかはりて、はらからの鬢白く、眉皺よりて、たゞ命有りてとのみ言ひて言葉はなきに、兄の守袋をほどきて、母の白髪をがめよ、浦島の子が玉手箱、汝が眉もやゝ老いたりと、しばらく泣きて、

手にとらば消えん涙ぞあつき秋の霜

(1)菊本氏藏卷「大井かはわたる日は雨降」

(2)安永版本には「馬上吟」とある。

(3)杜牧、早行詩「垂鞭信馬行、數里未雞鳴、林下帶殘夢、葉飛時忽驚、霜凝孤鶴迥、月曉遠山横、僮僕休辭險、何時世路平」

(4)風瀑は伊勢度會の人、垂虹堂と號す。一樓賦・丙寅紀行等の撰著がある。

(5)この邊安永版本と文章の順序が前後して居る。

(6)西行の歌「深く入りて神路の奥をたづぬればまた上もなき峯の松風」

(1)珠數。百八の珠を六分して簡單にしたもの。

(2)菊本氏藏卷「もとゝりなきものは」。安永版本この一句なし。

(3)僧侶の意。

(4)この逸話土芳の三册子になほ詳しく見える。

(5)笈日記によれば虚牧の居である。

(6)詩經「焉得ニ諼草一、言樹ニ之背一」。註に背は北堂也とある。こゝは母が既に亡いことをいふ。

大和の國に行脚して、葛(1)下の郡竹の内と云ふ所にいたる。此處は例の千里が舊里なれば、日頃とゞまりて足を休む。

藪より奥に家あり

綿弓や琵琶に慰む竹のおく

二上山當麻寺に詣でて、庭上の松を見るに、凡そ千歳も經たるならん。大いさ牛をかくすともいふべけん。かれ非情といへども、佛縁にひかれて、斧斤の罪を免がれたるぞ幸にしてたつとし。

僧朝顔いく死にかへる法の松

獨り吉野の奥に辿りけるに、まことに山深く白雲峯に重なり、煙雨谷を埋んで、山賤の家所〻にちひさく、西に木を伐る音東に響き、院〻の鐘の聲心の底にこたふ。昔より此の山に入りて世を忘れたる人の、多くは詩にのがれ、歌に隱る。いでや唐土の廬山といはんも亦むべならずや。

ある坊に一夜をかりて

碪打つて我に聞かせよや坊が妻

西上人の草の庵の跡は、奥の院より右の方二町ばかり分け入るほど、柴人の通ふ道のみわづかに有りて、嶮しき谷を隔てたるいとたふとし。かのとく〳〵の清水は昔にはらずと見えて、今もとく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

露とく〳〵こゝろみに浮世すゝがばや

もしこれ扶桑に伯夷あらば、必ず口を漱がん。もしこれ許由に告げば耳を洗はん。山を登り坂を下るに、秋の日すでに斜になれば、名ある所〻見殘して、まづ後醍醐帝の御陵を拜む。

御廟年を經てしのぶは何を忍草

大和より山城を經て、近江路に入りて美濃に至るに、今須・山中を過ぎて、いにしへ常盤の塚あり。伊勢の守武がいひける、義朝殿に似たる秋風とは、いづれの處か似たりけん。我もまた、

義朝の心に似たりあきの風

不破

秋風や藪も畠も不破の關

大垣にとまりける夜は、木因が家をあるじとす。武藏野出でし時、野ざらしを心に思ひて旅立ちければ、

死にもせぬ旅寢の果よ秋の暮

桑名本當寺にて

(1)菊本氏藏卷「葛城の下の郡」とあり、葛下はその略稱。
(2)大木をいふ。莊子、人間世「見二櫟社樹一、其大蔽レ牛」
(3)莊子、逍遙遊に大樗の事を言つて「不レ夭二斤斧一、物無二害者一」とある。斤も斧のこと。
(4)菊本氏藏卷「此やまにかくれて」
(5)菊本氏藏卷「歌にあそぶ」
(6)西行法師。
(7)世に苔清水といひ、「とく〳〵と落つる岩間の苔清水くみほす程もなきすまひ哉」を西行の歌として傳へて居る。

(1)日本をいふ。
(2)周の世の隱士。首陽山に蕨をとつて餓死した。
(3)堯が天下を讓らうと言つた事を聞いて、耳を潁水で洗つた高士。
(4)源義朝の妾常盤御前。
(5)守武千句に「月見てや常盤の里へ歸るらん、義朝殿に似たる秋風」
(6)菊本氏藏卷「大垣にゆきて木因が家にとまる」
(7)木因は美濃大垣の人、谷氏、通稱九兵衛。季吟に學び初め木端と號す。芭蕉とも交渉が深かつた。
(8)安永版本「武藏野を出づる時」

冬牡丹千鳥よ雪のほとゝぎす

草の枕に寢あきて、まだほの暗き中に、濱のかたへ出でて、

曙やしら魚白き事一寸

熱田に詣づ。社頭大いに破れ、築地は倒れて草むらに隱る。かしこに繩を張りて、小社の跡をしるし、ここに石を据ゑて、其の神と名のる。蓬・葱心のまゝに生えたるぞ、なか〳〵にめでたきよりも心とまりける。

しのぶさへ枯れて餅買ふやどり哉

名護屋(1)に入る道のほど風吟す

狂句木がらしの身は竹齋に似たる哉

草枕犬も時雨るゝか夜の聲

雪見にありきて

市人(2)よこの笠賣らう雪の傘

旅人を見る

馬をさへ.ながむる雪の朝かな

海邊に日暮して

海くれて鴨の聲ほのかに白し

(1)名古屋。

(2)菊本氏藏卷「市人よ此傘ちらふゆきのかさ」。又笈日記には「抱月亭　市人にいで是うらん笠の雪」とある。

爰に草鞋をとき、かしこに杖をすてて、旅寢ながらに年のくれければ、

年くれぬ笠きて草鞋はきながら

といひ〳〵も山家(1)に年を越して、

誰が聟ぞ齒朶に餅おふうしの年

奈良に出づる道のほど

春なれや名もなき山の朝霞

二月堂に籠りて

水とりや氷の僧の沓の音

京に登りて三井秋風(2)が鳴瀧の山家をとふ。

梅林

梅白し昨日や鶴をぬすまれし

樫の木の花にかまはぬすがたかな

伏見西岸寺(3)任口上人に逢うて

我が衣にふしみの桃の雫せよ

大津に出づる道、山路を越えて

山路來て何やらゆかしすみれ草

(1)故郷伊賀をさす。次の句は貞享二乙丑年の歳旦吟である。

(2)京都の富豪、洛西鳴瀧に別莊があつた。

(3)發句篇を見よ。

湖水眺望

辛崎の松は花よりおぼろにて

(1)蓋の休らひとて旅店に腰をかけて

躑躅いけてその蔭に干鱈さく女

吟行

菜畠に花見顔なる雀かな

(2)水口にて廿年を經て故人に逢ふ

(3)命二つ中に活きたる櫻かな

伊豆の國蛭が小島の桑門、これも去年の秋より行脚しけるに、我が名を聞きて草の枕の道づれにもと、尾張の國まで跡を慕ひ來たりければ、

いざともに穂麥くらはん草枕

此の僧われに告げて曰く、(4)圓覺寺大顚(5)和尚、ことしむ月のはじめ、遷化し給ふよし。まことや夢の心地せらるゝに、まづ道より其角が方へ申し遣しける。

梅戀ひて卯の花拜む涙かな

贈二杜國(6)子一

白けしに羽もぐ蝶のかたみ哉

(1)「蓋の休らひ」から菜畠の句まで泊船集所收のものだけに見え、他の傳本眞蹟類には見えない。

(2)近江國水口。この故人は同鄉の門人服部土芳である。

(3)菊本氏藏卷「いのちふたつのなかにいきたる櫻かな」安永版本も「命二ツの中に」とある。

(4)鎌倉。

(5)其角が禪の師。俳諧をも善くして幻吁と號した。

(6)發句篇を見よ。

二度桐葉子(1)がもとに有りて、今や東に下らんとするに、

牡丹藥ふかく分け出る蜂の名殘哉

甲斐(2)の國の山家に立ち寄りて、

行く駒の麥に慰むやどりかな

卯月の末いぼり(3)に歸り、旅のつかれをはらす。

夏ごろもいまだ虱をとり盡さず

(1)星張熱田の人、芭蕉門。

(2)安永版本「甲斐の山中に立ちより て」

(3)安永版本「庵に旅のつかれをはらす程に」

二　笈の小文

貞享四年十月江戸を立つて、尾張から伊賀に入り、舊里に年を迎へ、伊勢に遊び、杜國と同道して吉野の花を見、更に高野・和歌浦・須磨・明石と巡り歩いた紀行である。寶永六年乙州が『笈の小文』と題して出版した。砂石子の序に「此の翁（芭蕉）上がた行脚せられし時、道すがらの小記を集めて、これを名づけて笈のこふみといふ。（中略）爾來門葉多しといへとも唯乙州にのみ授見せしむ」とある。たゞし「笈の小文」の名は、もと芭蕉が自ら撰んでおいた稿本俳諧集に題したもので、それを直にこの紀行の名とするのは當らない。支考の『本朝文鑑』には「庚午紀行」と題して收め、――これは內容に省略された所が多い。――『蓬萊島』には

「大和紀行」、蝶夢の『芭蕉翁文集』・『一葉集』等には「卯辰紀行」として掲げてある。又一に「芳野紀行」とも呼ばれる。なほ芭蕉七回忌追善集『雪の葉』(一吟撰、元祿十三年刊)に、粟津無名庵に藏する翁の遺物をあげた中に、「大和後の行記　自筆」といふのがある。これは卽ちこの紀行の事と思はれる。右の如く本來この紀行には定まつた名稱はなかつたらしい。今は本文を寶永版の『笈の小文』によつたので、題も姑くそのまゝに從つた。この題名は前述の如く、必ずしも穩當ではないかもしれぬが、すでに一般的にもなつて居るので、今後これに一定する事にしてもあへて差支はあるまい。

(1)百骸九竅の中に物有り、かりに名付けて風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすからん事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。ある時は倦みて放擲せん事を思ひ、ある時は進んで人に勝たむ事を誇り、是非胸中に戰うて是が爲に身安からず。暫く身を立てむ事を願へども、これが爲にさへられ、暫く學んで愚を曉らん事を思へども、是が爲に破られ、終に無能無藝にして只此の一節に繫る。西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利久が茶に於ける其の貫道する物は一なり。しかも風雅におけるもの、造化に隨ひて四時を友とす。見る處花にあらずといふ事なし、思ふ所月にあらずといふ事なし。像花にあらざる時は夷狄にひとし、心花にあらざる時は鳥獸に類す。夷狄を出で、鳥獸を離れて、造化に隨ひ造化に歸れとなり。

(1)百骸は全身の意。九竅は二目二耳二鼻一口二孔、卽ち身體の中にある九の穴。

(2)芭蕉の別號。風羅も風に破れ易いうすものの意から、芭蕉のことに通はせたのであらう。

(3)幻住庵記にもこゝと同樣のことを言つて居る。同記參照。

(4)貫道は道の根本を貫く意。從來の翻刻本に「貫通」としたものがあるのは誤である。

(1)貞享四年十月廿五日。

(2)岩城國小奈濱の人、井手氏。內藤家の家人といふ。續虛栗にこの時の歌仙一卷を載せ、長太郎の脇は由之の名で出て居る。

(3)岩城平の城主內藤義泰(號風虎)の子。名義英。若くして隱居し風雅に遊んだ。享保十八年九月十四日歿、年七十九。なほ當時人々の送つた詩文句等は『句餞別』と題する一小集として刊行された。

(4)莊子、逍遙遊「適二百里一者宿舂レ糧、適二千里一者三月聚レ糧」

(5)眞綿で作つた防寒衣。

(6)襪。

(7)紀貫之の土佐日記、鴨長明の海道記(これは長明の作でないが、古くは長明海道記と誤り稱せられた)、阿佛尼の十六夜日記をさす。

(8)黃山谷の詩は奇を以て、蘇東坡の作は新を以て稱せられた事。

(1)神無月の初空、定めなきけしき、身は風葉の行末なき心地して、

旅人と我が名よばれん初しぐれ

又山茶花を宿ゝにして

岩城の住、長太郎と云ふもの此の脇を付けて、其角亭において關送りせんともてなす。

時は冬よしのをこめん旅のつと

此の句は露沾公より下し給はらせ侍りけるを、はなむけの初として、舊友、親疎、門人等、あるは詩歌文章をもて訪ひ、あるは草鞋の料を包みて志を見す。かの三月の糧を集むるに力を入れず、紙布・綿小などいふもの、帽子・したうづやうのもの、心ゝに送りつどひて、霜雪の寒苦を厭ふに心なし。あるは小船をうかべ、別墅にまうけし草庵に酒肴携へ來りて、行衞を祝し、名殘を惜しみなどするこそ、故ある人の首途するにも似たりと、いと物めかしく覺えられけれ。

抑ゝ道の日記といふものは、紀氏・長明・阿佛の尼の文をふるひ情を盡してより、餘は皆俤似通ひて、其の糟粕を改むる事能はず。まして淺智短才の筆に及ぶべくもあらず。其の日は雨降り、晝より晴れて、そこに松有り、かしこに何と云ふ川流れたりなどいふ事、誰ゝもいふべく覺え侍れども、黃奇蘇新のたぐひにあらずば云ふ事なかれ。

されども其の所々の風景心に殘り、山館・野亭の苦しき愁も、かつは話の種となり、風雲のたよりとも思ひなして、忘れぬ所々跡や先やと書き集め侍るぞ、猶醉へる者の猛語[1]にひとしく、寢ねる人の譫言する類に見なして、人又亡聽せよ。

鳴海にとまりて

星崎の闇を見よとや啼く千鳥

飛鳥井雅章公の此[4]の宿に泊らせ給ひて、「都も遠くなるみがたはるけき海を中にへだてて」と、詠じ給ひけるを自ら書かせ給ひて、賜はりける由を語るに、

京まではまだ半空や雪の雲

三川の國保美[5]といふ處に、杜國[6]が忍びて有りけるをとぶらはむと、まづ越人に消息して、鳴海より跡ざまに二十五里尋ね歸りて、其の夜吉田[7]に泊る。

寒けれど二人寢る夜ぞ頼もしき

あまつ繩手、田の中に細道ありて、海より吹上ぐる風いと寒き所なり。

冬の日や馬上に氷る影法師

保美村より伊良古崎へ壹里ばかりも有るべし。三河の國の地つゞきにて、伊勢とは海隔てたる所なれども、いかなる故にか、萬葉集[8]には伊勢の名所の内に選び入れられたり。此の洲崎にて碁石を拾ふ。世にいらご白といふとかや。骨山[9]と云ふは鷹を打つ處

(1)妄語の意か。
(2)莊子、齊物論「爲レ女妄言之」、女以妄聽之」。亡は妄に通じて用ひたのであらう。
(3)從一位權大納言。歌人として知らる。延寶七年歿、年六十九。
(4)鳴海寺島氏筆言の亭。歌の初五は「うちひさす」であるといふ。
(5)愛知縣渥美半島福江町の南にある。
(6)當時罪を得てこの地に蟄居して居たのである。
(7)今の豊橋。
(8)萬葉集には「伊勢國伊良虞島」などとある。
(9)岬端にある高岩。

なり。南の海の果にて、鷹の初めて渡る所と云へり。いらこ鷹など歌にもよめりけりと思へば、猶あはれなる折ふし、

鷹一つ見付けて嬉しいらこ崎

熱田御修覆

磨直す鏡も清し雪の花

蓬[1]左の人々に迎ひとられて、暫く休息する程、

箱根越す人も有るらし今朝の雪

ある人の會[2]

ためつけて雪見にまかるかみこ哉

いざ行かむ雪見にころぶ所まで

ある人興行[3]

香を探る梅に藏見る軒端哉

此の間美濃・大垣・岐阜のすきものとぶらひ來りて、歌仙[4]、あるは一折など度々に及ぶ。

師走十日餘り、名古屋を出でて舊里に入らんとす。

旅寢してみしやうき世の煤はらひ

(1)熱田神宮を蓬莱宮と異稱するので、熱田の西の意に用ひる。卽ち名古屋をさす。
(2)十一月二十八日、名古屋昌碧亭での吟。
(3)笈日記には「防川亭」とある。
(4)歌仙は三十六句連ねる形式の連句。一折は半歌仙、卽ち十八句。

(1)世に宗祇の狂咏として傳へる「桑名より食はで來ぬれば星川の朝飯はとく日永なりけり」
(2)伊勢國朱女村と石薬師町との間。
(3)東大寺を再建したので名高い俊乘坊重源。
(4)もと源頼朝の創建と傳へる。
(5)佛の臺座。
(6)羅迦が沙羅双樹の下で入滅した時、双樹が枯れて白く變じたといふ。

桑名(1)よりくはで來ぬればと云ひ、日永の里より馬借りて杖(2)つき坂上るほど、荷鞍うちかへりて馬より落ちぬ。

歩行ならば杖つき坂を落馬哉

と物うさのあまり云ひ出で侍れども、終に季ことば入らず。

舊里や臍の緒に泣くとしの暮

宵のとし空の名殘惜しまむと、酒呑み夜更かして、元日寢忘れたれば、

二日にもぬかりはせじな花の春

初春

春立ちてまだ九日の野山哉

枯芝やゝかげらふの一二寸

伊賀の國阿波の庄といふ所に、俊乘(3)上人の舊跡有り。護峰(4)山新大佛寺とかや云ふ名ばかりは、千歳の形見となりて、伽藍は破れて礎を殘し、坊舍は絶えて田畑と名の替り、丈六の尊像は苔の綠に埋もれて、御ぐしのみ現前と拜まれさせ給ふに、聖人の御影はいまだ全くおはしまし侍るぞ、其の代の名殘疑ふ所なく、泪こぼるゝばかりなり。石の蓮臺、獅子(5)の座などは蓬・葎の上に堆く、雙林(6)の枯れたる跡もまのあたりにこそ覺えられけれ。

(1)笈日記・芭蕉翁全傳等によれば、この句は芭蕉の故主君蟬吟公の庭前での吟である。
(2)伊勢山田の神官。
(3)芭蕉の眞蹟に「網代民部息雪堂會父が風雅をそふ」とあり「民部」の下に「息」の字があるべきである。網代民部は足代弘氏、伊勢の神職。
(4)發句篇を見よ。

丈六にかげらふ高し石の上

さ(1)まゞの事おもひ出す櫻哉

伊勢山田

何の木の花とはしらず匂哉

裸にはまだ衣更着の嵐哉

菩提山

此の山のかなしさ告げよ野老掘

龍(2)尚舍

物の名を先づとふ蘆の若葉哉

網代民部雪堂に會(3)

梅の木になほやどり木や梅の花

草庵會

いも植ゑて門は葎のわか葉哉

神垣のうちに梅一木もなし。いかに故有る事にやと神司などに尋ね侍れば、只何とはなしおのづから梅一もともなくて、子良(4)の舘の後に、一もと侍る由を語り傳ふ。

御子良子の一もとゆかし梅の花

(1)芭蕉の眞蹟に「十五日外宮の館にありて」と前書がある。

(2)杜國をさす。

(3)この句は大和丹波市附近での吟。發句篇參照。

神[1]垣やおもひもかけず涅槃像

彌生半ば過ぐる程、そゞろに浮き立つ心の花の、我を導く枝折となりて、吉野の花に思ひ立たんとするに、か[2]の伊良古崎にて契り置きし人の伊勢にて出迎ひ、共に旅寢のあはれをも見、かつは我が爲に童子となりて、道の便りにもならんと、自ら萬菊丸と名をいふ。まことに童(わらべ)らしき名のさまいと興有り。いでや門出のたはぶれ事せんと、笠のうちに落書す。

乾坤無住同行二人

よし野にて櫻見せうぞ檜の木笠
よし野にて我も見せうぞ檜の木笠　萬菊丸

旅の具多きは道ざはりなりと、物皆拂ひ捨てたれども、夜の料にと紙衣(かみこ)壹つ、合羽やうの物、硯、筆、紙、藥等、畫笥(ひるけ)なんど物に包みて、後に背負ひたれば、いとゞ脛弱(すね)く力なき身の跡ざまにひかふるやうにて、道なほ進まず。たゞ物うき事のみ多し。

草[3]臥れて宿かる頃や藤の花

初瀬

春の夜や籠り人ゆかし堂の隅
足駄はく僧も見えたり花の雨　萬菊

(1)葛城の神一言主は容の醜いのを恥ぢて、夜のみ出て働いたといふ傳說による。

(2)龍門の嶽。その下に龍門の瀧がある。

(3)大瀧。吉野川の激湍である。

(4)蜻蛉の瀧。一名白絲の瀧。

(5)布引の瀧・箕面の瀧は瀧の名をあげたついでに、備忘的に列擧したのであらう。たゞし箕面は攝津で、大和としたのは誤である。

(6)攝津豐野郡豐川村大字粟生にある。箕面瀧の東に當る。

葛城山

猶[1]みたし花に明け行く神の顏

三輪　多武峯

臍峠　多武峯ヨリ龍門ヘ越ス道也

雲雀より空にやすらふ峠哉

龍[2]門

龍門の花や上戸の土産(と)にせん
酒のみに語らんかゝる瀧の花

西[3]河

ほろ〳〵と山吹ちるか瀧の音

蜻[4]蛉が瀧

布留の瀧は布留の宮より二十五丁山の奥也。

布引の瀧(5)津國幾田の川上に有り　箕面の瀧　勝尾寺(6)へ越ゆる道に有り。大和

櫻

櫻がりきどくや日〻に五里六里
日は花に暮れて淋しやあすならう

扇にて酒くむかげやちる櫻

苔[1]清水

春雨の木下につたふ清水哉

吉野の花に三日とゞまりて、曙黄昏のけしきに向ひ、有明の月の哀なるさまなど、心にせまり胸にみちて、あるは攝[2]政公のながめに奪はれ、西[3]行の枝折に迷ひ、かの貞[4]室が是は〳〵と打ちなぐりたるに、我いはん言葉もなくて、いたづらに口を閉ぢたるいと口をし。思ひ立ちたる風流いかめしく侍れども、爰に至りて無興の事なり。

高野

ちゝはゝのしきりにこひし雉の聲

散る花にたぶさはづかし奥の院　萬菊

和歌

行く春にわかの浦にて追付きたり

紀三井寺

跪はやぶれて西行にひとしく、天[5]龍の渡しをおもひ、馬をかる時はいき[6]まきし聖の事心に浮ぶ。山野海濱の美景に造化の巧を見、あるは無依の道者の跡を慕ひ、風情の人の實をうかがふ。猶栖を去りて器物の願ひなし。空手なれば途中の愁もなし。寛[7]歩駕

(1)とく〳〵の清水。野ざらし紀行にも見ゆ。
(2)原本「攝章公」とある。後京極攝政良經の歌「昔たれかゝる櫻の種をうゑて吉野を春の山となしけむ」
(3)西行の歌「吉野山こぞのしをりの道かへてまだ見ぬ方の花をたづねむ」
(4)貞室の句「これは〳〵とばかり花の吉野山」
(5)西行が天龍川の渡しで船頭に頭を打たれて怒らなかつた故事。
(6)徒然草に見える高野の證空上人の故事。
(7)皇甫謐の高士傳、顏燭の條に「晩食以當肉、安步以當車」

籠にかへ、晩食肉よりも甘し。とまるべき道に限りなく、立つべき朝に時なし。只一日の願ひ二つのみ。今宵よき宿からん、草鞋のわが足に宜しきを求めんとばかりは、いさゝかの思ひなり。時ゝ氣を轉じ日ゝに情をあらたむ。もしわづかに風雅ある人に出合ひたる悦限りなし。日頃は古めかしかたくなりと、惡み捨てたる程の人も、邊土の道づれに語りあひ、埴生[はにふのくら]のうちにて見出したるなど、瓦石のうちに玉を拾ひ、泥中に金を得たる心地して、物にも書付け人にも語らんと思ふぞ、又是旅の一つなりかし。

衣更

一つぬいで後に負ひぬ衣がへ

吉野出て布子賣りたし衣がへ　萬菊

灌佛の日は奈良にて爰かしこ詣で侍るに、鹿の子を產むを見て、此の日においてをかしければ、

灌佛の日に生れあふ鹿の子哉

招[1]提寺鑑眞和尙來朝の時、船中七十餘度の難をしのぎ給ひ、御目のうち鹽風吹入りて、終に御目盲[し]ひさせ給ふ尊像を拜して、

若葉して御目の雫ぬぐはばや

(1)唐招提寺の開基たる唐の僧。

(1)羅田猿雖をさす。猿雖は伊賀上野の人。旅中偶々邂逅したのである。

(2)須磨の山手、須磨寺の邊一帶の稱。

(3)在原行平の歌「わくらはに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶと答へよ」

(4)かますに似て黄白、身圓く頭短くして尖り、四五寸乃至八寸程の魚。

(5)須磨の西にあり海に臨んで鑾えて居る。

舊友に奈良にて別る。

鹿の角先づ一節の別れかな

大坂にてある人の許にて

杜若語るも旅のひとつ哉

須磨

月はあれど留主のやう也須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の夏

卯月中頃の空も朧に殘りて、はかなきみじか夜の月もいとゞ艶なるに、山は若葉に黑みかゝりて、時鳥鳴き出づべきしのゝめも、海の方よりしらみそめたるに、上野とおぼしき所は表の穗浪あからみあひて、漁人の軒近き芥子の花のたえ〴〵に見渡さる。

海士の顏先づ見らるゝやけしの花

東須磨・西須磨・濱須磨と三所に分れて、あながちに何わざするとも見えず。藻鹽たれつゝなど歌にも聞え侍るも、今はかゝるわざするなども見えず、きすごといふ魚を網して、眞砂の上に干し散らしけるを、鳥の飛び來りてつかみ去る。是をにくみて弓をもておどすぞ海士のわざとも見えず。もし古戰場の名殘をとゞめて、かゝる事をなすにやといとゞ罪深く、猶昔の戀しきまゝに、鐵枴が峯に上らんとする、導きする子の苦しがりて、とかく言ひ紛らはすを樣〻にすかして、麓の茶店にて物食はすべきなど云ひて、わりなき躰に見えたり。彼は十六と云ひけん里の童子よりは、四つばかりも弟なるべきを、數百丈の先達として、羊腸險岨の岩根を這ひ登れば、辷り落ちぬべき事あまたたびなりけるを、躑躅根笹に取りつき、息を切らし汗をひたして、漸く雲門に入るこそ心もとなき導師の力なりけらし。

須磨の蜑の矢先に鳴くか郭公

ほとゝぎす消え行く方や嶋一つ

須磨寺や吹かぬ笛聞く木下やみ

明石夜泊

蛸壺やはかなき夢を夏の月

かゝる所の秋なりけりとかや。此の浦の實は秋をむねとするなるべし。悲しさ淋しさ、云はむかたなく、秋なりせばいささか心のはしをもいひ出づべき物をと思ふぞ、我が心匠の拙きを知らぬに似たり。淡路嶋手に取るやうに見えて、須磨・明石の海右左に分る。吳楚東南の詠もかゝる所にや。物知れる人の見侍らば、さま〴〵の境にも思ひなぞらふるべし。又後の方に山を隔てて田井の畑といふ所、松風・村雨故郷といへり。尾上つゞき丹波路へ通ふ道あり。鉢伏のぞき、逆落など恐ろしき名のみ殘り

(1)源氏物語、須磨の卷「又なくあはれなるものは、かゝる所の秋なりけり」

(2)杜甫の登三岳陽樓に「吳楚東南拆、乾坤日夜浮」。これは洞庭湖の大觀を敍したので、その景に比したのである。

(3)行平の寵を得たと傳へる姉妹の海女。

(4)鐵枴ケ峯の一縣崖であらう。

(5)一の谷の逆落しである。

(2)義經を鵯越に案内した鷲尾の三郎は、當時十六七歳であつたと傳へる。

て、鐘[1]懸松より見下すに、一の谷内裏やしき目の下に見ゆ。其の代の亂れ其の時の騒ぎ、さながら心に浮び俤につどひて、二位の尼君、皇子を抱き奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有様、内侍局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もて扱ひ、琵琶・琴なんどしとね布團にくるみて船中に投げ入れ、供御はこぼれてうろくづの餌となり、櫛笥は亂れて海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしび此の浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。

紀行は須磨までで終つて居るが、その後芭蕉と杜國は相携へてこゝから引返し、四月廿三日京都に入つた。而して芭蕉は近江・美濃を經て尾張に赴き、杜國は暫く京都に滞在の後、伊賀を經て三河に歸つたのである。

三　奥の細道

この紀行は元祿二年三月二十七日江戸を出發後、日數百五十日、旅程六百里に亘る大旅行の記で、彼の紀行中最も長篇でかつ最も傑作とされる。その草稿は勿論旅中備忘的に書き記した句文に基づいたものであらうが、それが幾多の推敲を經て愈々紀行の定稿となつたのは、元祿七年の事と推定される。その年四月これを門人素龍に清書させて一冊とした。書物の長さ五寸五分、幅四寸七分、紙數五十三葉、初と終に白紙があり、行成表紙をかけ紫の絲で綴ぢ、題簽は金の眞砂を散らした白地に、「おくのほそ道」と芭蕉が自筆で題してあつた。そして最後の旅に出る時、芭蕉はこれを頭陀の中に入れて携へ、途中伊賀の兄の許にとゞめておいた。然るにかねて去來からその書寫を乞はれて居たので、芭蕉は臨終の折兄の許にある原本を去來に讓る旨遺言したのである。それで去來は伊賀から原本を送つて貰ひ、又別に自ら一本を寫してこれを伊賀に送り、その卷末に右の顚末を詳しく附記した。即ち素龍淸書の原本は去來の許にとゞまつたわけで、元祿十五年に至りこの原本のまゝの體裁で、所謂枡形本が京都の井筒屋から出版された。支考の『俳諧古今抄』に、

奥の細道は故翁の奥羽の紀行にて、武の素龍といふ者に寫させ、湖南の木曾寺に持ちおはして、東武のみやげにとみづから讀みて、外題は其の時に自筆せられしが、滅後六年の秋にいたりて、四半なる本紙のまゝにその一册をすき寫し、洛の去來を奉行にて板にちりばめ侍りし物なり。

とある。これによると出版は元祿十三年秋の事になるが、井筒屋出板の俳書目錄には元祿十五年とあるので、その點は支考の誤であらう。

井筒屋版の枡形本には、卷末に素龍の筆になることや原本の體裁等を附記し、その中に「素龍が跋有、今略之」とあるが、明和六年の冬蝶夢は伊賀上野に遊んで、偶々素龍の跋と去來の奥書ある本を得、これを枡形本の卷末に附して明和七年更に翻刻した。蝶夢がこの時添へた跋には「古き反古の中に此細道の原本を得たり」とあるが、これは勿論素龍筆の原本でなく、去

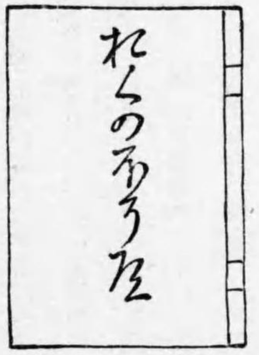
(1)鐘懸松より見下すに、一の谷内裏やしき目の下に見ゆ。其の代の亂れ其の時の騒ぎ、さながら心に浮び俤につどひて、二位の尼君、皇子を抱き奉り、女院の御裳に御足もたれ、船やかたにまろび入らせ給ふ御有様、内侍局・女孺・曹子のたぐひ、さまざまの御調度もて扱ひ、琵琶・琴なんどしとね布團にくるみて船中に投げ入れ、供御はこぼれてうろくづの餌となり、櫛笥は亂れて海士の捨草となりつゝ、千歳のかなしび此の浦にとゞまり、素波の音にさへ愁多く侍るぞや。

來が書寫して芭蕉の兄の許に送つた本であつたと思はれる。而して去來に讓られた原本はその後どうなつたか、寶曆十一年越前敦賀の錦溪舍琴路が撰んだ『白烏集』に、

奥の細道は古翁の紀行にして、武の素龍に毫をとらしめ、標題は翁の眞筆なり。そのよしは其書の奥書にありて普く世にしる所ながら、古翁滅後は去來に傳り侍りしを、今故ありて爰の錦溪舍に是を得たり。猶其傳來の委曲は三四坊の別記ありといへとも、玆に略書して遠く百世に證たらんとなり。

細道のあかるうのこる枯野かな　桂葉

とあつて、卽ち琴路の許に傳はつた事を述べて居る。然るにその傳來の委曲を述べるといはれた三四坊の文には、少しもこれについて言つて居ないので、あるいは眞僞が疑はしいものではなかつたらうかとも考へられるが、『奥細道菅菰抄』にも琴路の許に原本が傳はる由を記して居る。たゞしそれが信ずべきものであつたとしても、その後右の原本の行方がどうなつたかは全く知られない。なほ井筒屋版枡形本の奥書によれば、別に芭蕉の眞蹟になる一本が、門人野坡の許に傳へられたといふ。而してこの一本は草稿のまゝであつたので、文章には所々相違があつた由であるが、右の草稿本のことは野坡が芭蕉三十三回忌追善集として撰んだ『放生日』(內題「八鳥放生日」。享保十一年刊)の卷頭扉にも、上圖の如く掲げられてある。しかしこの草稿本も亦今日その所在が全く知られな



芭蕉翁眞蹟
墨附三十二葉

い。信濃河西五郎氏の藏する一寫本は、本文が枡形本と若干異るので、或は野坡傳來の眞蹟本の內容に近いものかも知れぬ。その他『蝶之遊』(自墮落先生著、延享二年刊)によれば、奥州須賀川藤井晋流の許に翁眞蹟の細道に素龍の跋あるものを藏して居た由で、その跋文を抄錄してある。しかしそれが果して眞蹟であつたか否かは今證するに由なく、素龍の跋があつたとすれば、やはり素龍本の寫し——勿論版本からの寫しではないが、——ではあるまいかと思はれる。又刊年不詳の板本で、本文全部を白字刷にしたものがあり、その卷末に「此一卷芭蕉翁眞蹟は武陵古き俳家の珍藏なるを、風友鶴峯堂のあるじ公務のいとま摹して予に送らる(下略)」と言つて居るが、その字形・內容は枡形本と全く同一なので、これまた芭蕉の眞蹟とは認め難い。なほ伊賀村治圓次郎氏の藏する一寫本は、去來自筆本かと言はれて居り、去來自筆とする點についてはなほ考究の餘地があるが、とにかく重要な傳本とすべきものである。

この紀行の刊本は、井筒屋版の枡形本をはじめ、明和七年蝶夢が素龍の跋と去來の奥書と自分の跋文とを新に加へた同じ枡形本——寛政元年再版され、なほその以後の後刷本もある。——があり、その他前に述べた刊年不明の白字刷にした本、文化十二年刊『百家交筆おくの細道』(二冊)、文政五年刊の『おくの細道』(三冊、香雪・交山の繪を挿む)、明治十八年刊『おくのほそ道』(一冊、素龍書の細道を其角が書寫した眞蹟の摸刻)等がある。又註釋の書には、古く寶曆九年村徑(ムラミチ)の稿になる『奥の細道鈔』(二冊)があり、安永七年刊の『奥細道菅菰抄』(二冊、梨一著)は最もよく知られて居る。その他天明七年稿の『奥のほそ道解』(二冊、後素堂著)・安政五年刊の『鼇頭奥之細道』(二冊、鶯宿撰)・安政五年稿の『奥の細道通解』(錦江著)等があ

り、又明治以後出版された註釋書の類は數多いが、最近雜誌『俳句研究』に連載された「奥の細道研究」は、各方面に亘つて最も詳細な註釋的研究が試みられて居る。

(1)月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を栖とす。(2)故人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず、海濱にさすらへ、(3)去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を拂ひて、やゝ年も暮れ、春立てる霞の空に、白川の關越えんと、(4)そゞろ神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて、取る物手につかず、股引の破れをつづり、笠の緒つけかへて、三里に灸すうるより、松島の月まづ心にかゝりて、住める方は人に讓り、(5)杉風が別墅に移るに、

草の戸も住みかはる代ぞ雛の家

(6)表八句を庵の柱にかけおく。彌生も末の七日、あけぼのの空朧々として、(7)月は有明にて光をさまれるものから、不二の峯幽かに見えて、上野・谷中の花の梢、又いつかはと心細し。睦まじきかぎりは宵よりつどひて、舟に乘りて送る。千住といふ所にて舟をあがれば、前途三千里のおもひ胸にふさがりて、幻の巷に離別の涙をそゝぐ。

行く春や鳥啼き魚の目は泪

(1)詩人玉屑、閻恒可士送僧詩に「笠重吳天雪、鞋香楚地花」。なほ白氏文集「去年九日到二東落一、今年九日來二吳郷一、兩邊蓬鬢一時白、三處菊花同色黄」にも擬つた所あるか。
(2)武藏國北足立郡。千住から約二里。
(3)下野國室の八島。大神(オホミワ)神社がある。
(4)古事記・日本書紀に出て居る傳說
(5)遺蘭夜話によれば、元祿中の戸籍に今市宿上町西側に五左衞門といふのがあると。
(6)百韻の初表の八句をいふ。
(7)源氏物語、柏木の卷「月は有明にて光をさまれるものから、影さやかに見えてなか〳〵をかしき曙なり」

これを矢立の初めとして、行く道なほ進まず。人々は途中に立ち並びて、後影の見ゆるまではと見送るなるべし。

ことし元祿二とせにや、奥羽長途の行脚たゞかりそめに思ひ立ちて、(1)吳天に白髮の恨を重ぬといへども、耳に觸れて未だ目に見ぬ境、もし生きてかへらばと定めなき頼みの末をかけ、其の日漸う早加といふ宿にたどり着きにけり。痩骨の肩にかゝれる物まづ苦しむ。たゞ身すがらにと出で立ち侍るを、紙子一衣は夜の防ぎ、ゆかた・雨具・墨筆のたぐひ、あるはさり難き餞などしたるは、さすがに打捨て難くて、路次のわづらひとなれるこそわりなけれ。

(3)室の八島に詣づ。同行曾良が曰く、此の神は木花咲耶姫の神と申して、富士一體なり。(4)うつむろ無戸室に入りて燒け給ふ誓のみ中に、火々出見の尊生れ給ひしより、室の八島と申す。又煙をよみ習はし侍るもこの謂れなり。將このしろといふ魚を禁ず。緣起の旨世につたふ事も侍りし。

三十日、日光山の麓に泊る。主の云ひけるよう、我が名を佛五左衞門といふ。よろづ正直を旨とする故に人かくは申し侍るまゝ、一夜草の枕もうちとけて休み給へといふ。いかなる佛の濁世塵土に示現して、かゝる桑門の乞食順禮ごときの人を助け給ふにやと、主のなすことに心をとゞめて見るに、たゞ無智無分別にして正直偏固のもの

なり。剛毅木訥の仁に近きたぐひ、氣稟の清質尤も尊ぶべし。(1)

卯月朔日、御山に詣拜す。往昔此の御山を二荒山と書きしを、空海大師開基の時日光と改め給ふ。千歳未來をさとり給ふにや、今この(2)御光一天にかがやきて、恩澤八荒にあふれ、四民安堵の栖穏かなり。猶憚多くて筆をさし置きぬ。

あらたふと青葉若葉の日の光　曾良

黒髪山は、霞かゝりて雪いまだ白し。(3)

剃りすててくろかみ山に衣更　曾良

曾良は河合氏にして惣五郎と云へり。(4)芭蕉の下葉に軒をならべて、予が薪水の勞を助く。このたび松島・象潟の眺め共にせんことを悦び、かつは羇旅の難をいたはらんと、旅立つ曉髪を剃りて墨染にさまをかへ、惣五を改めて宗悟とす。仍つて黒髪山の句有り。衣更の二字力ありて聞ゆ。

二十餘町山を登つて瀧あり。岩洞の頂より飛流して百尺千岩の碧潭に落ちたり。岩窟に身をひそめ入りて瀧の裏より見れば、裏見の瀧と申し傳へ侍るなり。

暫時は瀧に籠るや夏の初め

那須の黒羽(6)といふ所に知る人あれば、これより野越にかゝりて直道を行かんとす。遙に一村を見かけて行くに、雨降り日暮る。農夫の家に一夜をかりて、明くれば又野

(1)論語、子路篇「剛毅木訥近仁」
(2)東照公の威光をいふ。
(3)日光山の主峰男體山。
(4)もと岩波氏、庄左衞門正字といふ。信濃下諏訪の人、伊勢長島藩に仕へたが、後浪人して江戸に出た。寶永七年壹岐國勝本に客死す。年六十二。
(5)夏行（ゲギヨウ）のこと。又夏安居（ゲアンゴ）ともいふ。一夏九旬（陰曆四月十六日から七月十六日まで）の行法で、靜室に安居して酒肉を絶ち、誦經寫經等をなす。
(6)日光から十六里。

中を行く。そこに野飼の馬あり。草刈るをのこに歎きよれば、野夫といへどもさすがに情しらぬにはあらず。如何すべきや、されども此の野は縱横にわかれて、うひ〳〵しき旅人の道ふみたがへん、怪しう侍れば、此の馬のとどまる處にて馬を返し給へと貸し侍りぬ。ちひさき者ふたり、馬の跡したひて走る。一人は小姫(1)にて名をかさねと云ふ。聞きなれぬ名のやさしかりければ、

かさねとは八重撫子の名なるべし　曾良

やがて人里に至れば、あたひを鞍壺に結ひつけて馬を返しぬ。

黒羽の館代、淨坊寺(2)何がしの方に音づる。思ひかけぬ主の悦び、日夜語りつゞけて、其の弟桃翠(3)などいふが朝夕勤めとぶらひ、自らの家にも伴ひて、親屬の方にも招かれ、日を經るまゝに、ひと日郊外に逍遙して犬追物の跡を一見し、那須の篠原を分けて玉藻の前の古墳をとふ。それより八幡宮に詣づ。與市扇の的を射し時、別しては我が國氏神正八幡と誓ひしも此の神社にて侍ると聞けば、感應殊にしきりに覺えらる。暮ればれば桃翠が宅に歸る。

修驗光明寺(4)といふあり。そこに招かれて行者堂を拜す。

夏山に足駄を拜む首途(かどで)哉

當國雲岸寺(5)のおくに、佛頂和尚(6)山居の跡あり。

(1)小娘に同じ。
(2)黒羽の領主大關氏の家老。圖書高勝。俳號桃雪。
(3)鹿子畑善太夫豐明。他書には翠桃の號で見えるので、桃翠は誤記であらう。
(4)那須の餘瀬村にある。修驗道、所謂山伏宗で役行者を祖とする。
(5)黒羽の東二里餘。正しくは雲巖寺。臨濟宗の名刹。
(6)常陸鹿島根本寺の住僧で、芭蕉の參禪の師。

たてよこの五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば

と松の炭して岩にかきつけ侍りと、いつぞや聞え給ふ。其の跡見んと雲岸寺に杖をひけば、人〻すゝんで共にいざなひ、若き人多く道の程うちさわぎて、覺えずかの麓に至る。山は奥あるけしきにて、谷道遙に松杉黑く苔したたりて、卯月の天いま猶寒し。十景つくる所、橋を渡つて山門に入る。[1]

さてかの跡はいづくの程にやと、後の山によぢのぼれば、石上の小庵岩窟にむすびかけたり。妙禪師の死關、法雲法師の石室を見るが如し。[2][3]

木啄も庵はやぶらず夏木立

と、取りあへぬ一句を柱に殘し侍りし。

是より殺生石に行く。館代より馬にて送らる。此の口付のをのこ短冊得させよと乞ふ。やさしき事を望み侍るものかなと、

野を横に馬引きむけよほとゝぎす

殺生石は溫泉の出づる山陰にあり。石の毒氣いまだ滅びず、峰蝶のたぐひ眞砂の色の見えぬほど重なり死す。又清水ながるゝの柳は、蘆野の里に有りて田の畔にのこる。此の所の郡守戸部某の、此の柳みせばやなど折〻にの給ひ聞え給ふを、いづくの程に

(1)雲巖寺舊記によれば、竹林塔・海岸閣・十梅林・龍雲洞・玉几峯・鉢盂峰・玲瓏石・千丈岩・飛雪亭・水分石をいふ。
(2)南宋時代の高僧原妙禪師が坐禪して、十五年間外に出なかつたといふ洞窟。
(3)梁時代の高僧。庵を孤巖に結び終日論談して倦まなかつたといふ。石室はその庵を言つたのであらう。
(4)那須溫泉。今の湯本。
(5)新古今集「道のべに清水流るゝ柳蔭しばしとてこそ立ち止りつれ　西行」

やと思ひしを、今日此の柳の陰にこそ立ちより侍りつれ。

田一枚植ゑて立ちさる柳かな

心もとなき日數かさなるまゝに、白川の關にかゝりて旅心定りぬ。いかで都へとたより求めしもことわりなり。中にも此の關は三關の一にして、風騷の人心をとどむ。秋風を耳にのこし紅葉を俤にして、青葉の梢猶あはれなり。卯の花の白妙に茨の花の咲きそひて、雪にもこゆる心地ぞする。古人冠を正し衣裝を改めし事など、清輔の筆にとゞめ置かれしとぞ。

卯の花をかざしに關の晴着哉　曾良

とかくして越え行くまゝに、阿武隈川を渡る。左に會津根高く、右に岩城・相馬・三春の庄、常陸・下野の地をさかひて山つらなる。影沼といふ所を行くに、今日は空くもりて物影うつらず。須賀川の驛に等躬といふ者を尋ねて、四五日とどめらる。先づ白川の關いかに越えつるやと問ふ。長途の苦しみ身心つかれ、かつは風景に魂うばはれ、懷舊に腸を斷ちて、はか〴〵しう思ひめぐらさず。

風流のはじめやおくの田植歌

無下に越えんもさすがにと語れば、脇・第三とつゞけて三卷となしぬ。

此の宿の傍に、大なる栗の木蔭をたのみて、世をいとふ僧あり。橡ひろふ太山もか

(1)拾遺集「たよりあらばいかで都へ告げやらんけふ白河の關はこえぬと平兼盛」
(2)念珠・白河・勿來を東國の三關といふ。
(3)後拾遺集「都をば霞と共に立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關　能因」
(4)千載集「都にはまだ青葉にて見しかども紅葉散りしく白河の關　源頼政」
(5)清輔の袋草子に竹田大夫國行が白河の關を越える時、能因が「秋風ぞ吹く」とよんだ所からだといふので、裝束を改めた逸話が見える。
(6)盤梯山。
(7)須賀川の驛長、相良伊左衞門。乍單齋・巽庵等と號し俳諧を善くす。寶永二年歿、年七十八。
(8)名可伸。俳號栗齋。
(9)山家集「山ふかみ岩にせかるゝ水ためんかつ〳〵落つる櫟拾ふほど」

くやと聞に覺えられて、物に書きつけ侍る。其の詞、

栗といふ文字は西の木と書きて西方淨土にたよりありと、行基菩薩の一生杖にも柱にも此の木を用ひ給ふとかや。

世の人のみつけぬ花や軒の栗

等躬が宅を出でて五里ばかり、(1)檜皮の宿をはなれて淺香山あり。路より近し。此のあたり沼多し。(2)かつみ刈る比もやゝ近うなれば、いづれの草を花がつみとはいふぞと、人〻に尋ね侍れども、更に知る人なし。沼をたづね人にとひ、かつみ〳〵と尋ねありきて、日は山の端にかゝりぬ。二本松より右にきれて、(3)黑塚の岩屋一見し、福島にやどる。明くれば、しのぶもぢ摺の石をたづねて忍ぶの里に行く。遙か山陰の小里に、石なかば土に埋れてあり。里の童部の來りて教へける、昔は此の山の上に侍りしを、往來の人の麥草をあらして此の石を試み侍るをにくみて、此の谷につき落せば、石の面下ざまに伏したりといふ。さもあるべき事にや。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

(4)月の輪の渡を越えて、瀨の上といふ宿に出づ。佐藤庄司が舊跡は、左の山際一里ばかりに有り。(5)飯塚の里・(6)鯖野と聞きて、尋ね〳〵行くに、(7)丸山といふに尋ねあたる。これ庄司が舊館なり。麓に大手の跡など人のをしふるに任せて涙をおとし、又かたは

(1)今の日和田町。古名安積の宿。
(2)かつみは眞菰の異名といふ。
(3)二本松の東方半里。謠曲黑塚の傳說で名高い。
(4)福島から一里、松川の南岸にある渡し。
(5)飯坂の誤であらう。今の飯坂溫泉場。
(6)飯坂の南。佐場野。
(7)飯坂の西半里、佐藤庄司元治の大鳥城址といふ。

らの古寺に一家の石碑を殘す。中にも二人の嫁がしるし先づ哀なり。女なれどもかひ〳〵しき名の世に聞えつるものかなと袂をぬらしぬ。墮涙の石碑も遠きにあらず。寺に入りて茶を乞へば、こゝに義經の太刀、辨慶が笈をとゞめて什物とす。

笈も太刀も五月にかざれ紙幟

五月朔日の事なり。其の夜飯塚にとまる。溫泉あれば、湯に入りて宿をかるに、土座に莚を敷きて、あやしき貧家なり。灯もなければ、圍爐裏の火かげに寢所をまうけて臥す。夜に入りて、雷鳴り雨しきりに降りて、臥せる上より漏り、蚤蚊にせゝられて眠らず。持病さへおこりて消え入るばかりになん。短夜の空もやう〳〵明くれば、又旅立ちぬ。猶夜の餘波心すゝまず。馬かりて桑折の驛に出づる。遙なる行末をかゝへてかゝる病覺束なしといへど、羇旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なんこれ天の命なりと、氣力聊かとり直し、路縱橫にふんで、伊達の大木戸を越す。鐙摺・白石の城を過ぎ、笠島の郡に入れば、藤中將實方の塚はいづくの程ならんと人にとへば、これよりはるか右に見ゆる山ぎはの里を蓑輪・笠島といふ。道祖神の社、かたみの薄今にありと教ふ。此の頃の五月雨に道いと惡しく、身つかれ侍れば、よそながら眺めやりて過ぐるに、蓑輪・笠島も五月雨の折にふれたりと、

笠島はいづこ五月のぬかり道

(1)瑠璃光山醫王寺。眞言宗。
(2)佐藤繼信・忠信の戰死後、兩人の妻が甲冑を着て夫の姿に擬し、姑を慰めたといふ。
(3)晉の羊祜の歿後、百姓祜を慕つて峴山に碑を建てたが、それを見る者は皆流涕したので、墮涙碑と稱した故事。
(4)飯坂から一里餘。古の伊達驛。
(5)岩代から磐城に入る關門。
(6)名取郡の地名である。
(7)一條天皇の朝、勅勘を蒙つて陸奥守に貶せられたが、笠島道祖神前を下馬しないで通つた爲、落馬して死んだといふ。(源平盛衰記)
(8)西行が實方の塚でよんだ歌「朽ちもせぬその名ばかりを留めおきて枯野の薄かたみにぞ見る」(新古今)

(1)後拾遺集「武隈の松は二木を都人いかゞと問はゞ見き（三木）と答へむ　橘季通」
(2)奥儀抄に藤原元善が植ゑて以来二度うゑつぎ、その後孝義が伐つて橋に作つた事が見える。
(3)後拾遺集「みちの國に再び下りて後のたび武隈松も侍らざりければよみ侍りける　武隈の松はこのたびあともなし千歳をへてや我は來つらむ　能因法師」
(4)草壁氏。芭蕉の門人。江戸の住、元祿九年歿。
(5)嘉右衞門。畫號四鶴。貞門の俳人。
(6)仙臺の東郊。
(7)玉田は仙臺の東北郊・横野はその東にある。躑躅が岡は仙臺と宮城野の中間。散木集、俊頼「とりつなげ玉田横野の放れ駒つゝじの岡にあせみ咲くなり」
(8)古今集「みさぶらひみかさと申せ宮城野の木の下露は雨にまされり」この歌に因んで木の下の地名が出來たのである。

岩沼に宿る。

武隈の松にこそ目さむる心地はすれ。根は土際より二木にわかれて、昔の姿うしなはずと知らる。先づ能因法師思ひ出づ。往昔陸奥の守にて下りし人、此の木を伐りて名取川の橋杭にせられたる事などあればにや、松は此のたび跡もなしとは詠みたり。代ゝあるは伐りあるは植ゑつぎなどせしと聞くに、今はた千歳の形とゝのほひて、めでたき松のけしきになん侍りし。

武隈の松みせ申せ遅ざくらと、舉白といふものの餞別したりければ、

櫻より松は二木を三月ごし

名取川を渡りて仙臺に入る。あやめ葺く日なり。旅宿を求めて四五日逗留す。こゝに畫工加右衞門といふ者あり。聊か心あるものと聞きて知る人になる。此の者、年比さだかならぬ名どころを考へ置き侍ればとて、一日案内す。宮城野の萩茂りあひて、秋の氣色思ひやらるゝ。玉田・横野・躑躅が岡はあせび咲く頃なり。日影も漏らぬ松の林に入りて、こゝを木の下といふとぞ。むかしもかく露深ければこそ、みさぶらひみかさとは詠みたれ。藥師堂・天神の御社など拜みて、其の日はくれぬ。猶松島・鹽竈の所ゝ畫にかきて送る。かつ紺の染緒つけたる草鞋二足餞す。さればこそ風流のしれもの、こゝに至りてその實をあらはす。

あやめ草足に結ばんわらぢの緒

かの畫圖に任せてたどり行けば、奥の細道の山際に十符の菅あり。今も年ゝ十符の菅菰を調へて國守に獻ずといへり。

壺碑　市川村多賀城に有り

つぼのいしぶみは、高さ六尺餘、横三尺ばかりか。苔をうがちて文字幽かなり。四維國界の里數をしるす。此城、神龜元年、按察使鎮守府將軍大野朝臣東人之所レ置也。天平寶字六年、參議東海東山節度使同將軍惠美朝臣獨修造而十二月朔日と有り。聖武皇帝の御時にあたれり。昔よりよみ置ける歌枕多く語り傳ふといへども、山崩れ川落ち て道改まり、石は埋もれて土にかくれ、木は老いて若木にかはれば、時移り代變じて、其の跡たしかならぬ事のみを、こゝに至りて疑なき千歳の記念、今眼前に古人の心を閲す。行脚の一德、存命の悅び、羇旅の勞をわすれて、汨も落つるばかりなり。

それより野田の玉川、沖の石を尋ぬ。末の松山は寺を造りて末松山といふ。松のあひ〳〵みな墓原にて、羽をかはし枝を連ぬるちぎりの末も、終はかくの如きと悲しさもまさりて、鹽竈の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空聊か晴れて、夕月夜かすかに、籬が島もほど近し。蜑の小舟こぎつれて、肴分つ聲ゝに、つなでかなしもと詠みけん心もしられて、いとゞ哀なり。その夜目盲法師の琵琶をならして、奥淨瑠璃といふ物

(1)仙臺から鹽釜方面へ行く道。
(2)編目の十所ある幅廣い菅菰の稱。古來この邊の名產であつた。
(3)壺碑は陸奥七戸の北なる坪村に建てられたもので、とゝにいふのは多賀城碑である。しかし兩者は混同しても呼ばれてゐた。
(4)原本「數里」とある。今改む。
(5)朝獨（アサカリ）の朝字を脱したのだらうといふ。
(6)六玉川の一。鹽竈の南多賀城址附近。
(7)二條院讃岐の「沖の石の人こそしらね」（千載集）の歌に附會された石。
(8)古今集「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波もこえなむ」
(9)末松山寶國寺。
(10)白樂天の長恨歌「在レ天願作二比翼鳥一、在レ地願作二連理枝一」
(11)古今集「みちのくはいづくはあれど鹽がまの浦こぐ舟の綱手かなしも」

(1)幸若舞をいふ。

(2)伊達政宗。慶長十二年修造す。

(3)秀衡の三男、藤原忠衡。

(4)命は名に通用させたので令名、芳名の意。

(5)出典未詳。

(6)今の錢塘江。河口の潮の滿干が甚しく奇觀を呈する。

(7)杜甫、望嶽「諸峯羅立似兒孫」。兒孫の下に「を」字を脱せしか。

(8)奥深いさま。

(9)東坡、飲湖上初晴後雨「若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」によつたものか。

を語る。平家にもあらず、舞[1]にもあらず、鄙びたる調子うちあげて、枕近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えられる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守[2]再興せられて、宮柱ふとしく、彩椽(さいてん)きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱(あけ)の玉垣を輝かす。かゝる道のはて塵土の境まで、神靈あらたにましますこそ吾が國の風俗なれと、いと貴けれ。神前に古き寶燈有り。かねの戸びらの面に、文治三年和泉三郎[3]寄進とあり。五百年來の俤、今目のまへに浮びてそゞろに珍らし。渠は勇義忠孝の士なり。佳命[4]今に至りて慕はずといふ事なし。誠に人能[5]く道を勤め義を守るべし、名も亦是にしたがふといへり。日既に午に近し。舟をかりて松島に渡る。其の間二里餘、雄島の磯につく。

抑も事ふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭・西湖を恥ぢず。東南より海を入れて、江の中三里、浙江[6]の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏すものは波にはらばふ。あるは二重にかさなり三重に疊みて、左にわかれ右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫[7]愛すがごとし。松の綠こまやかに、枝葉汐風に吹きたわめて、屈曲おのづから矯めたるが如し。其の氣色(えしき)[8]窅然(かんぜん)として美人の顏(かんばせ)[9]を粧ふ。ちはやぶる神の昔、大山祇(おほやまつみ)のなせるわざにや。造化の天工、いづれの人か筆を揮ひ、詞を盡さん。

(1)京都妙心寺の僧。寛永十三年伊達忠宗に聘せられて瑞巖寺の中興となつた。

(2)江戸深川の住、醫を業とし和歌を善くした。

(3)宮城郡七ケ濱村菖蒲田の海岸。たゞしこゝは松島を言つたのであらう。

(4)僧名法身。入宋して經山の無準禪師に學び、歸朝して瑞巖寺を開いたと傳へられる。

(5)金碧の誤か。

(6)鳥羽天皇の御宇の人。庵を雄島に結び、十二年間苦行し法華經を六萬遍讀誦したといふ。

(7)孟子、梁惠王下「文王之囿方七十里、芻蕘者往焉、雉兎者往焉。」

(8)萬葉集「すめろぎの御代榮えむとあづまなるみちのく山に黄金花さく大伴家持」。なほこのみちのく山は小田郡で、これを金華山としたのは後世の附會說である。

雄島が磯は地つゞきて、海に出でたる島なり。雲居[1]禪師の別室の跡、座禪石など有り。はた松の木陰に世をいとふ人もまれ〳〵見え侍りて、落穗松笠など打烟(けぶ)りたる草の庵、閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら先づ懷かしく、立ちよるほどに月海にうつりて、晝のながめ又あらたむ。江上に歸りて宿を求むれば、窓を開き二階を作りて、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地はせらるれ、

松島や鶴に身をかれ時鳥　曾良

予は口を閉ぢて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかるる時、素堂松島の詩有り、原安適[2]松[3]が浦島の和歌を贈らる。袋を解いてこよひの友とす。且つ杉風・濁子が發句あり。

十一日、瑞岩寺に詣づ。當寺三十二世のむかし、眞壁[4]の平四郎出家して、入唐歸朝の後開山す。其の後に雲居禪師の德化によりて、七堂甍改りて、金壁[5]莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりける。彼の見佛聖の寺はいづくにやと慕はる。

十二日、平泉と心ざし、あねはの松、緒だえの橋など聞き傳へて、人跡まれに、雉[6]兎蒭蕘の行きかふ道そこともわかず、終に道踏みたがへて石の卷といふ湊に出づ。こ[7]がね花さくと詠みて奉りたる金華山海上に見渡し、數百の廻船入江につどひ、人家地を爭ひて、竈の煙立ちつゞけたり。思ひかけず斯る所にも來れる哉と、宿からんとす

れど更に宿かす人なし。漸くまどしき小家に一夜をあかして、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖(1)の渡り、尾(2)ぶちの牧、眞(3)野の萱原などよそ目に見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、(4)戸伊摩といふ處に一宿して平泉に至る。その間二十餘里ほどと覺ゆ。

三(5)代の榮耀一睡の中にして、大門のあとは一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鷄山のみ形を殘す。先づ高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高館の下にて大河に落入る。泰(6)衡等が舊跡は、衣が關を隔てて南部口をさし堅め、夷を防ぐと見えたり。偖も義臣すぐつて此の城にこもり、功名一時の叢となる。國破(7)れて山河あり、城春にして草青みたりと、笠うち敷きて、時のうつるまで泪を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼(8)房みゆる白毛哉　曾良

かねて耳驚かしたる二(9)堂開帳す。經堂は三(10)將の像をのこし、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散りうせて、珠の扉風にやぶれ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四(11)面新に圍んで、甍を覆うて風雨を凌ぐ。暫時千載の記念とはなれり。

(1)石の卷の北方。
(2)石の卷の對岸。
(3)今稻井村大字に眞野の地名が殘つて居る。
(4)登米（トヨマ）町。石の卷の北八里。
(5)清衡・基衡・秀衡の三代。
(6)秀衡の次男。
(7)杜甫、春望「國破山河在、城春草木深」
(8)義經の忠臣增尾十郎兼房。高館で義經自刃の後白髮を亂して奮戰した事が義經記に見える。
(9)經堂と光堂。
(10)清衡・基衡・秀衡。たゞし經堂の三像は文殊菩薩・優闍大王・善哉童子で、芭蕉はこれを誤つたらしい。
(11)正應元年、鎌倉將軍惟康親王、命じて金色堂に鞘堂を作らしめた。

五月雨のふりのこしてや光堂

南部道遙かに見やりて、岩手の里に泊る。小黑崎、みつの小島を過ぎて、鳴子の湯より尿前の關にかゝりて、出羽の國に越えんとす。此の道旅人まれなる處なれば、關守にあやしめられて、漸として關を越す。(1)大山を登つて日すでに暮れければ、(2)封人の家をみかけて舍を求む。三日風雨あれて、よしなき山中に逗留す。

蚤虱馬の尿する枕もと

主の云ふ、是より出羽國に大山を隔てて、道さだかならざれば、道しるべの人を賴みて越ゆべきよしを申す。さらばと云ひて人を賴み侍れば、究竟の若者、反脇差をよこたへ、樫の杖を携へて、我ゝが先に立ちて行く。けふこそ必ず危き目にも逢ふべき日なれと、辛き思ひなして後について行く。主の云ふにたがはず、高山森ゝとして一(3)鳥聲きかず、木の下闇茂りあひて夜行くが如し。雲端(4)に土ふる心地して、篠の中踏み分け〳〵、水をわたり岩に躓きて、肌につめたき汗を流して、最上の庄に出づ。かの案內せしをのこの云ふやう、此の道必ず不用の事あり、恙なう送りまゐらせて仕合したりと、悅びて別れぬ。あとに聞きてさへ胸とどろくのみなり。

尾花澤にて清(5)風と云ふ者をたづぬ。彼は富める者なれども、志いやしからず。都にも折ゝ通ひて、さすがに旅の情をも知りたれば、日比とどめて、長途のいたはりさま

(1)鳴子から羽前へ越える中山越。
(2)國境を守る人。たゞしこゝは國境に住む人といふ程の意。
(3)王安石、鍾山即事「一鳥不レ啼山更幽」
(4)杜甫、鄭駙馬宅宴三洞中二「已入二風塵一鞭(ツチフル)三雲端二」
(5)鈴木八右衞門。紅花の問屋で富家であつた。芭蕉の門人。

(1)すわる、寝る等の意の關東・東北地方の方言。
(2)萬葉集、十六「朝霞かひやが下になくかはづしぬびつゝありとつげむ子もがも」
(3)山形の東北三里。天台宗。
(4)貞門・談林の俳諧が夙くから行はれ、その風流の道がなほ忘れられないで居るとの意。
(5)碁點は鹽川村の西の渡津、隼はその北約一里半の富並村にある。

〳〵にもてなし侍る。

涼しさを我が宿にしてねまる也

這出でよかひ屋が下の蟾の聲

眉掃を俤にして紅粉の花

蠶飼する人は古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺といふ山寺あり。慈覺大師の開基にて、殊に清閑の地なり。一見すべきよし人〻の勸むるによつて、尾花澤より取つてかへし、其の間七里ばかりなり。日いまだ暮れず、麓の坊に宿かり置きて、山上の堂に登る。岩に巖を重ねて山とし、松柏年ふり、土石老いて苔滑かに、岩上の院〻扉を閉ぢて物の音聞えず。岸をめぐり岩を這うて佛閣を拜し、佳景寂寞として心すみ行くのみ覺ゆ。

閑かさや岩にしみ入る蟬の聲

最上川乘らんと、大石田と云ふ所に日和を待つ。こゝに古き俳諧の種こぼれて、忘れぬ花の昔をしたひ、蘆角一聲の心をやはらげ、此の道にさぐり足して、新古ふた道に踏み迷ふといへども、道しるべする人しなければと、わりなき一卷を殘しぬ。此の度の風流こゝに至れり。

最上川はみちのくより出でて、山形を水上とす。碁點・隼などいふおそろしき難所

(1)庄内と最上の境にある鵜山一帶をいふ。
(2)古今集「最上川上れば下る稲舟のいなにはあらずこの月ばかり」
(3)義經の臣常陸坊が仙術を得て隱れたと傳へられる。
(4)芭蕉の門人。露丸又呂丸と號す。羽黑山麓手向村の人。圖司は羽黑山の圖面繪像等を掌る役名で、姓は進藤、通稱左吉。元祿六年京都に客死す。
(5)寂光寺寶前院。羽黑山別當の住んだ寺。
(6)今の出羽神社。
(7)崇峻天皇の皇子能除太子と傳へる。
(8)延喜式にこの事見えず。
(9)これもかゝる傳說はあるが、風土記には見えない。
(10)江戸の東叡山寛永寺。

あり。板敷山の北を流れて、はては酒田の海に入る。左右山覆ひ、茂みの中に船を下す。これに稲積みたるをやいな舟といふならし。白絲の瀧は青葉のひま〳〵に落ちて、仙人堂岸に臨みて立つ。水漲つて舟あやふし。

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日、羽黑山にのぼる。圖司左吉といふ者を尋ねて、別當代會覺阿闍梨に謁す。南谷の別院に舍して、憐愍の情こまやかにあるじせらる。

四日、本坊において俳諧興行。

有りがたや雪をかをらす南谷

五日、權現に詣づ。當山開闢能除大師は、いづれの代の人といふことを知らず。延喜式に羽州里山の神社とあり。書寫、黑の字を里山となせるにや、羽州黑山を中略して羽黑山といふにや。出羽といへるも、鳥の毛羽を此の國の貢に獻ると風土記に侍るとやらん。月山、湯殿を合せて三山とす。當寺武江東叡に屬して、天台止觀の月明らかに、圓頓融通の法の灯かゝげそひて、僧坊棟をならべ、修驗行法をはげまし、靈山靈地の驗效、人貴びかつ恐る。繁榮長へにしてめでたき御山と謂つべし。

八日、月山に登る。木綿しめ身に引きかけ、寶冠に頭を包み、强力といふものに導かれて、雲霧山氣の中に氷雪を踏んで登る事八里、更に日月行道の雲關に入るかとあ

やしまれ、息絶え身こゞえて、頂上に臻れば、日沒して月顯はる。笹を敷き篠を枕として、臥して明くるを待つ。日出でて雲消ゆれば、湯殿に下る。

谷の傍に鍛冶小屋といふあり。此[1]の國の鍛冶靈水を選びて、こゝに潔齋して劍を打つ。終に月山と銘を切つて世に賞せらる。彼の龍[2]泉に劍を淬ぐとかや。干[3]將莫耶の昔を慕ふ、道に堪能の執あさからぬ事しられたり。岩に腰かけてしばし休らふほど、三尺ばかりなる櫻の蕾半ば開けるあり。降りつむ雪の下に埋れて、春をわすれぬ遲櫻の花の心わりなし。炎[4]天の梅花こゝに薫るがごとし。行[5]尊僧正の歌の哀れもこゝに思ひ出でて、猶まさりて覺ゆ。惣じて此の山中の微細、行者の法式として他言する事を禁ず。仍つて筆をとゞめて記さず。坊にかへれば、阿闍梨の需に依つて、三山順禮の句を短冊に書く。

涼しさやほの三日月の羽黑山

雲の峰幾つくづれて月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山錢ふむ道の泪かな　曾良

羽黑を立つて、鶴が岡の城下長[6]山氏重行といふ武士の家にむかへられて、俳諧一卷あり。左吉も共に送りぬ。川舟に乘りて酒田の湊に下る。淵[7]庵不玉といふ醫師の許を

(1)永暦の頃の鬼王丸といふものを祖とし、その子月山から代々相ついで刀工となつた。
(2)支那の汶南西平縣にある泉の名。その水で鍛淬された刀劍が堅利なので、後には利劍を龍泉ともいつた。
(3)吳王の命によつて干將がその妻莫耶と共に作つた二口の良劍。
(4)禪林句集「雪裏芭蕉摩詰畫、炎天梅蘂簡齋詩」
(5)金葉集「諸共にあはれと思へ山櫻花より外に知る人もなし」
(6)酒井侯の家臣。通稱五郎左衞門、字恒行。重行と稱して和歌を善くし又俳諧を嗜んだ。
(7)伊藤玄順。酒井侯の醫であつた。元祿十年歿。

宿とす。

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海に入れたり最上川

江山水陸の風光數を盡して、今象潟に方[1]寸を責む。酒田の湊より東北の方、山を越え磯を傳ひいさごを踏みて、其の際十里、日影やゝ傾ぶく比、汐風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山かくる。闇中に莫[2]作して、雨もまた奇なりとせば雨後の晴色又たのもしと、蜑の苫屋に膝を入れて雨の晴るゝを待つ。其の朝、天よく霽れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮ぶ。先づ能因島に舟をよせて、三年幽居の跡をとぶらひ、むかふの岸に舟をあがれば、花[4]の上こぐとよまれし櫻の老木、西行法師の記念を殘す。江上に御陵あり、神功后宮の御墓といふ。寺を干滿珠寺といふ。此處に行幸ありし事いまだ聞かず。いかなる事にや。此の寺の方丈に座して簾を捲けば、風景一眼の中に盡きて、南に鳥海天をさゝへ、其の影うつりて江にあり。西はむ[5]や〳〵の關路をかぎり、東に堤を築きて秋田にかよふ道遙かに、海北に構へて浪うち入るゝ所を汐ごしといふ。江の縱橫一里ばかり、俤松島にかよひて又異なり。松島は笑ふがごとく、象潟は怨むがごとし。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂をなやますに似たり。

(1)方々の美景を見盡して遂にこの象潟といふ方寸の地を殘すばかりに、旅路の果もおしつめて來たの意。象潟はこの旅中最も北の果で、ここから引返したからである。
(2)莫作は摸索に通ず。手さぐりして。
(3)蘇東坡、飲湖上初晴後雨「水光瀲灩晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把西湖比西子、淡粧濃抹總相宜」
(4)西行の歌と傳へる「象潟の櫻は波に埋もれて花の上こぐ蜑の釣舟」
(5)陸前と羽前との境にあつた關。

象潟の雨に西施がねぶの花　曾良

汐越や鶴脛ぬれて海すゞし

祭禮

象がたや料(1)理何くふ神まつり　美濃の國の商人　低耳

蜑の家や戸板を敷きて夕すゞみ

岩上に睢鳩の巣を見る

浪(2)こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の餘波日をかさねて、北陸道の雲に望む。遙ゝのおもひ胸をいたましめて、加賀の府まで百三十里と聞く。(4)鼠の關をこゆれば、越後の地に歩行を改めて、越中の國市振の關にいたる。此の間九日、暑濕の勞に神をなやまし、病發りて事を記さず。

文月や六日も常の夜には似ず

荒海や佐渡に横たふ天の河

今日は親知らず子知らず・犬もどり・駒返しなどいふ北國一の難所をこえて疲れ侍れば、枕引きよせて寢たるに、一間隔てて面の方に、若き女の聲二人ばかりと聞ゆ。年老いたるをのこの聲も交りて物語するを聞けば、越後の國新潟といふ所の遊女なりし。伊勢參宮するとて、此の關までをのこの送りて、あすは故郷にかへす文したゝめて、はかなき言傳などしやるなり。白波のよする汀に身をはふらかし、蜑の子の世をあさましう下りて、定めなき契日ゝの業因いかにつたなしと、物いふを聞く〳〵寢入りて、あした旅立つに、我ゝに向ひて、行方知らぬ旅路のうさ、餘り覺束なうかなしく侍れば、見えがくれにも御跡をしたひ侍らん、衣のうへの御情に、大慈のめぐみをたれて結緣せさせ給へと涙を落す。不便の事には侍れども、我ゝは所ゝにてとゞまる方多し、只人の行くに任せて行くべし、神明の加護必ず恙なかるべしと云ひすてて出でつゝ、哀れさ暫らく止まざりけらし。

一家に遊女もねたり萩と月

曾良に語れば書きとゞめ侍る。

黑部四十八か瀨とかや、數しらぬ川をわたりて、那古といふ浦に出づ。(3)擔籠の藤浪は春ならずとも、初秋の哀れとふべきものをと、人に尋ぬれば、これより五里磯づたひしてむかふの山陰に入り、蜑の苫ぶきかすかなれば、蘆の一夜の宿かすものあるまじと云ひおどされて、加賀の國に入る。

早稲の香や分け入る右は有磯海

卯の花山・くりからが谷を越えて、金澤は七月中の五日なり。爰に大阪よりかよふ商人何處といふ者あり。それが旅宿をともにす。

(1)象潟は殺生禁斷の地で、明神の祭には精進したといふ。
(2)後撰集「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山波こさじとは」元輔と詩經、關雎「關關雎鳩在二河之洲一窈窕淑女君子好逑」とによる。
(3)金澤。
(4)念珠關。羽前と越後との境。
(5)實は越後の國。

(1)新古今集「白波のよするなぎさに世をつくす蜑の子なれば宿も定めず」遊女の身の上にとつていふ。
(2)今の伏木港の東南一帶の浦をいふ。
(3)萬葉集「多祐の浦の底さへにほふ藻なみをかざして行かむ見ぬ人のため」

(1)小杉氏、通稱茶屋新七。元祿元年歿、年三十六。
(2)ノ松と號し、弟の爲に追善集西の雲を撰んだ。
(3)金澤の俳人一泉の少幻庵。
(4)赤地錦の鎧直垂の切。實盛が錦の直垂を着て戰つた事平家物語に見える。たゞし平家物語によれば平宗盛から賜はつたとある。

一笑[1]といふ者は、此の道にすける名のほのぐ聞えて、世に知る人も侍りしに、去年の冬早世したりとて、其[2]の兄追善を催すに、

塚も動け我が泣く聲は秋の風

ある[3]草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あかくと日は難面も秋の風

小松といふ所にて

しをらしき名や小松吹く萩薄

此の所太田の神社に詣づ。實盛が甲・錦[4]の切あり。往昔源氏に屬せし時、義朝公より賜はらせ給ふとかや。げにも平士の物にあらず。目庇より吹返しまで、菊唐草の彫りもの金をちりばめ、龍頭に鍬形打ちたり。實盛討死の後、木曾義仲願狀にそへて此の社にこめられ侍るよし、樋口の次郎が使せし事ども、まのあたり緣起に見えたり。

むざんやな甲の下のきりぐす

山中の溫泉に行くほど、白根が嶽あとに見なして歩む。左の山際に觀音堂あり。花山の法皇三十三所の順禮とげさせ給ひて後、大慈大悲の像を安置し給ひて、那谷と名づけ給ふとかや。那智・谷組の二字を分ち侍りしとぞ。奇石さまぐに、古松植ゑならべて、萱ふきの小堂岩の上に造りかけて、殊勝の土地なり。

石山の石より白し秋の風

溫泉に浴す。其の效有明[1]に次ぐと云ふ。

山中や菊はたをらぬ湯の匂

あるじとするものは久米之助[2]とて、いまだ小童なり。彼が父俳諧を好み、洛の貞室若輩のむかし爰に來りし比、風雅に辱しめられて、洛に歸りて貞德の門人となつて世に知らる。功名の後、此の一村判詞の料を請けずといふ。今更昔がたりとはなりぬ。

曾良は腹を病みて、伊勢の國長島といふ所にゆかりあれば、先立ちて行くに、

行き[3]くて倒れふすとも萩の原　曾良

と書き置きたり。行く者の悲しみ殘る者のうらみ、隻[4]鳧の別れて雲に迷ふがごとし。予もまた

けふよりや書付消さん笠の露

大聖[5]持の城外、全昌寺といふ寺に泊る。猶加賀の地なり。曾良も前の夜此の寺に泊りて、

終宵秋風きくや裏の山

(1)有馬の誤であらう。
(2)泉屋又兵衛の子。この時芭蕉から桃夭の號を與へられた。寶曆元年歿。
(3)山家集「いづくにか眠りくて倒れふきむと思ふ悲しき道芝の露」
(4)隻は雙の誤であらう。蒙求、李陵初詩「雙鳧俱北飛、一鳧獨南翔、子當留斯館、我當歸故鄉」。蘇武が李陵に別れる時の詩である。
(5)正しくは大聖寺。

(1)禪家で修業する僧衆の寮舎をいふ
(2)雲板ともいふ。唐銅製のもので、厨前又は齋堂にかけおき、衆僧に食事の時を報ずる爲に打鳴らすもの。
(3)鳥の道・消船集・東西夜話・宇陀法師等にもこの句を載せ、中七はすべて「出でばや寺に」となつて居る。
(4)吉崎の對岸濱坂の南一帶の松をいふ。
(5)この歌を西行の作とするのは單に俗傳のみで、文獻上の徴證はない。一に遍如上人の作とも傳へる。
(6)莊子、駢拇「駢ニ於足一者、連ニ無用之肉一也、枝ニ於手者一、樹ニ無用之指一也」
(7)松岡の誤。天龍寺は吉田郡松岡町にあり、曹洞宗。
(8)芭蕉の門人、十哲の一。立花氏通稱源四郎。研師を業とす。享保三年歿。
(9)機は畿の誤。詩經、商頌「邦畿千里、惟民所レ止」

と殘す。一夜のへだて千里に同じ。吾も秋風を聞きつゝ衆寮(1)に臥せば、曙の空近う讀經聲すむまゝに、鐘板(2)鳴つて食堂(3)に入る。けふは越前の國へと、心早卒にして堂下に下るを、若き僧ども紙硯を抱へ、階のもとまで追ひ來る。折ふし庭中の柳散れば、

庭掃きて出づるや寺に散る柳

取りあへぬさまして草鞋ながら書き捨つ。越前の境、吉崎の入江を舟に棹して、汐どしの松を尋ぬ。

終宵(5)嵐に波をはこばせて
月を垂れたる汐越の松　西行

此の一首にて數景盡きたり。若し一辯を加ふるものは、無用(6)の指を立つるがごとし。丸岡(7)天龍寺の長老、古きちなみあれば尋ぬ。又金澤の北枝(8)といふ者、かりそめに見送りて此處まで慕ひ來る。所〻の風景過さず思ひつゞけて、折節あはれなる作意などいふ。今既に別にのぞみて、

物書いて扇引きさく餘波かな

五十丁山に入つて永平寺を禮す。道元禪師の御寺なり。邦機(9)千里を避けて、かゝる山陰に跡をのこし給ふも、貴き故ありとかや。

福井は三里ばかりなれば、夕飯したゝめて出づるに、たそがれの路たどゝし。爰

(1)福井の連歌師櫻井元輔の門人。等栽は連歌の號で、俳號は笻景といふ。
(2)源氏物語、夕顔の卷「昔物語などにこそかゝる事は聞け」。夕顔の宿の風情を想ひやつて、その語をかり用ひたのである。
(3)孫明復、八月十四日「清樽素瑟宜ニ先賞一、明夜陰晴未レ可レ知」
(4)眞教。他阿彌陀佛と號したので、他阿上人と稱される。氣比神宮附近の沼に毒龍が住んで居たのを退散させる爲、僧尼と共に土砂を運んで之を埋めたのが砂持の起りであるといふ。

に等栽(1)といふ古き隱士あり。いづれの年にか江戸に來りて予を尋ぬ。遙か十とせあまりなり。いかに老いさらぼひてあるにや、將死にけるにやと、人に尋ね侍れば、いまだ存命してそこ〳〵と教ふ。市中ひそかに引入りて、あやしの小家に夕顔へちまの這ひかゝりて、鷄頭箒木に戸ぼそを隱す。さては此の内にこそと門を叩けば、佗しげなる女の出でて、いづくよりわたり給ふ道心の御坊にや。あるじは此のあたり何がしと云ふものの方に行きぬ。もし用あらば尋ね給へといふ。かれが妻なるべしと知らる。昔物語(2)にこそかゝる風情は侍れと、やがて尋ね逢ひて、其の家に二夜泊りて、名月は敦賀の湊にと旅立つ。等栽も共に送らんと、裾をかしうからげて、路の枝折とうかれ立つ。漸く白根が嶽かくれて、比那が嵩顯はる。あさむつの橋を渡りて、玉江の蘆は穗に出でにけり。鶯の關を過ぎて、湯尾峠をこゆれば、燧が城・歸山に初雁を聞きて、十四日の夕暮敦賀の津に宿をもとむ。其の夜月殊に晴れたり。明日の夜もかくあるべきにやと云へば、越路のならひ猶明夜(3)の陰晴はかりがたしと、あるじに酒すゝめられて、氣比の明神に夜參す。仲哀天皇の御廟なり。社頭神さびて、松の木の間に月のもり入りたる、おまへの白砂霜を敷けるが如し。往昔遊行(4)二世の上人、大願發起の事ありて、みづから草を刈り、土石を荷ひ、泥濘をかわかせて、參詣往來の煩なし。古例今に絶えず、神前に眞砂を荷ひ給ふ。これを遊行の砂持と申し侍ると、亭主の語

りける。

月清し遊行のもてる砂の上

十五日、亭主の詞にたがはず雨降る。

名月や北國日和さだめなき

十六日、空霽れたれば、ますほ[1]の小貝ひろはんと種の濱に舟を走す。海上七里あり。天屋[2]何がしといふもの、破籠小竹筒などこまやかにしたゝめさせ、僕あたま舟に取りのせて、追風時の間に吹きつけぬ。濱はわづかなる海士の小家にて、侘しき法華寺あり。こゝに茶を飲み酒をあたゝめて、夕暮の淋しさ感に堪へたり。

寂しさや須磨に勝ちたる濱の秋

波の間や小貝にまじる萩の塵

其の日のあらまし、等栽に筆をとらせて寺に殘す。露通[4]も此の湊まで出でむかひて、美濃の國へと伴ふ。駒にたすけられて大垣の庄に入れば、曾良も伊勢より來り合ひ、越人[5]も馬をとばせて、如行[6]が家に入り集まる。前川子[7]、荊口[8]父子、其の外親しき人々日夜とぶらひて、蘇生の者に逢ふがごとく、かつ悅びかついたはる。旅の物うさもいまだ止まざるに、長月六日になれば、伊勢の遷宮拜まんと又舟に乘りて、

蛤のふた見にわかれ行く秋ぞ

(1)眞赤な色をした貝の一種。山家集「汐染むるますほの小貝拾ふとて色の濱とはいふにやあるらむ」
(2)敦賀の廻船問屋、天屋太兵衞。俳號玄流。
(3)本隆寺。
(4)路通に同じ。芭蕉の門人。
(5)名古屋住。越智氏。蕉門十哲の一人。
(6)大垣の藩士。近藤氏。蕉門。
(7)大垣の藩士。宮崎氏。此筋・千川・文鳥の三子あり、共に蕉門。

四嵯峨日記

元祿四年夏洛西嵯峨にある去來の別墅落柿舍に滯在した時の日記である。四月十八日に始まり、五月四日に終つて居る。刊本は寶曆三年大和郡山の人魯玉が、『はせを翁嵯峨日記』と題して出したのが初めで、後ちその板木を用ひて『芭蕉翁俳諧四部錄』に收められた。又『蓬萊島』に「落柿舍日記」と題して收めたものも、本文は魯玉本によつて居る。なほ明治四十五年城田本が翻刻され、その他一二稿本の傳はるものがある。『一葉集』所載のものは寶曆版と若干異同があり、その方がむしろ本文としては正しい點もあるが、所據不明なので今は魯玉本の本文によつた。

元祿四辛未卯月十八日、嵯峨に遊びて、去來が落柿舍に至る。凡兆共に來りて、暮に及びて京に歸る。予はなほ暫くとゝむべきよしにて、障子つゞくり、葎引きかなぐり、舍中の片隅一間なる所伏所(ふしど)と定む。

机一ツ　硯　文庫　白氏集[1]

(1)白氏文集であらう。一葉集には「白氏文集」とある。

本朝一人一首　世繼物語　源氏物語　土佐日記

(1)六字堂宗惠編、寛文七年刊。詳しくは「松葉名所和歌集」といひ、全國名所の和歌を集錄したもの。

(2)嵯峨渡月橋の附近にある臨濟宗の寺。

(3)法輪寺。本尊虛空藏菩薩。

(4)事は平家物語に詳しい。

(5)漢の美人王昭君の育つた村。王昭君は胡地に赴いて死んだ。

(6)楚の襄王が夢に會したといふ巫山の神女を祀つた廟。

(7)凡兆の妻とめ女。

(8)原本「家ゝ」とあり、今一葉集により改む。

松葉集を置く。唐の蒔繪書きたる五重の器に、さまざまの菓子を盛り、名酒一壺、盃そへたり。夜の衾、調菜の物共、京より持ち來りて貧しからず。我貧賤を忘れて、清閑に樂む。

十九日、午半臨川寺に詣づ。大井川前に流れて、嵐山右に高く、松の尾の里につゞけり。虛空藏に詣づる人往きかひ多し。松の尾の林の中に、小督屋敷と云ふ有り。都て上下の嵯峨に三所あり。いづれか確かならん。彼の仲國が駒とめたる所とて、駒留の橋と云ふ此のあたりに侍れば、暫く是によるべきにや。墓は三軒屋の隣、藪の內に有り。標に櫻を植ゑたり。かしこくも錦繡綾羅の上に起臥して、終に藪中の塵芥となれり。照君村の柳、巫女廟の花の昔も思ひやらる。

うきふしや竹の子となる人の果
嵐山藪の茂りや風の筋

斜日に及んで落柿舍に歸る。凡兆京より來る。去來京に歸る。宵より臥す。

廿日、北嵯峨の祭見んと、羽紅尼來る。去來途中の吟とて語る。

つかみあふ子共の長や麥畑

落柿舍は昔の主の作れるまゝにして處〻頽破す。中〻に作りみがかれたる昔のさまより、今のあはれなるさまこそ心とゞまれ。彫せし梁、畫ける壁も、風に破れ雨にぬれて、奇石怪松も葎の下にかくれたる。竹緣の前に柚の木一本花芳しければ、

柚の花にむかし忍ばん料理の間
子規大竹藪をもる月夜
またやみん覆盆子あからめ嵯峨の山　尼羽紅

(1)一本「かくれたるに」

(2)向井元端。一葉集に「去來兄の方より」

(3)一葉集「夜半過る頃よりも」

去來兄の室より菓子調菜の物など送りて、今宵は羽紅夫婦をとゞめて、蚊屋一はりに五人こぞり臥したれば、夜もいねがたくて、夜半過よりも各起き出でて、晝の菓子盆など取り出して、曉近きまで話し明す。去年の夏凡兆が宅に臥したるに、二疊の蚊屋に四國の人臥したり。思ふ事四つにして、夢もまた四種と、書き捨てたる事どもなど云ひ出して笑ひぬ。明くれば羽紅・凡兆京にかへる。去來なほとゞまる。

廿一日、昨夜いねざりければ心むづかしく、空のけしきも昨日に似ず、朝よりうち曇り、雨をり〳〵音信るれば、終日眠り臥したり。暮に及びて去來京に歸る。今夜は人もなく、晝臥したれば夜も寢られぬまゝに、幻住庵にて書きすてたる反故を尋ね出して、慰みに清書。

廿二日、朝の間雨降る。今日は人もなく、淋しきまゝにむだ書して遊ぶ。

其の言、

(1)一本によればこの「喪に居る者」と次の「酒をのむ者」との二句はもと草稿の姿文で、それを次の二句に收めたものらしい。隨つて贅は削除すべきである。一葉集には四句あげ、最後の一句が「徒然に住するものはつれ〴〵を主とす」となつてゐる。

(2)山家集「とふ人も思ひたえたる山里の淋しさなくば住み憂からまし」

(3)山家集「山里にたれを又こは呼子鳥ひとりのみこそすまんと思ふに」

(4)木下勝俊。豐臣秀吉の妻北政所の兄。

(5)擧白集、山家記「やがてこゝを半日とす。客はその靜かなる事を得れば、我はその靜かなるを失ふに似たれど」

喪に居る者は悲をあるじとし、
酒をのむ者は閑をあるじとす。
愁に住する者は愁をあるじとし、
喪に住するものは喪をあるじとす。

淋しさなくばうからましと西上人のよみ侍るは、淋しさをあるじなるべし。又よめる、

山里にこはまた誰をよぶこ鳥
獨すまんと思ひしものを

獨すむ程面白きはなし。長嘯隱士の曰く、客は半日の閑を得れば主は半日の閑を失ふと。素堂此の言葉を常に憐れむ。予もまた、

うき我を淋しがらせよかんこ鳥

とは、ある寺に獨り居て云ひし句也。　（以下略）

五　幻住庵記

この記は諸書に採錄されて居るが、元祿四年刊『猿蓑』に「幻住庵記　芭蕉翁」として收められたのが最も古く、これには向井去來の兄震軒の「題芭蕉翁國分山幻住庵記之後」といふ序井詩があり、「元祿庚午仲秋日」と識されてある。而して支考の『和漢文操』（享保十二年刊）に「祖翁に幻住庵の文は三通ありて、始の一通は落柿舍にあり、中の一通は此の賦なり、終の一通は猿蓑集に出て世にしれる幻住庵ノ記なり。云々」と言つて、同書卷之一賦類の中に「幻住庵ノ賦」を收めてあるが、その本文には甚しい異同がある。支考はこれについて、「誠に此賦の花やかなる彼ノ記にはまさりて面白きに、是を捨て彼を取れる百世の師道を仰がざらんや」と評して居る。又池永大蟲の編した『芭蕉翁眞蹟拾遺』に、「右半切横物一軸ノヨシ、双雀庵ヨリ寫しこす」と附記して收めた「幻住庵記」も、『猿蓑』・『和漢文操』所收のものとは異り、これが落柿舍に傳はつたといふ初稿かと見られて居る。以上三種の文中、初稿と推定されてゐるものと、「幻住庵ノ賦」とはほゞ文脈が同じく、共に最後に秋の頃まで幻住庵に住んで居た事を述べて居る。だから『猿蓑』の定稿も、やはり震軒の文の成つたのとほゞ同じ頃に出來上つたものと思はれる。卽ち三種とも元祿三年七、八月頃の作と推定される。

幻住庵は菅沼氏の跡が絶えた後荒廢に歸したが、寶曆三年に至り雲裡坊が義仲寺の境內に再興した。その由來については、數代の後幻住庵住となつた惠逸が、弘化三年に撰んだ『夏こたち集』に詳しく述べ、なほ雲裡坊から傳來の芭蕉眞蹟「幻住庵記」を摸刻して揭げて居る。現に大津村田虎次郎氏の藏する眞蹟は、卽ち右の原本と認められる。又芭蕉三十三回忌集『放生日』（野坡撰、享保十一年刊）に

各志の法施を義仲寺に殘す。（中略）幻住庵の古跡を尋ね侍り。かのつゝし咲殘り、山藤松に

かゝり、郭公しは〳〵過るなと書給へるも、今さら卯月の空まのあたりにうこきて、おのおの泪數行に及へり。橘治かたに有る幻住庵記の草稿も、いかなる願にかとゝのへ給ひけんと、そゝろに時をうつして立さり侍る。

とあつて、當時の幻住庵のさまも窺はれ、又記の草稿が京都の書肆橘屋治兵衛の許に傳はつてゐた事も知られる。『和漢文操』が橘屋から出版されて居る事を思へば、「幻住庵ノ賦」は即ち『放生日』にいふ「幻住庵記の草稿」によつたのではあるまいか。

この記はその後『風俗文選』を初め、諸書に收められて居るが、多くは『猿蓑』によつたものである。今こゝにあげた本文も、同じく『猿蓑』によつた。なほこの記の註釋として、田喜庵護物の『あしのひともと』(文政十年刊)があり、出典故事を探る事が詳密である。又閑日庵鷗里の『三四考』(天保九年刊)の中にも「幻住庵記解」があり、樨柯坊空然の『猿蓑さがし』(文政十一年刊)もこの記の註釋に及んで居る。今本文は『猿蓑』による。

(1)山の半腹をいふ。
(2)唯一神道の家、吉田家。
(3)兩部神道。本地と垂跡を說く。

石山の奥、岩間のうしろに山あり、國分山と云ふ。そのかみ國分寺の名を傳ふなるべし。麓に細き流を渡りて、翠微に登る事三曲二百歩にして、八幡宮立たせ給ふ。神體は彌陀の尊像とかや。唯一の家には甚だ忌むなる事を、兩部光を和らげ利益の塵を同じうし給ふも又たふとし。日比は人の詣でざりければ、いとゞ神さび物靜かなる傍に、住み捨てし草の戸あり。蓬根笹軒をかこみ、屋根もり壁落ちて、狐狸ふしどを得たり。幻住庵と云ふ。あるじの僧何がしは、勇士菅沼氏曲水子の伯父になん侍りしを、今は八年ばかり昔になりて、正に幻住老人の名をのみ殘せり。予又市中を去ること十年ばかりにして、五十年やゝ近き身は、蓑蟲の蓑を失ひ、蝸牛の家を離れて、奥羽象潟の暑き日に面をこがし、高すなご歩みぐるしき北海の荒磯にきびすを破りて、今歳湖水の波に漂ふ。鳥の浮巣の流れとゞまるべき蘆の一本の陰たのもしく、軒端茨きあらため、垣根結ひそへなどして、卯月の初めいと假初に入りし山の、やがて出でじとさへ思ひそみぬ。さすがに春の名殘も遠からず、躑躅咲き殘り、山藤松にかゝりて、時鳥しば〳〵過ぐるほど、宿かし鳥の便りさへあるを、木つゝきのつゝくともいとはじなどそゞろに興じて、魂吳楚東南に走り、身は湘瀟洞庭に立つ。山は未申にそばだち、人家よき程に隔り、南薰峯よりおろし、北風海を浸して涼し。日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞こめて、城あり橋あり、釣たるゝ船あり。笠取に通ふ木樵の聲、麓の小田に早苗とる歌、螢飛びかふ夕闇の空に水鷄のたゝく音、美景物として足らずといふ事なし。中にも三上山は士峯の俤にかよひて、武藏野の古きすみかも思ひいでられ、田上山に古人をかぞふ。さゝほが嶽、千丈が峯、袴腰といふ山あり。黒津の里はいとくろう茂りて、網代守るにぞとよみけん萬葉集の姿なりけり。猶眺望くまなからんと後の峯に這ひのぼり、松の棚つくり、藁の圓座を敷きて猿の腰掛と名づ

(1)膳所藩士菅沼修理定知。法名幻住宗仁居士といふ。曲翠の父定澄の兄。
(2)膳所の藩士。通稱外記。曲水後曲翠と號し、又馬指堂の號がある。享保二年奸臣を斬つて自盡した。
(3)四十七歳。
(4)元祿三年。
(5)山家集「吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらん」
(6)燕をいふ。
(7)杜甫、登岳陽樓詩「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南拆、乾坤日夜浮」
(8)黃山谷、題鄭防畫夾詩「惠崇煙雨歸船、坐我瀟湘洞庭」、欲喚扁舟歸去、故人言是舟中」
(9)膳城の城。
(10)瀨田の橋。
(11)富士山。
(12)猿丸太夫の古跡と稱するものがある。
(13)この歌萬葉集には見えぬ。近江輿地志略に古歌として引いた「田上や黑津の庄の瘦男あじろ守るとて色の黑さよ」を誤つたものか。

く。彼の海[1]棠に巣をいとなび、主簿峯に庵を結べる王翁・徐佺が徒にはあらず。唯睡癖山民となつて、辱[2]顔に足をなげ出し、空[3]山に虱を捫つて坐す。たま〳〵心まめなる時は、谷の清水を汲みて自ら炊ぐ。とく〳〵[4]の雫を佗びて、一爐の備へいとかろし。はた昔住みけん人の、殊に心高く住みなし侍りて、たくみ置ける物ずきもなし。持佛一間を隔てて、夜の物をさむべき處などいさゝかしつらへり。さるを筑紫高良山[5]の僧正は、加茂の甲斐何がしが嚴子にて、このたび洛にのぼりいまそかりけるを、或人をして額を乞ふ。いとやす〳〵と筆を染めて、幻住庵の三字を送らる。頓て草庵の記念となしぬ。すべて山居といひ旅寢といひ、さる器たくはふべくもなし。木曾の檜笠、越の菅蓑ばかり、枕の上の柱に掛けたり。晝は稀〻とぶらふ人〻に心を動かし、あるは宮守の翁、里のをのこども入り來りて、ゐのしゝの稻くひあらし、兎の豆畑にかよふなど、我が聞きしらぬ農談[6]、日既に山の端にかゝれば、夜座靜かに月を待ちては影を伴ひ、燈[7]を取つては罔兩に是非をこらす。かくいへばとて、ひたぶるに閑寂を好み、山野に跡をかくさむとにはあらず。やゝ病身人に倦んで世をいとひし人に似たり。つら〳〵年月の移りこし拙き身の科を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは佛[8]蘿祖室の扉に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞じて、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる。樂[10]天は五臟の神をやぶり、老杜[1]は瘦せたり。賢愚文質のひとしからざるも、いづれか幻の栖ならずやと思ひ捨てて臥しぬ。

先づたのむ椎の木もあり夏木立

(1)黄山谷、題潛峰閣詩「徐孝海棠巢上、王翁主簿峯庵」。註に「徐佺樂道隱於藥鈴中、家有海棠數株、結巢其上、時與客飲其間。又王道人巢禪四方、歸結屋於主簿峰上、嘗有毛人、至其間、問道」
(2)山の幾立つさま。
(3)石林詩話「青山捫虱坐」
(4)西行の歌と傳へる「とく〳〵と落つる岩間の苔清水くみほすほどもなき住ひかな」
(5)賀茂の祠官藤木甲斐守敦直。書家で賀茂流又甲斐流といふ。高良山の僧正はその子寂源一如僧正、高良山蓮臺院主であつた。
(6)朱晦菴、雲谷雜詠「野人報酒來、農談日西夕」
(7)莊子、齊物篇「罔兩問景曰、蘧子行、今子止、蘧子坐、今子起、何其無特操一矣」。註に「罔兩景外之微陰也」
(8)惠能禪師語錄「吾三十而窺佛蘿祖室」
(9)風俗文選等に「たよりなき」
(10)白樂天、思舊「詩役五臟神、酒汨三丹田」

(1)李白、戲贈杜甫「飯牛山頭逢杜甫、頭戴笠子日卓午、借問別來太瘦生、總爲從前作詩苦」
(2)本文は三日月日記所收のものによつた。元祿五年の作。
(3)陶淵明、飲酒詩「采菊東籬下」
(4)王子猷が竹を愛して「一日も此君無かるべけんや」と言つた故事。
(5)元祿二年の奥の細道の行脚。
(6)西行の歌「こゝをまた我が住みうくて浮れなば松はひとりにならんとすらん」
(7)「三とせ」の誤。芭蕉が再び江戸に歸つたのは元祿四年の秋である。

六　芭蕉を移す詞

菊[3]は東籬に榮え、竹[4]は北窓の君となる。牡丹は紅白の是非にありて、世塵にけがさる。荷葉は平地に立たず、水清からざれば花咲かず。いづれの年にや、栖を此の境にうつす時、芭蕉一もとを植う。風土芭蕉の心にや適ひけん、數株の莖を備へ、其の葉茂り重なりて庭をせばめ、萱が軒端も隱るばかりなり。人呼んで草庵の名とす。舊友・門人ともに愛して、芽をかき、根を分ちて、所〻に送る事年〻になんなりぬ。一年[5]みちのくの行脚思ひ立ちて、芭蕉庵すでに破れんとすれば、かれは籬の隣に地をかへて、あたり近き人〻に霜の覆ひ、風のかこひなど返す〳〵頼み置きて、はかなき筆のすさびにも書き殘し、松[6]はひとりになりぬべきにやと、遠き旅寢の胸にたゝまり、人〻の別れ、芭蕉の名殘、一方ならぬ佗しさも、終に五[7]とせの春秋を過して、再び芭蕉に

(1)元祿五年。

(2)支那浙江省の錢塘江。

(3)隅田川の下流、今の新大橋と永代橋との間。

(4)莊子、山木篇による。

(5)唐の書家。初め家が貧しい爲芭蕉を植ゑてその葉を紙の代用としたといふ。

(6)宋の人、名は載、字は子厚。その詩に「芭蕉心盡展新枝」「新卷新心暗隨已」、顧學新心養新德」「旋隨新葉起新知」

(7)本文は芭蕉庵小文庫・今日の昔・風俗文選等に出づ。今風俗文選による。元祿五年の作。

涙をそゝぐ。(1)ことし五月の半ば、花橘のにほひもさすがに遠からざれば、人々の契りも昔にかはらず。猶此のあたりえ立ちさらで、舊き庵もやゝ近う、三間の茅屋つきづきしう、杉の柱いと清げに削りなし、竹の枝折戸やすらかに、葭垣厚くしわたして、南に向ひ池に臨みて水樓となす。地は富士に對して、柴門景を追うてなゝめなり。浙(2)江の潮、(3)三股の淀に湛へて、月を見る便りよろしければ、初月の夕より、雲をいとひ雨をくるしむ。名月のよそほひにとて、先づ芭蕉を移す。其の葉廣うして琴を覆ふに足れり。或は半ば吹き折れて、鳳鳥の尾をいたましめ、青扇破れて風を悲しむ。たまゝ花咲けども花やかならず。莖太けれども斧にあたらず。かの山(4)中不材の類木にたぐへてその性たふとし。僧(5)懷素は是に筆をはしらしめ、張(6)横渠は新葉を見て、修學の力とせしとなり。予その二つをとらず。たゞこの陰に遊びて、風雨に破れやすきを愛するのみ。

七閉(7)關の說

色は君子の惡む所にして、佛も五戒のはじめに置くといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、哀なるかたゞくも多かるべし。人(1)しれぬくらぶの山の梅の下ぶしに、思ひの外の匂ひにしみて、忍(2)ぶの岡の人目の關ももる人なくば、如何なるあやまちをか仕出でむ。あ(3)まの子の浪の枕に袖しをれて、家を賣り身を失ふためしも多かれど、老の身の行末をむさぶり、米錢の中に魂を苦しめて、物の情を辨へざるには、はるかにまして罪ゆるしぬべく、人(4)生七十を稀なりとして、身の盛なる事は、わづかに二十餘年也。初(5)めの老の來れる事、一夜の夢の如し。五十年六十年の齡かたぶくより、あさましうくづをれて、宵寢がちに朝起きしたる寢覺の分別、何事をかむさぶる。愚かなる者は思ふ事多し。煩惱增長して一藝すぐるゝものは、是非の勝るゝもの也。是をもて世の營みに當てて、貪慾の魔界に心を怒らし、溝洫に溺れて生かすこと能はずと、南(6)華老仙の唯利害を破却し、老若を忘れて閑にならむこそ老の樂とは云ふべけれ。人來れば無用の辯有り、出でては他の家業を妨ぐるも憂し。尊(7)敬が戸を閉ぢて、杜(7)五郎が門を鎖さむには。友なきを友とし、貧しきを富めりとして、五十年の頑夫自書し、自ら禁戒となす。

あさがほや晝は鎖おろす門の垣

(1)古今集「梅の花匂ふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける」

(2)忍ぶの浦の誤か。新古今集「うちはへて苦しきものは人目のみ忍ぶの浦のあまのたく繩」。徒然草「忍ぶの浦のあまの見るめも所せく」

(3)新古今集「白波のよするなぎさに世を過すあまの子なれば宿も定めず」

(4)杜甫、曲江詩「酒債尋常行處有、人生七十古來稀」

(5)初老は四十歳をいふ。

(6)莊子。

(7)孫敬の誤。孫敬字は文寶、常に戸を閉ぢて讀書し、睡れば繩を首にかけこれを梁上に吊して覺めるやうにしたといふ。(蒙求)

(8)類昌の人。門を出でざる事三十年に及んだといふ。(宋史)この故事長嘯子の文「うなゐ松」に引いてあるので、芭蕉はそれによつたのであらう。